

1991

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年十二月一日發行(每月一回二日發行)

永樂町人編輯



十二月號

【號四十九第】

三中井の商品券

三中井の商品券は

一、桐箱若しくは紙箱入にして外見も亦る頗る體裁よろしう御座います
一、御進物品御選擇の御心配なく至極重寶に御座います。

一、壹圓以上如何程にても御望みに從ひ調製致します。

一、京城、釜山、大邱、平壤、元山、木浦、晉州、鳥致院、京都、大垣、東京の本支店共通で御座いますから極めて御便利であります。

一、各本支店所在地への御進物は最も安全に御先様へ御届け申上ます。

一、各地への御進物は御指圖の通り何處なりと迅速に御送り申上ます。

故に三中井の商品券は御贈答用品として最も適當で御座います

京 城 本 町



株式會社

三中井吳服店

歳暮景品大賣出し

十二月一日より

同三十日まで

△歳暮の御贈答にも

△正月の御仕度にも

丸一の呉服に御選定の程願いますそ
して幸運は何人様にも

壹等 桐箆笥 一棹

貳等 茶 棚 一組

參等 火鉢 一對

其の他十三等迄空簍無し
御買上二圓毎に景品券進呈

商品券

便利で重寶な

然も理想的な御贈答品

京城本町

丸一呉服店

電話 本六三五番
局二〇九一

十二月一日ヨリ三十一日マデ
年末大賣出し



御贈答用として、最も優雅

な商品券御調進申上候

商品券贈呈

何卒御利用被下度候

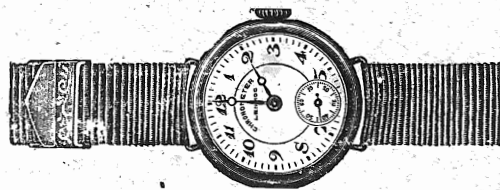
ダイヤモンド

ユビワ

貴金屬装身具

白金、金腕巻時計

逸品取揃へ居り候
御高覽被下度候



京城本町二

標準時計 村木時計店

電話本局 四七七二

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼
漢陽高麗焼
三和編

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

金物一切

京城本町三ノ三三

近藤安吉商店

電話 本一五六二番
本三六二番

株式會社 大澤商會京城支店

京城本町壹丁目

電話 本長三三九番
局長四八〇番

振替 京城二二一番

時計金銀 青銅 及 材料一切 屬 幻燈器

十二月號目次

牧場生活の思ひ出	總督府殖産局	角田	鈴木
晩秋の雑	總督府警務局	田田	美廣
追筆の雑	京城第二高普	方合	朝正
村義州へ行く	京城府醫專	早島	榮氏
新義州へ行く	京城府醫專	佐藤	三氏
ブリックシヨ	鐵道局	新田	伊氏
偉人加藤友三郎	大阪朝日支局	高田	一郎氏
鴨書脱線	遼東新報支局	高橋	深氏
駿馬痴漢を乗せて	總督府警務局	高橋	胤氏
偶作數句	漢城銀行	橋本	義氏
舊安寺村雜筆	朝鮮銀行	本島	種氏
京城つれく草	朝鮮銀行	宇田	氏
靈胎たより	燃料研究所	市邊	氏
眞の雜筆	渡邊皮膚科	井上	氏
雜筆の値打	朝鮮佛教團	前田	氏
芝居(中)	京取市場	柄澤	氏
偶子の間違ひ	李王職	山田	氏
帝展招待日の感想	朝鮮日報社長	篠田	氏
京義線車中から	朝鮮新聞社	久松	氏
年の暮れ	京城日々新聞社	別府	氏
財界時事一瞥銀改革	東京鐵道監査役	堀出	氏
東京雜筆	東拓京城支店	下出	氏
山とところ	帝國歐米特派員	井上	氏
八年振りの京城	京城女子技藝校	片岡	氏
生死の岐路(下)	元町小學校	鉦鹿	氏
悲爲の物語	鐵道局	今村	氏
KIWANAEIBUTSU	中央朝鮮協會	川上	氏
不筆啓上	朝鮮佛教主筆	川島	氏
落馬の洗禮	朝鮮佛教主筆	中村	氏
酒禮具	總督府醫專	松崎	氏
玩から陸を見る	遞信局	松崎	氏
少年芝居	京城日日新聞社	森崎	氏
獻おも人間だ	總督府圖書館	大浦	氏
迷想冗記	京城ふた昔會	廣村	氏
妻君禮讚	殖産銀行	丸中	氏
野球審判迷語	北村皮革店	北村	氏
二杯の鑑鮑			

牧場生活の

思ひ出

鈴木竹麿

牧場と云ふと、其の感じが何だか直ぐに詩的に考へられて、恰も『ミレー』の繪畫の如き気分になつて仕舞ふ。成る程牧場は詩的である場合も多いが、然し雨の日や風の吹き荒む時、又は雪を踏んで牧場廻りをやる時などは、詩を通り越して泣き度くなる場合も少くない。

勿論牧場は客觀的には詩的にも感じられませうが、牧場生活の人にはさう簡單には行かない。たゞ牧場生活を営んだ私のやうな経験のあるものが、更らに此の生活に『オールゾオアール』を告げ、都會生活に這入つて見ると、過去の牧場生活が一篇の詩的生活であつたな——と追懐が深々と浮んで來ます。人生に何が有難いかと云ふと『偽りなき物こそ尊く懐かしきものは無い』、詩人も、美術家も自然に親み、自然にあこがるゝことは、恐らく偽りなき實體に觸れんが爲めの努力ではないでせうか大地に生棲する無邪氣な、而して率直な、可愛い家畜の群れと毎日親み會ふ生活こそ、吾等畜産家の眞の藝術であり、生命ではあるまいか。其處に何等の術策も、虚飾も虚偽もなき、白き百合の花の如き純なる牧場生活こそ、これぞ吾等の尊き天の賜物である。私の牧場生活は早や二昔の物語りと成つて仕舞ふたが、今でも其光景が時に觸れ夢に表はれて來るので、今

其の夢を辿り、追想の一、二を書いて見る。

六月より十月の半ば頃までは、牛や馬を山に放牧します。此の約百八十日間位を放牧期間と稱します。牛馬は全然黙然として、夜は森林を厩舎として寝ます。私共の生活は、朝の五時頃には必ず乗馬で昨夜牛馬の寝た場所に參ります。

而して牛馬の頭数を調べたり、異常の有無を検査したりして、八時頃小舎に歸り、朝食を終ると再び牛馬の居る處に行きます。其時は腰に『山刀』をさし、櫛の小袋を『さげ』て出懸けるのです。山刀は樹の枝や、蔓を拂ひ取る爲め、櫛は動物に嘗めさせる爲めです。

『喇叭』も持つて行きます。是を吹くと牛馬は集まつて來ます。或る時次の様な出來事に會ひ、すんの事に死を免れたことがありました。それは晝時分になつて喇叭を高く鳴らした處が、向ふの山腹に草を食ふて居つた馬が百數十頭大急ぎで駈けて來ました。私の周圍には馬の頭が幾十となく並んで押し合ひへし合ひ、後から後から其數が増して來る。私も段々後ろの方に壓されて仕舞ふて、アツト云ふ間に十幾丈の谷に眞ッ逆様に落ち『ウーン』と氣絶したことがありました。是れも二昔しの夢と成りました。櫛ではまた面白い話があります。私の居つた牧場は五千町歩位ありましたので、牧場の周圍には數ヶの村落が點在して居るので、部落民は牧場を迂回することは大體遠くなるので、彼此の村民は牧場の木戸を潛つて交通して居りました。處が田舎の魚賣が駄馬に櫛を積んで、牧場の眞ん中を通り抜け様と試みたもので

【 二 】

す。處が丁度放牧してあつた牛馬の大群と遭ふたのですからたまりません。魚商は牛馬の包圍攻撃に遭ふて積んで來た櫛は踏まれ、嘗められ、果ては櫛を負ふた駄馬までも嘗められると云ふ騒ぎで魚賣りは私共の居る監視舎に悲鳴を揚げて駆け込んだことがありました。是れも昔の夢と消えました

私共の監視舎は谷川の側に建てゝあります。櫛を以て清流を風呂桶に導き、火を炊き放しにして一日の勤務に服すべく牛や馬の尻を追ふのです。夕方に歸ると風呂加減は上々吉と云ふ處です。看は谷川より岩魚を釣ります。大自然の高原に於て彼方の山の端よりあがる團々たる清澄限りなき月を賞しながら、湯上りに岩魚を肴に登歸りの歌でも唱ひながら夕食にあり付く気分は一しほの味ひで、此の味ひは牧場生活ならではの到底味はくれぬ詩的生活です。是も亦一場の夢と消えて、私は再び俗界に降りました。

◆立雲翁の書

吉田 莊 一

◎平田百貨店で經營してゐる平田旅館では、立雲居士頭山さんの書なら、ナンボでも買ひ込むといふ評がある。

◎そのワケを訊いて見ると女中頭のお何さん、うぶ聲を博多に揚げた剛の者で、軸物や額は『天下の豪傑、あたいの友人の立山はんに限りやす』

◎してまた主人公は、どうかといふと『お何はん、何分頼みまつせ、ワテ書と來ては、皆目南北がわからんよつて』は徹底々々。

て見廻り、御陰で想像以上に為漢

晩秋雜唱

角 田 廣

何といふひろき心ぞうち仰ぐ澄み
わたりたる秋の天空です。

晩秋の澄みたる空のはてしなし
ろく光れるは野川なりけり。

黄ばみたる草をしきつゝ思ふこと
みな晩秋の空につけり。

はてしなく晴れし空かなはてしな
く墓地のつゞける小丘なりけり。

このあたり丘とし見れば墓地はつ
ゞくかなしき國かな秋の日は照る

かくばかり悲しき威士士をつくりた
る民人の顔見れば涙わりなし。

禿山のふもと土肌あらはにも野菊
は咲けりかなしき國ばら。

黙々とたゞ忍従にこの國のひとの
心よりさみしきはなし。

わりなくも落つる涙ぞ人々はたゞ
パンのみに生く事なりけり。

いづくまでつゞけるみちか秋の日
の照りしける野をただ一人してゆ

もくねんと地上歩める一人ありし
づかに空に秋の日はあり。

ことごとく草は穂にいで草の實の
ゆくにこぼれてあはれなりけり。

一人ゆく秋の野中のくぼむべに煙
草を吸へば青き煙する。

煙草吸ふべく燐寸をすれば秋の日
の眞雪のなかに人は小さし。

秋の野を眞雪ゆきつゝ思ふことす
べて食すことぞ淋しかりける。

夕ぐれの野川に月のてりそめぬ我
子の姿のまのあたり見ゆ。

くれて吹く風は冷たしもの言はず
つながらるゝまゝに牛はありにけり

たまらなき心となりて野につなぐ
夕ぐれのなかの牛の顔みける。

一聲を牛長なげば夕の野のあちで
もこちでも牛の長鳴く。

夕ぐれの野に長鳴ける牛の聲にと
がりし心やゝなごみけり(一一、
九日)

巴里はがき

高木背水

八月四日巴里に着きました。但
し四度目の赤毛布ですが、今回は
萬事運が好くて航海中は人々が退
屈するのになら一人は雲の研究に毎
日忙しく幸福に暮し、途中はスエ
ズより一旦上陸し快速力の自動車
を飛ばして砂漠を横切りカイロ府
に入つて古代文明の跡を訪ひ、大
いに愉快に就中最近發掘したるツ
ータンカーメンの遺物には驚嘆し
ました。名物唇氣樓も親しく目撃
し、ピラミットは駱駝の背に乗つ

て見廻り、御蔭で想像以上に涼
氣分を味ひ、又一種の色調を看取
して得る事多く、地中海の美しい
景色を見てマルセイユに入港、翌
日巴里に來て案内知るに任せ翌日
からすぐに美術館廻り、久し振りに
名畫を見て心大いに勇み老書生
大いに若返りました。巴里には日
本人の畫家の若い者が百人近く居
りますが大多数は悪口屋さんばか
り此れでは大家は出ない筈と思つ
てると中には有望家もちよいと
あります。フランス人にもヘボが
澤山居るところを見ると大家は得
難いものと思ひます(八月廿九日)

◆禪林奇聞集

吉田 莊 一

天安大典寺の金寶泰禪和尚は、
これこそほんとうの禪坊主だと、
京城からさへ參禪に出かける變り
者がある。

先生は、學校らしい學校は、ど
こも出てゐない。しかもその講坐
の如何に堂々たるか、その博辯宏
詞の、いかに深遠なるか。一たび
場に參するものは、恍然としてそ
れに酔はぬものはない。

勿論、肉食妻帯は一切やらぬ。
朝は夏でも多でも四時起床、一わ
たり業がすむと、電話で、信心者
を片ツぱしから起す。それでも朝
寢をきめてゐると『××さん、間
違つては困る』和尚どん／＼坐敷
に乗り込んで来る。若夫婦で、ほ
つこり寝てゐる奴、びつくり敗亡
『和尚平に／＼』と夜着の中から
手を合はすと『アツハツハ強盜ぢ
やない、ふるえるな／＼』

雜筆の 雜筆

薄田美朝

一、京城雜筆は吾々の遠慮なく批判のメスを振ふ場所である、遠慮なくメスを下し得るところに雜筆の使命がある。官場の人でも民間の人でも皆各々それぞれの考はあるが然し鑑戒で身がまいして眞剣勝負をするは尋常一様の人のよくするところでは無い、臆病者は又臆病者相應の生くべき場所があり無性者には又相應の避難所がある、雜筆はこの無性者、臆病者のかくれ家である、吾々はこのかくれ家から世の中を觀やうとするのである。丁度巴里の哲學者が天井裏から街頭をみつめてアテック・フィロソフイーを囁いた様に。

二、御互は感情の動物であるすまぬことだがある人の名前だけをみただけで反感を懷く事があるましてや人の噂や新聞等で悪評でもされた人に對しては尙更知らず／＼の間に敵意をさへもつことがある。こんな人はかへつて一度會つただけでかなりの厚意をもも得る場合が多いが然し御互はさう簡單に誰にも會はれるものではないこゝに雜筆の使命が生れて来る。一日雜筆でこの種の人の隨感をよみ大いに共鳴して前の不知に依る反感が「掃された事がある、偽らざる姿、赤裸々の人を知り得ることだけでも雜筆の存在の理由が充分にある。

三、人毎に一つの癖はあるものを、人の癖人の考へ方を知る事

は大きい社會の學問である、一つの小さい事に對しても皆各々所見を異にする所に社會の動があり眞面目がある、若輩の吾々は太いに教へられるところが多い、雜筆は正に吾々のよい糧である。斯くして雜筆の雜筆は雜筆の禮讃に終つてしまつた（一五、一〇、二九）

追憶

平山正

松本さん、私は曾て貴君に御目に懸つて居ります。然し私は貴君が今此處に居られることに氣が付きませんでした。それは私が餘り世間へ顔を出さないと本來の迂闊な性質から來た結果です。私は二十餘年前に大分縣中津中學校に居りました。當時貴君が同地の二豊新聞主筆として常に穩健中正な筆を振はれ居られたのに深く敬意を表して居りました。然し無性者の私は別段御交際も願はず、只二度何處かで御目に懸つたに過ぎなかつたです。或時貴君は偶然金谷なる拙宅へ訪問せられました。客間へ御通して御目に懸ると貴君は驚いた様子で『此處があなたの御住居ですか、私は間違ひました』と云はれました。蓋し貴君は私の前住者半田君を訪はれたのでした『間違ひでも宜いでしょう、遊んで行き玉へ』と云つたら暫く談話をして歸られ、翌日の新聞に此事を書かれたことがありました其後貴君も私も相次いで中津を去り、私は埼玉石川二縣と釜山とで各五六年づゝ矢張り同じ職務を執

【四】

り、此處へ移つて既に六年目になるのです。其後全く貴君の消息を知らずに過しました。只最近數年間折々新聞紙上で永樂町人といふ御方の文章を愛讀して居りますがそれが貴君であることは知らなかつたです。或時山縣氏からの紹介で『京城雜筆』に拙稿を送つたら松本武正といふ御名前前で禮狀が來ました。然し私はまだ氣が付きませんでした。それは私は中津に於ては貴君を只松本島城さんとしてのみ知つて居り又其雅號より岡山の人であると思つて居ただけであつたからです。先月『雜筆』で初めて貴君が當年の島城さんであつた事を知り、驚くと共に妙に嬉しく感じました。何時か御目に懸ることが出来るかと樂んで居ります。然し途中で出逢つても多分御互に知らずに行き過ぎるでしやう。なぜなれば中津では確に貴君は若い記者であり私は若い校長であつた筈ですが。今も矢張り御互にそうであるかどうかは疑問であるからです。

筆のしづく

平田久雄

或る田舎の畦路で、一人の内地人と、三四の朝鮮翁とが、手拍子足拍子で、唄をうたい、踊りをおどし、頗る天下太平に行ひ濟ましてゐるので、そも／＼何者だらうと、よく／＼近づいて見ると、これこそ總督府囑託の加藤澤覺君全鮮民謡集をつくるための道中と解つて『なあゝるほど……だがモウ一枚、同じ洋服を着た彌次郎兵衛が欲しい所だな』▲聞く所に依ると、その加藤君の民謡集も、工程大に進み近く世に出るだらうと

村落

方 台 榮

- 平北道楚山郡松面兩江洞
- 一、面積三十二方里
 - 二、戸數一二五三戸
 - 三、左右前後山ばかりで平地なし
 - 四、交通極めて不便にして皆徒歩による
 - 五、住民は極めて順朴にして其の生活程度は極端に云へば原始時代同様である
 - 六、水田はなく火田ばかりである（山に火を入れてつくつただけ）
 - 七、山高いため日短き感禁じ能はず
 - 八、水田なきため米は雲山北嶺より供給をうくる
 - 九、住民の常食は粟、玉蜀黍である
 - 一〇、夏出水の時は半ヶ月交通絶する
 - 一一、時によつては糧草賣切れスグ補充できんため一週間も二週間も其供給をうくるまで朝鮮式きせるによること往々ある
 - 一二、醫療機關なきため病氣にかかつたら其の輕重を問はず絶望である
 - 一三、面中央兩江洞に公立普通學校が大正十三年より設けられたこれは郡當局指導の下漢學者にして德望高き面長鄭基海氏が東奔西走して面有志に寄附金を募

集して作ったもので現在生徒百六十二人、授業料は現金なきため薪木を以て代金する、學校にてはこれを校用として買込み現金に換算して郡へ納入する

一四、國境なる關係上警察官は年が年中武裝し不眠不休で警戒につとむる結果民心安定し感謝の意を表しつゝある

一五、京城よりの新聞等は一週間も掛かる、もつともおかしいのは郡廳所在地との通信、郵便による時は十日以上を要する、電報と書面と配達日數同様なるため電報等は配達局に於て開封し其の内容を警備電話で知らせてくれる（これは學校面事務所職員に限る）

一六、この面を開發するには一日も早う兩江洞を経由して雲楚線二等道路を速成し交通の便をはからねば駄目

乞食の六

本田 恒三

肥後の熊本に長六橋あり、橋下久しく風來の一乞食ありけり、其の何處の者なるを知らず、人呼んで乞食の六と呼ぶ。

六、性廉淡、常に詩歌を獨唱して敢へて世の風雲を知らざるもの如し。

六、死するの時、破傘に左の五律を遺して、他に何等の怨魂なし

一鉢千家飯、此身幾度秋、冬暖草庭裡、夏涼橋下流、無樂亦無憂、無喜更無愁、人若問此六、明月水上浮。

僕之れに次して曰く
且暮煤燭幽、全盛不義秋、在世

困難裡、誰知此風流、空靈何勿憂、待喜更無愁、舌鼓三杯酒、樓臺盃中浮。

大正十五年秋、秋菊紅白を競ふの日、空に飛行機の響きあり。六地下に笑つて曰く

蚊の羽根に及ぶか人の智恵淺し（或は智恵くらへ）

醫界元談錄

山口のぼる

◎南山町の片山醫院長、ちよつと腰を据えて飲み出したら、あつさりした所で、正に一升五合。

◎いつの宴會でも、どん尻まで腰を据え、酒井一流の警句を放つて、内々隣りの部屋にほうきを立てられるのが酒井婦人病院長。

◎一座はまだそんなに酔つてゐないのに、自分だけは春風駘蕩。あつとおツ玉消ける同業を尻眼にたちまち裸形大飛躍と出かけるのが今村豊八先生。

◎だが、片山先生にいはせると『僕は飲むよりも酒の坐が好き、左の方は酒井先生が、どうしても役者が一枚上』と。

◎これを酒井先生に聴くと『ワツフ、能ある鷹は爪をかくす、片山先生謙遜するな〜』と。

◎この間、醫師團對櫻井校教員團の野球試合。十四對十三……ドクトル軍敗れたりと難も、そのよく攻め、そのよく凌ぎたること、見物想像の上に出づ。各ドクトル額をあつめて曰く『のう君、我々の藝術が、これほどまでに、天才的傾向があらうとは、自分乍ら意外ぢやのう』

◎旭町の今本醫院新築成る、清楚端麗、眞に院長その人を見るが如し。實に氣持が好いのである。

新義州

へ行く

飯島滋次郎

汽車が新義州へ着いた時には日が暮れてゐた。廣い驛前へ出ると麻の夏服ではうすら寒かつたので、なんだか嚴肅な國境へ来たやうな気がした。地面を緊張り踏む心地でずん／＼歩いた。そこらに立つてゐた一團の客引は、うす暗い提燈をかざして近寄つて來なかつた。呼びかけても徒勞の客と思つたのかも知れない。私は雜草の茂つて茶畑みたいな徑を二丁ばかりも匍をぶら提げて歩いた、流れて來る草の匂ひは潮のやうに強く鼻をかすめた。

大都會の特長は夜になると郊外からでも行手にこんもりと、堆高く火のドームが見えるから旅館のある處は見當がつくが、此處は旅館までにはまだ遠いらしい、點々と灯は見えるが原が連らなつてゐるらしい。その代り暮れてまもないまだ明るみの残つてゐる空は紫水晶のやうだつた。

勢と云いながら密輸入者の手先然と闇をうろつく自分の姿が嫌だつた、おとなしく提燈の一人を呼んで宿を頼んで車に乗ればよかつたと思つた、折よく支那人の車夫が通つたので私は呼留めざるを得なかつた、もつとも彼はニンニクの匂ひのひどくする男で、アンペラの妙な六角帽を被つてゐた、不圖私は鴨綠江はどう流れてゐるだらうと考へた、草靴を穿いた兵士が蘆荻を踏み分けて川を渉る一方

砲臺の裡に黄色い三角旗が隱見してゐる錦繪は小供の時分から知つてゐるし、それにパノラマだの舞臺と云ふ興行物が、そろ／＼活動寫眞に壓倒される時代だが『鴨綠江』と云ふ舞臺を観て覺えてゐる詩吟の内容は忘れてしまつたが白鉢巻に袴の股立とつた男が俯向きかげんに舞臺に駆けてきてエツと秋刀を引抜くと川を渉る身振をする、其途端に舞臺裏で空鐵砲を二三發放つ、他愛のないものだつたが、空鐵砲は猛烈に響いたので音と一緒に覺えてゐる。

河は何處だ、河の變に鼻音を響かせながら尋ねると車夫は黙つて後向きになると闇に指で一點を打つた、それから一文字にグツと手元に引いたので河流の方向を示すのだらうと推察した。私はそのまゝ車に乗つた。

車は駛つたボフラの並木になつてゐる往來は廣いが暗い、窓に白いカーテンを張つた練瓦の家からピアノの音が洩れてきたので、やつと夏の宵らしい氣がしたが私はまだ漫然と頭の内に朝鮮半島から鴨綠江を描き、アジア大陸に及ぼそうとしてゐた。

綠屋に宿つた、まだ銭が下りて來ないから開散だと女中が云つた中庭ではしきりと明笛を吹いてゐた。

私は麥酒を飲んで飯を食つて、明け放した窓に倚つてゐると隣りの部屋で高聲で話をしてゐた。

……人間の運てものは解らんもんですな、運ころがりと云ふが彼人なんかまつたくでさ、もとなんでも國を食いつめた漁師なんですとさ、それが此處へ來て働いてゐるうちに、どうでせうお前さん、主のない外國の船を

「六」

拾つたんですと、流れて來た、それが資本になつて、金を貸す網元になる、とん／＼拍子、今ぢや、あれでせう。

なるほど。……相手の男は溜息が昂したらしくせわしく咳をした聲から判斷すれば年配の人らしいがこんな夢みたいな金儲話に耽つてゐるのは夏の夜の涼話からばかりでなく國境の空氣に觸れて冒險心と射倖心を一舉に満足させやうと願つてゐる人の本心であらう暫時して私は賑かな街を散歩した、さつきの話で妙に冒險じみて本屋で『北極探險奇談』と云ふ英書を一冊買った。

Sir John Franklin だの極光だの氷山の寫眞版が挿んであるので寝ながら讀むに手頃だと思つたからである。

氣のせいかわいふ男も女も諸顔で眼が生々して冒險好きで警澤品なんか不自由してゐない人達のやうな氣がした。寶石の頸飾なんか平氣で懷中にして歩いてゐるやうである。ヘリオトロップのいゝ香があたりに浮動してゐた。しかし煙草を買つたら髯を生した店番が、『さー此處で安いのには車くらいでせう』五錢の釣銭を銅貨で並べながら云つた。

街はだん／＼暗くなるし、犬の遠吠なんか聴えるので私は踵を返した。

◆東京はがき

櫻井 小一

其後は御無沙汰申上げ居ります着京の上は何か原稿差上げる約束は致しましたが却て浪人しても種々用事が難然と競合して参り未だ落付いた氣分になりません、清元の放浪位なら朝飯前ですがね。

用する様に改めて欲しい、そうす

る人があつたら如何に嬉しからう

思ふこと

早田 伊三

一、使僕を愛する心

官公吏、銀行員、會社員、軍人の中には私用に其奉職先の小使を勤務時間外の時若くは休日に使役して謝禮をせぬ者往々ある。其甚しい例は轉宅する際荷物運搬や掃除を事務所の小使にさせて公務をやらせた様に考へ平氣で居る。平生薄給で事務員よりも時間長く働いて居る小使を其休養時間に私用に使つたら當然相當の報酬をなすべきものである。この一事は主人公のみならず奥さんも考慮して貰ひたい。斯様な事に氣付き使僕を愛する人こそ眞に物のあはれを知るゆかしい紳士淑女である。高尚な藝術とかに凝つても下の者の境遇を察し、之を憫れむ心のない者は人間味の足らぬ者として尊敬する必要毫もないと思ふ。

二、共生共樂の道

私は過去に於て散財の方法宜しくなかつた事を後悔せざるを得ぬ生活費以外の散財は多く他人と共樂するため殊に朝鮮の人々を歡待するため費消した中には單獨で料理屋に費消した金額もある、これが甚だ宜しくなかつた、一片の菓子一塊の肉と雖も獨り之を食ひ食すると云ふことは社會人として共生の道に反するのである、單獨で享樂費を使ふことは共生共樂の上から考へて宜しくない、私は財産の餘裕ある人は勿論収入の少ない人も自分自身の享樂費を節約して其金を他人のために盡す場合に使

用する様に改めて欲しい、そうすれば其人は孤獨の寂しみから免かれ且共生共樂の道を辿ることが出来る。

三、人のために盡す心

落ぶれて袖に涙のかゝるとき

人の心の奥を知らるゝ

人間の交際は共樂の時のみでない、知人が苦しい境遇にあつた時之を慰め之を助け其人のために盡す必要がある。我々人間は共同生活を営む上から他人の助力を受けることもある、故に自分も他人のために盡さねばならぬ、不幸にして自分が逆境にある時慰めてくれ

白頭翁物語

平田 久雄

京日の宮部さん、副社長の要職を剝ぎとられ、一種の阿呆拂ひといったやうなことになる。不徳のいたす所とはいへ、少々飽ッ氣ない氣持がする。

思へば、贖も略もなく、あぢも匂いも何んにもない、番茶の出し敷のやうなのが、宮部その人であつた。そのくせ、部下いぢめは可なりやり、加ふるに吝なこと、論の外であつた。部下から呪ひ殺されたのも、己むを得ないことだらう。

○ 彼は維新の志士宮部鼎藏の甥である。少しは氣胆もあり熱もあつても好いのだが、そんなものからツキし持合せがなかつた。こんな話もある。

○ 東京朝日の同人——編輯局を代

る人があつたら如何に嬉しからう之に反して輕侮の情を以て迎へられたら如何にからう。之を思ふと人間は輕薄であつてはならぬ如何に財産があり地位があつても眞に他人の爲に盡す心がなかつたら其人は人間としてはゼロだ。嗚呼然し社會には明眼の人少くて我利我利主義で社會公益のために盡す仁侠の精神ない者を府協議員等に選舉する。然し眞正の人間は大に仁義の士を助けて自利本位の俗物を排斥するに躊躇せぬ。要するに吾人は獨りよかれの心を洗ふて互相愛の大義に生きねばならぬ

表して、宮部、細井（鑒）外一人が、村山社長に重要直訴をし、聴かれずんば總辭職と大談判を待込んだことがある。年長の故を以て最初の發言を宮部さんがやる豫定だったが、いつまで経つても、ウンともスンとも口を開かない。のみならずカサ／＼と机の下で頻に鳴るものがあるので、細井氏が臍を癢らして、よく／＼視ると、先生袴におさめた手が、ぶる／＼と震えて、一種の音律を立てゝゐるのである『ハハア、頭は白いが腹は少しも出来てゐないな』と、それから細井氏が口を切つたといふことだ。

○ この間の中央（京城）地方の記者の會でも、みぢめであつた。何の理由かは知らんが、小野經濟氏が『オイ宮部！』といふのをキツカケに、あの白頭老を散々にこきおろし、果ては洋服の襟首をつまんで、コツキ廻したが、本人一の抵抗も出来ず、満坐一人のとどめるものもない。老人の凋落は、ほんとにむごい凋落だつた。

オークション ブリッチ禮讚

佐藤 作郎

年内に是非今一度書けとの御注文なれど、書いて甲斐ある文章ならねば、お断りの外なしと、一應は思ひたるも、待て暫しあれ程面白きブリッチの遊びを味はひ知らぬ人多きを嘆きつゝあるの際、廻らぬ筆ながら効能書かき並べて、少しでも同好の士の多く出で來らんを冀ふと云爾。

オークション、ブリッチとはカード(俗に云ふトランプ)の一の遊戲に過ぎない。が然し以下列記の諸要件に依つて類はるゝが如く絶大の興味と價值とを持つて居るものと信ずる。

コオペレーションは今日流行する殆どすべての競技の要素となつてゐる。ブリッチにありても此のコオペレーションを忽せにしたならば其結果は忽ち失點となつて表はれて來るであらう。失點にすることは自らのパートナーに迷惑をかくることだ。社會生活を営む吾々である以上、ブリッチは吾々に如何に社會生活を向上せしめ如何にして人様に迷惑を掛けざる様すべきかを教ふるものとも云ひ得る。

ブリッチに於けるコオペレーションを完全ならしむるには細心不斷の注意力を要する。ピツディングに於て然り。リーディングに於て然り。若し夫れアンパス成功の言ひ知れぬ妙趣に至ては唯一に

右の注意力あつて然る後初めて味はるゝものなのである。依つてブリッチは注意力觀察力を養成するものなりと云つても決して誇張ではないと自分は信じて居る。

ブリッチは又記憶力を必要とする。味方と敵手とのピツディングの如何、既に場に出たる札の如何相手方のリードせる又は出したる札の如何を充分記憶し居りて初めて臨機の策戦は有効に展開せらるゝこととなる。勿論記憶は注意力と伴はずして存在することはないが注意し居りながら記憶力の缺如する場合は決して稀ではない。依つて自分は又ブリッチは記憶力を養成するものだ云ひ度い。

細心不斷の注意力との外に又決斷力を要する點も看過してはならない。殊にピツディングに於て各戦手の手の中に關する大體の事情明かとなれる場合、其上のピツドにて押すべきか或はダブるべきか乃至は又ダブルに對してリダブルを敢行すべきか。此の間の機微に付ては唯一に果斷の力に俟つの外はない。競技には氣合が要る。此の氣合は自信あるによつて出来る自信は充分な準備を要す。而して充分な準備は注意力と記憶力とを兼ね有することによつて出来る。而して決斷力は充分の氣合あつて初めて生ずるものである。

考へて見れば見る程此のオークションブリッチこそは單なる興味中心の遊戲としてのみ見る譯には行かない。吾々の社會生活の縮圖ではないかと思はれる。或るものは凡ての要素を具へて優者たり或るものは反對に劣敗者となる。然

【八】

し劣敗者と雖も努力研究によつて捲土重來凡ての要素を具ふるに至れば地を換へて優者となり得る。一方又此の要素を持つ競技なるが故に競技そのものにより競技者の天稟、才能、性格を知るよすがともなる。慙の人物試験よりも有効ではないかと考へる。

書き來つて又考へて見る。書きはしたもののオークション、ブリッチそのものが當地では未だあまり知られて居ない今日、幾人の人の眼に止まるであらうかと思ふと心細い。然し文は人なり。書くことすればそれは書く人の實際の生活に即したものでなければならぬまい。上來の効能書は眞に自分の感じて居ること、其處に何等の誇張のないことを附言し、且説く所により明なる如く殆ど頭の働きの一つに依る競技である點に於ても他の遊びと類を異にし、興味津津冬の夜長の慰みに絶好のものであることを敢て推奨して筆を擱く。

◆ 靈魂秘密會

山口のぼる

◎旭町の瀬戸病院のそばに『おさらえ學校』といふがある。

◎内容は、よく知らんが、子供のための豫習、復習の學校らしい。◎校主は、菅原秀平といふ人でこれまで龍山で、同じ學校をやつてゐた。

◎隠れた篤學者で、漢籍及び心理學の蘊蓄が深く、別に靈魂の秘密の會といふのをやつてゐる。これも詳しい内容を調べたことはないが靈魂の秘密、靈異を研究する會で、その實驗などは、頗る同好の賛歎と、驚異とを博してゐるといふ。

の言ひ知れぬ妙趣に至ては唯一に
るものは反對に劣敗者となる。然といふ。

偉人

友三郎

新田唯一

『そんなことはありません』

『それは何かの間違ひでせう』

『そんなことを云ふ人もありますが、噂に過ぎません』

『それはあなたの誤解です』

『あなたの意見と事實とは違ひます』

『……………』

これは、今から十年もむかし私が或る問題を携けて、水交社で逢つた時の今は亡き人となつた、加藤友三郎氏が、私の矢繼早に突ッ込んだ質問に對して答へた言葉を並べたのである。恰かも名人に向つた棒振り剣術道ひと同じで齒が立たない。

×

冷静といふ二字を人間にしたのが加藤友三郎氏であると、この人のことを想ひ起す度に私は考へる彼の双頬に紅したのは、國難來とまで解せられた、ワシントン會議の重大な場面でタツタ一回——それもホンの瞬間だけ——機敏な、そして注意深い新聞記者が、僅に認め得たと傳へられる、見るからにやせこけた貧乏相な人で、對座しても血の通つてゐる人間と話をしてゐるやうな氣がしなかつた、夏なほ寒しの感じである、海軍部内で斯う評した者がある。

『加藤將軍は冷静なのではない冷酷なのだ』

×

彼には情實がない、郷黨は、彼

が海相となつた時にはじめて廣島から大臣が出たと喜んだ、彼が原敬氏の後を襲ふて首相の印綬を帯びるや、はじめての總理大臣だとの有頂天になつて、提灯行列までしては、いやいだものである、彼も降る様なお世辭に、通り一遍の『有難う』位の挨拶はしたらしいが、その後依然として、冷々淡々たる態度で廣島のために働いて呉れる模様もないので、

『加藤は怪しからぬ』

『加藤さんは不都合な人だ』

と不平と怨聲が郷里の人達から洩れて來た、忠告した者もある、するとわが偉人、加藤友三郎は済したものの、

『加藤が廣島丈の加藤ならネ』と冷語一つ、とりつく島もないはなし。

が、これあるかな、と感嘆したのは私ばかりではなからう。

×

偉人、加藤友三郎は野中の一本杉であつた、薩や長のやうな闊の後援もなく、政黨の幹部でもなく金持ちでもなく、富豪に通ずる人柄でもなかつた、全く獨立獨歩で育ち難草中にそゞり立つ大樹であつた、郷黨と縁故一天張りて固めて、情實政治をする所謂大政治家とは確に選を異にしてゐた、惜しかつた、餘りに早く死んで惜しかつた（大正十五年十一月二日夜）

補遺

あれだけ書いたのでは、加藤友三郎氏が、如何にも頭迷であるかに解せられる虞れがあるので、更に二三のことを、補遺として追録する。

×

話して差支へないことは、簡

明にそれこそ、みじんも無駄のないことを無表情のまゝで述べる、しかし話があまりに短かいので訪問記者としては類のない苦手であつた、けれども割引したり、加算したりして聴く必要のないだけ樂とも云へる、この點が帝國議會に於て名答辯の好評を博した所以であらう。

×

冷静そのものの如き彼が愉快さうな時、君の腹は判つてゐるよと云はんばかりの時には、あるかなきかの笑ひながら、細い眼の上まぶたあたり冷たい笑がたゞよふことがある、冷笑とは違ふ、これで血の通つてゐる人間であることだけは判る。彼の笑つた寫眞は、かつて朝日新聞紙上に令孫の帽子を頭上に載せてゐるもの一枚より見たことがない、あれは正に破天荒であつた。

×

これもワシントン會議の時であつた、近く海軍大將になる——この難筆の出る頃には發表されやう——加藤寛治中將が、内外の大新聞記者を操縦して盛んに活躍しアドミラル加藤は英米に壓迫されて、五、五、三の比率で我慢するのは國防を危くするのである、以ての外だ、と批難して加藤友三郎大將に迫り容易に自説を撤回しなかつた、このさまを冷かに觀てゐた、わが偉人、加藤友三郎は、いよく事を決する直前に、

『世界の大勢や國家の大事が貴様に判るか』

と巨彈を放つて、帝國海軍の俊鋭と、自他共に許してゐる寛治將軍を沈黙せしめた、それ程に彼は偉大であつた。

（大正十五年十一月三日朝）

マルメロ

瀬戸 潔

徳川の初め頃長崎に蠻人が持つて來たと云ふマルメロ、或はマルメルと云ふ。ボケに似た木で、マルメロが實る。北國地方特に秋田地方に多いと聞く。其マルメロたるや梨でもない、林檎でもない、甘い滋味い酸い、形はカリンに似て味は數等カリンよりは美味だ。

時は士族と平民との區別がマダ濃厚な時代。士族屋敷の不良少年共はよく夕暗に乗じて二三人多きは十名位組をなして、一部には士族の子だと云ふので社會的にも大目に見られるし、自分にも幾部の慢心も手傳ふたのであらう梅桃梨柿などの果樹のある所を荒し廻るのが例であつた。

人よしの農夫某は毎年芋畑の角にあるマルメロの樹を大事に手入れして紅葉の頃になると其果物の半透明な一種の黄色を樂みにして居る。價も他の果實より少し貴い様だつたから。

不良少年組は日中戦争ゴツコの際など、右のマルメロの樹は見逃す譯は勿論ない、けれど涎が流れても黙つて居る。若しくれいと頼めば日頃恩顧を被りて居る家の子だもの勿論心よく二つ三つはくれるだらうし時々は實ふ事などもあつたのだし、親にねだれば買ふて呉れない程の價の高いものではないのだ。併し此悪少年の氣持はそんなものを賣ふて食べたのでは承知しない。マルメロを食べて舌鼓を打つと云ふ事よりも大人（外見

上小供から見ても誰でも大人は自分よりか傑いのである）の虚を獨

いてマルメロを征代する事自身に愉快を感じる事がより大なるもの

があるのだ。其年は例年になく實

が澤山なつた、色も艶も何時もより人目を引いた、不良少年等は

例により同志兩三名糾合して夜襲を計劃した、悪賢い奴は先頭であ

る、年長でもボヤツイてる奴は下駄持で兼見張り番である、夕方から

既で裾マクリでよく繁りた畑芋の葉も茎も少年軍に味方した、第

一回戦大勝利各々が二つ三つ宛懷中して凱旋した、圖に乗りて餘り

再々征代をしたので人よしの百姓先生怒出し和子供（士族屋敷の子

供を百姓はそう呼ぶのである）餘りひどい、一つ懲らしてやれと怒

髪天を衝いたか如何か知らないが兎に角大に考へたと見えて傷をつ

けないで思ひ切り小僧共を懲らし

てやれと許りに不躰番をやる事にした。勿論武器も用意した。芋の

葉は今晚は百姓軍にも公平に好意を表して隠れ場を與へてくれた。

とも知らず惡僧等は圖に乗りて今晩は安心し切りて樹の下迄押して

來てどの枝に上ろうかと思案して

た處へバラ／＼と音がしたかと思ふと頭から冷たいものが降りか

つた。夕立には變だ。臭い！と思ふてると又バラ／＼と音がしたと

同時に百姓某の聲だ。一人が『ドラダドラ』と小聲で云ふと共に

敏捷に芋畑から逃げ出したので同志一同一溜りもなく逃げ出した

『ドラ』と云ふのは肥料溜に溜め込んだ物で人糞魚鳥等の腸などの腐敗したものでドラ／＼だから北

國ではそう云ふらしい。

某も日頃の鬱憤も此一舉で晴々して肥手桶も肥柄杓もかたつけて

1101

寢酒の濁酒も常よりは一層美味に感じた。

× × ×

翌朝は秋の日晴れ、百姓某君昨夜の痛快さをも一度思出して再び其氣分に浸るべく芋畑を見ると大

小の銀色の露を轉がしてる芋の葉隠れに大事なくマルメロの樹が

根元から切り倒されてあつた。嘆じて曰『士族の子には叶はねい』

◇カン／＼病

山口のぼる

小林千壽君の誤診問題？は、世間注視の焦點になつてゐるが、さて裁判長の脇さんどんな判決を下すか。

千壽君は、別に惡氣のある男ぢやないが、性來の肝癖から、何んでも彼でもガミ／＼とやつつけるので、不遜傲慢、癪にさわる醫者だといふ風に、世間から誤解される。

が、したしく訊いて見ると、元來小林君は、體質が弱く、到底今のやうな激務に耐える資格はななくどつちかといふと無理押して、今のやうを商賣をやつてゐるので、そのカン／＼憤り散らすのも、實は不遜傲慢でも何んでもなく、少し忙しうと、きつとアノ精神的發作（カン／＼病）が起るのだと、氏をよく知る人は同情してゐた。

まあ判決はどつちになつても、數十萬の産を作つてゐる小林君だこれを動機に、隱居にでもなつてしまひ、評判の良い新院長を、その病院に迎へて、看板立て建しなとは、どんなものか。

もまだ賣物の姿を餘り見ない丈けに、大丈夫かな、左様手輕く八日

程佛性があつたか、惻隱の念があつたか證明は出來ぬが、可しこす

鴨

高 島 種 夫

今朝出獵から歸宅、鴨一羽御届致します、南大門市場を御調へ下さい

大 森 富
×××××殿

大母支局の大森君の獵咄しも随分久しいもので、同時に嘗てプロを向ふに廻して美事に零敗したといふ、同君自慢の撞球よりは健かに巧みであるとの御自身の註釋つきの鐵砲。

彈が鳥にあたるのか、鳥が彈にぶつかるのか、そこはまだ残念乍ら鳥にも彈にも聞いた事がないので何とも云へぬが、鳥にあたりないやうに撃つ事は之は非常に困難な問題だ——と、事程同君の銃獵には自信があると惱まされたのも、随分久しいものであつた。所が十一月の八日の朝、斯くの如き名刺が付いて正に鴨が一羽舞ひ込んだ、イヤ届けられた。

鴨は正に眞正な鴨だ、鐵砲賣もある。剝製ではなく、だけに一寸驚いた、ホロリとした、後生の悪い鳥もあつたものだ……。

尤も此の鴨に就ては其の前々日の六日かに

『八日には正に鴨を一羽届けるから晩酌の肴は用意せずにおけ但し葱や、豆腐は鐵砲では撃てぬから之は別だ……』

との御託宣を受けた事はあつたが實は南大門市場にも其他の鳥屋に

もまだ賣物の姿を餘り見ない丈けに、大丈夫かな、左様手輕く八日の朝一度に鴨の買占めが出来ると、實は同君の爲めに相當心配して居たものであつたが、正に届けて見ると鴨の出廻りも相當あつた事であらうし、同時に買占むるにしても案外安値であつたも知れぬなど失禮ながら鳥屋に鐵砲丈けは忘れないやうにと祈つて居たものであつた。

が事は益々面倒になつて來た眞實それは大森君が京義線の何處やらでホントに鐵砲で獵つたものだそうで而も鴨が二十數羽、雉が四羽、鶺鴒が何羽とドンバタリと地響き打つて落ちた證人が出て見ると大森君の銃獵には實際感心せねばならぬ、と共に地響き打つた大鴨の一羽を頂く迄考へて居た失禮な事をお詫せねばならぬ事となると同時に、市場で買占をやつたものでなく、同君の腕前に對して敬意を表し正に撞球以上であると證明せねばならぬ事になる。尤も空一面の鴨で鴨に當らぬやうに撃つのに苦心したといふ咄に同君がそれ

◇日向ぼっこ

吉 田 莊 一

近ごろ新聞記者の浪人が、トント殖えた。而かも役に立つ連中がぶら／＼遊んでるのは、惜しいことだと思ふ。

先づ井上取氏がある。この人などは、何處へ出しても一流どころ著述をやつても、結構飯の食へる男。この際洋行費くらゐ養分してやるに狭な御仁はないか。

程佛性があつたか、惻隱の念があつたか證明は出来ぬが、何れにするも立派な腕前である事は争はれぬ事になつた次第である。

と同時に副産物として鴨を届けると、イキナリ

『オイ俺の所は何人家族か知つてるかッ』

と高飛車にアトねだりを強硬にやつた男があつたり、更に鴨を届ようかといふと

『ハア／＼何がありますか』とアツサリ片言かけかつた男もあつて

『馬鹿にするな、八百屋ぢやネーゾッ』

と凄いの大森型でゴ自慢の鐵砲以上ドカンとやつたものもある。

雉を買つて七年疵はイケないが俺のは十年疵だと自己證明で納めた男があつて、流石の大森君怖がる事。

イヤ實際珍らしいだけに咄の種は相當出來たが、肝腎の鴨が至極無事に成佛して見れば之れ以上の罪作りは、同君の獵運を考へてやるでもあるまいと、かくの通り。

特異の頭と、特異な筆とを持つてゐるのは柄澤君。いかにも鋭い、頭を有つてゐる。この人などは、田舎の新聞界を見切つて、中央で獨特の讀み物でも書いたら、屹度名を成す人である。

新浪人に、角田廣君がある。僕は氏の歌を愛誦してゐる。何處か雄渾で、大きい情熱が讀者に迫つて來るのを覺える。若し歌一本で立つたら、氏は日本の詩人として讀者の中心に立つ人だらう。こゝで針路を一轉する氣はないか。

讀書脫線

今本義胤

竹齋は昔、山城に住んで居た當羅黨の醫師であつた、醫術は益々であつたが唯一つ効驗顯著な吸出し膏藥の練り方を知つて居た。之れを貼れば惡血毒汗を吸ひ出して病はたちどころに癒ゆるのであつた。

或る時、酸味を貪り喰つて居た妊婦が梅の實を咽に塞めて百方手段を講じたが出ないで危険は刻々に迫まつた。竹齋招かれて例の膏藥を口邊に貼つた。すると梅の實は難なく吸ひ出された、然し困つた事には膏藥の餘力は眼と鼻とを一所に吸ひ寄せて眼球を二三寸も吸ひ上げてしまつた。人々はこれはどうしたことだと驚いて竹齋に整復方を懇願した。然し竹齋は梅實の療治は心得て居るが目鼻の事は専門外だといふ極めて拙い辯解で逃げ歸つた。

さらぬだに閑散の竹齋、この無責任の治療が評判となつて患者が無くなつてしまひ、米鹽にも事欠ぐ様になつたので都に居ても益ないことゝ例の膏藥を携へて諸國巡業に出た。

名古屋の近くに來ると多數の人が小供が井戸に陥ちたといふので狼狽しながら引揚げの評定に背めき合つて居る。之を見た竹齋は人々を掻き分けて充分の自信を以て引き上げて進ぜると言つたので皆狂喜して頼んだ。

竹齋は戸板を持ち來らしめて例の膏藥を一面に塗り着けて井戸の

上にひたと蓋をした。

膏藥の偉力を確信して居る彼は作業の一段落に安心の態で傍の石に腰を下して、今すぐに吸ひ上げるから暫しお待ちなさいと言つたもより上る筈がない。兎角と時間の經つ間に小供は死んでしまつた。竹齋が人々からどんなに責めさいなまれたかはいふまでもない。然し彼は打擲され乍ら『この事夢になれ』と念じただけで手遅れであつたとか、時期が早ければ、たしかに百プロセント吸ひ上げるのだとかいはなかつた。

此のドン、キホーテとは反對に實在の賢人古林見宜（此の人の事は以前にも一寸雜筆誌上で述べたことがある）は頗る才氣煥發、機智縱横で且つ宣傳家でもあつたらしい。

浪華から東都に赴く旅路で關の宿に着いた。一浴して膳も下げたところに主人が挨拶に來て四方の話を移つた。主人は

『時に昨夜は何れにお泊りで御座いましたか？』

『勢州坂の下××屋といふに』

『それは、只今着いた飛脚の申しますには今朝坂の下に山崩れがあつて其××屋を中心に附近十數軒潰れました由で××屋の客人客人を始め大分の死人や怪我人が出来ましたそうで御座います』

見宜の顔智は一閃した。駭く筈の彼は靜にさもあらなんといふ風に頂いて

『左様でありましたか、實は昨夜××屋の女中で思つて居るのがありまして主人の懇望で診ましたところが病氣は輕微でありますのに不思議なことには脉だけが死脉をうつて居るのな。合點が參らぬので試みに主人の手を握つて見

（二二）

ると之れも死脉でな。私の從僕のも亦自身の脉も同様です。餘りの奇怪さと不氣味さに今朝夜も明けやらぬまに宿を出て峠にかゝつた折には己に私の脉も僕のも平脉に復して居ました、左様でありましたか!!』

宿の主人が感嘆吹聴したのは勿論である。見宜名醫なりの譽は感擧がつたのであつた。

折角關東震災まで生かしておきたかつた。

江湖風聞錄

平田久雄

鎮南浦の西崎氏が、神經痛を病んで、困つてゐる。今は夫人、令嬢を伴つて、山口縣たわら山の温泉に、出養生してゐる。

たわら山温泉は、この病に特効があり、一週間入浴すると、向ふ一年は、その病を忘れるといひ傳へられてゐる。

西崎氏のは、モウいたみは餘りない。それに夫人が歌をつくり、令嬢が歌をよむ。勿論御本人も、大にやるのである。だからどこへ出養生しても、少しも寂しいことはない。徳野氏曰く『一ヶ月出養生すれば、歌集一卷くらゐは苦もなく出来やう』と、記者の知る限りで、この西崎家ぐらゐ幸福にめぐまれた家はない。一日も早く快氣本復、得意の基戯に接せんことを祈る。

この間入京した熊本利平氏「朝鮮にも實業家は多いが、西崎氏は實に立派なものだ」讚歎三たび。

駿馬痴漢 を乗せて走る

高 安 彦

○ 先達來馬の稽古を始めたるに諄々たる教師の指導に沸々として湧き出づる妙味を禁じ得ず、然れども一日の良訓千萬言も鞍敷を重ぬるには如かず、習ふより馴れざれば物の役にも立たざるなり。

○ 鞍上人無く鞍下馬無く渾然として人馬一體を爲す所に馬術の極意ありと謂ふと雖も、何を以て鞍上人なしと爲すか、何を以て鞍下馬無しと爲すか、渾然人馬一體を爲すとは抑も如何、右せしめむと欲し乍ら左せよと指揮し、左せしめ

むと欲し乍ら右せよと合圖す、走らしめむとして止まらしめ、止まらしめむとして走らす、何すれぞ駿馬を迷はす夫れ斯くの如く多き事ぞ。而も尚ほ概ね走るべきに走り、右すべきに右し、左すべきに左し、止まるべきに止まる。駿馬なるが故に能く痴漢をも乗せて走るか。

○ 右せしむべきに右し左せしむべきに左し、走るべきに走り止まるべきに止まる、駿馬も駄馬も意の如く爲し得て初めて御するなり。良騎手たること亦難い哉。駿馬には乗せられ駄馬には落さるゝは初步の初歩、蓋し吾輩の域か。獨り乗馬のみならず使ふ者使はるゝ者渾然一體を爲さずんば乗せらるゝか左なくば落されむのみ。統御の術亦難哉。駿馬なる哉駿馬なる哉汝こそ痴漢を乗せても能く走るものぞ。

所懷一片

角 田 廣 司

冠省、昨今小閑を得たやうなわけではありますが、何だか久しぶりで故郷の家へ歸りしやうな心理状態で、平常には氣もつけなかつた自分の部屋の扁額が、今さらのやうに目につく、とまづいつたあんなばい、それからそれへとほんとに俗事に氣忙はしいので、今少し落ついたら何にか駄文でも是非のせさせていたゞきたいと思つてゐます。雑筆社は益々御發展で十一月號に貴下の社告文を拜見して誠に嬉れしく存じます。精々ウシとおやになさいまし、貴下も聲

明して居られるやうに京城雜筆はどこまでも朝鮮に於ける文藝春秋式で精進さるゝことを切望します徒らに黄金つくりのピカ／＼する太刀を佩いて、しかも抜く事の出来ぬといふ馬鹿氣なもの――考へても見ると滑稽な皮肉な話であります。それよりか例へそれが山樵のもつ山刀であつても、野猪も刺せば鹿もはふることの出来るものゝ方がどんなに愉快で、眞剣味があつて、情味や感激味があることか知れませんか。そのうち油を賣りにゆきたいと思つてゐます。先々月來度々御社の記者の方から拙稿の注文をうけて本日もお足を運ばせたやうな次第でまことに恐縮に堪へません。

◆世間ばなし

石 川 利 夫

○ 朝鐵技師長の松永さんは、會つて話して見ると、迎も所謂技術屋ではない。洋行歸りの文學者が何んぞを訪問したやうな氣になる。

○ 氏と親交ある人に聞くと、先生迎もいろ／＼の書物を読むやうなそれも多きは獨佛のもので、その廣きにわたり、硬軟併せ兼ねてゐること、驚くべきもので、芝居のことも、醫學のことも、それは／＼詳しいもんだといふことである。

○ 清元の大家平壤の松井民次郎氏『粹學だけは、負けんつもりでゐたが、原書をしこたま出されて、これも俺の方が降参した』

○ 京南鐵道支配人の井上氏が、蕭任早々、土地の人から所望されて義士會の席上『大石良雄』といふ題で一席講演をする。

○ 歳は若いし、男はちいさいし、何をいふかと待つてゐると、初めは低聲且つ吃々たるものだつたが一たび熱が加はると、立論の正大引證の該博、要所々々の突つ込みの鋭さ。全く天来の雄辯なので、満場の聴衆すつかり浮かされてしまつたといふ評。それはいいが、爾來何事かあると『井上さん、どうぞ一席に、御當人××さん爾今一席に關する件だけは、豫めお断りしておきますよ』

○ 井上氏目下禪に參じてゐる。御當人の告白『僕の禪は左様さ、狸？狐？まア兎位のことだよ』

偶然

高橋利三郎

明治三十九年春、時の山形縣知事〇〇閣下は、學事視察の爲、米澤中學校に御出張になりました。

今度の知事は學校の事に、大分御熱心だぞ、山形中學では、寄宿生の自修室にある机や本箱、さては行李の中まで點檢せられた。此やうな噂に驚いて、先生も生徒も今更それ〳〵の整頓に忙しかつた。さて知事閣下は豫定の如く豫定の時間に校門をおくゞりになりました。先づ校長室で一通りの説明を終ると、教室巡視に移られる。そふして朝の二時間目、私共四年乙組の教室——英語の時間、其處へ御一行はヌーッと這入つて來られた。

『時間をお借りします』知事は早速先生に斷つて自から教壇に立たれたのである。まづA生を指名してABCを發音させるに、A生アガツタと見えてアルファベット二十六字が何遍繰り返へしても、二十五字にしかならぬ。次はB生七曜日を英語で云へといはれて、之は日本流に月曜日から始めるので、どうしても、六曜しか出て來ない。その次に私に指名。胸がワク〳〵する。ホワット、イズ、ユア、ネーム？英語の質問だ。で取り敢へず、マイ、ネーム、イズソ、エンド、ソ、とやりかへすとホエヤ、ワズ、ユ、ボーン？と來た。まごついてゐるから一寸意味がわからない、怨めし相な眼で知事閣下を見上げる。と、も一度

ホエヤ、ワズ、ユ、ボーン？まだ判らない。尙もぢ〳〵してゐる中可笑しや、閣下の顔に一種の赤味が浮んで來た。ホエヤ、ワー、ユ、ボーン？極めて口早に仰せられたやつと判る。アイ、ワズ、ボーン、エンド、ソ。今度は、ホア、ホアツト、バボーズ、ヅ、ユ、ライン、イングリッシュ？。私はアイ、カント、セー、イキザクトリ、降参してしまつた。

かくて私への質問を最後に閣下は教室を去られる。級長たる私が起立、禮、と全員に挨拶を號令した時、閣下の眼は異様に光つてゐるやうに覺えた。怪我の功名？、單數と複數、ワー、とワズ、知事は文法を忘れられたのが、私の返答が遅れたのは故意と考へられたかも知れぬ。

とにかくに知事は匆々に校門を退却せられたのは事實である。

舊作數句

堤 永 市

小生の十七文字（俳句にはなつてない故故らに十七文字と言ふ）は絶対に他見を禁じて居る代物に有之候處貴誌前號にて廣江氏に素破抜かれ實に汗顔の至りに有之候本日山口君御來訪序でに二三句出したらドウダと折角の御勸め故、恥の掻き序でに舊作數句を書き進ね御笑覽に供し候。呵々

釜 山 釣 魚
釣上げし鯛のしぶきや秋の海
北 漢 山 春 霞
町を懐く山も眠れり春霞
朝 鮮 神 宮
拍手の音のみを聞く宮の翳

(10)

車 中 所 見

端然と朝のボブラや發堤

同

獸々と老の並木や一憩

同

頬冠り乗せたる馬や雪の原

無駄ばなし

吉 田 莊 一

藤原秘書官の將棋は、速射砲式に、ボン〳〵やつてしまふ流儀だと聞いてゐたが、實地を見ると、どうして〳〵頗る大家の風があるんである。

先づ敵が一手を下すと、暫らく緊視して、ふふん、敵の趣向は斯う〳〵だなど、詳細講評の、さて默考數分間『そこで、俺は斯う行くよ』パチンと、一駒を下して、敵がどう行くか、凝然として喝を靜めて注視してゐる——とまあいつたやり口。風格からいつて、決して眞實でない。否、有段の氣品があると、ほめて置く。

殖銀森さんの二番目の嬢ちゃん、學友間で『孔雀さん』といふ榮稱を貰つた。どうして孔雀さんなのかといふと、いつも第一公式の、一等いゝ洋服を着て來るといふのにある。してまた、ごうしてソナに良い洋服を着るかといへば、いふまでもない。お母さんがないから、自分で算司から取出して、さつさと着て行くのである。この噂が耳に這入ると、當の森さんの端然としたのは勿論、知るほどの人が『なんて、おいといひこでせう！』

居る所に氣付く譯である。

の姿を見入つて見ると、えんす王が歸館するのじやなからうか、岩

長安寺村

長安寺村

雑筆

伊藤 龍

向仙橋から松樹の路を歩いて来ると、路側と足下ばかり眼を注いで居たが、ふと、路上の丸天井のように松葉の覆ひかぶさつて居る隙間から、蒼空を見上げたら、前方の遠望景に奇々怪々な峰頂を發見した。ホテルの赤い屋根は見えないが、其上あたりと思はれた。

村人に聞いて見ると、望軍臺の姿であつたから驚かざるを得ない。峰腹は峰又峰で圍まれて不分明である。攀ち登るに汗流す峻険な巖石が屹立して居るのまで見え

た。望軍臺の遠姿は三佛巖の所に行かうとする橋袂で見られ、また、向仙橋の路筋で眺められる。

望軍臺上に攀ち登つて諸峰を見下すのも壯快な趣情があつて、が、長安寺村に入らうとする第一歩の地で彼の遠姿を見受けるのも別趣あつていゝ。

金剛景情美は徒らに観るのではない。たと眺めるだけでもいゝには違ひないが、観者の見方も工夫を凝らしてはどうかと思ふ、言はゞ氣持を働かして貰ひたい。景情の美しさにも氣持が在る。其氣持を觀者が汲んで見て、金剛景情美の絶對を知る譯である。そして、景情の趣向が美となつて表現して

居る所に氣付く譯である。

明鏡臺の邊りの景情美もいゝ。小雨降る朝か夕に、ホテルの番傘を肩にさして出掛ける。明鏡臺まで来て見たが、あの岩鏡の面に淡い霧が曇りを注いで、半ば濡れて居る。

夏の頃なれば樹葉の魅み返るを知る、秋の頃なれば紅葉が雨滴に耐へ兼ねて散る。澄み切つた黄泉潭上に墜ちて班らに骸を飄搖させてゐる。

明鏡臺の美は雨落の日に氣持が働いて居る。雨の明鏡臺は格別である。

傳説に、えんま大王が明鏡臺下に臨まれて亡者達の捌きをする。謂ふ。善者悪者を岩鏡に寫して、悪者なれば鴨岩の側にある地獄門から突き墜すと謂ふ。捌かれ者達の心持も善者と悪者にと喜びと悲しみの交錯がある譯であらう。

雨に濡れた岩鏡を見ると、なんとなく悲寂に感ぜらる。そして、地獄門の邊りに暗い雲が下りて居るように見えるのも惡亡者の最後の悲を表徴して居るに違ひない。

黄泉潭中には水魚が饑んで居ない。傳説に、鴨岩の鴨がみんな喰べて、岩と化身した。その岩を鴨岩と云つて居る。恰度、黄泉潭を睨んで居る位置にある。そして、其形が鴨のようである。

夕陽の墜ちんとするまで、明鏡臺の下で悠然と居坐つて居た。長安寺の梵鐘閣から時の鐘音が空を透し、樹々を籠ひ、峰々を傳ふて耳に觸れた。私は再び明鏡臺

の姿を見入つて見ると、えんま王が歸館するのじやなからうか、岩鏡に黒い幕がおろされたかのように鏡面は暗い。時の還りゆくにつれ、また節の變るにつれ、其景情美が其折々躍然と氣持を働かして居るのに感付かざるを得ない。

明鏡臺の景情に限らず、金剛景情の美は氣持を働かして居る所に絶對であり自然神の妙技が露出されて居る。

で、金剛景情美は觀者の氣持も働いて彼女の美の氣持と合致して其眞價がある。觀者の氣持の働きのとは景情の見方に時を變へ場所を選び、裏から眺め、表から觀たり種々模様取りを考へて、杖凭り足運んで欲しい。

(一九二六、一一、一〇〇)

法界傳聞記

平田 久雄

◎法曹界で鐵天狗といふと、第一に赤尾辯護士に、指を屈する。

◎その亦氣焰といふのが、シタタカのものである。曰く「英雄は英雄を知る、鳥は概ね僕の技量を、乃公が一たび筒を向けると大底氣死してバタリと落ちるから妙だ、必ずしも實彈を要さないのだ」と。

◎睨み殺しは恐れ入る。

◎そこ迄は行かんが、覆本辯護士も、ズドン組の一人。自家廣告はしないが、なか／＼職場駆け引は、うまいといふ評がある。

◎地方法院の三田村判事、夫婦競争で猫を可愛がる。箸でつまんで、右から一口、左から一口、猫曰く「ウツフ、どんなもんだい」

京 城
つれ草

守屋 三葉

○兼好法師がやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなきと書き残されたる文句など口ずさみつ訪ね見る朝鮮舊都の面影ほど遊子の胸をいたむるはなし。

○さはれ慶州新羅の舊都などまだ見もやらねど傳へきくまに餘りに俗めきたる心地こそせめ、殿堂伽藍古へのまゝに残り王冠玉璽舊態を改めねば一應の名残は残れど堪へがたき追懐の心をそゝるとも覺えず。なべて古跡は跡方なきが哀れも一入まざるとや言はまし先づ日所用ありて慶山迄行きつれど何程の事やはあるなど思はれて引きかへしぬ、人々残念なる事どもなりなど言へど左程にも思はず慶州は美術屋骨董家の世界なるべし、幾分慈心地ある鑑賞家の娯樂境とや言はん。貧乏詩人など金をかけつゝ行く迄もなし。

○京城の慶福宮など何程の詩情もそゝらず。なべて生々しき心地のみして唯興亡の轍に歴史的興味のみ湧くべし。慶會樓のあたり池澄み渡り松色濃やかにして光祿池臺錦繡を開き將軍樓閣神仙を畫くなど歌はま欲しき心地はすれど、矢張り一代の榮華をこそ思ふ誰か哀れと袖をしぼらん。

○開城の満月臺などよし、道長卿ならねど望月のかくることなく

圓の礎掘へけん昔、今の荒廢を誰か想ひし、まして落城の夕など燒かれ行く王城の火の子を浴びつゝ、娼婦のごと牽かれ行く宮女の群など思はずや。露しげき草路を踏めば昔華やかなりし跡かと覺しきところ誰か住み家なりけん庭樹の一株三株残るもかなし。

○高臺に昇るに石段のみありし昔の姿に残れば彫られたるくさくさの模様にもかけをぼちたる痕にも公子王孫のすさびや残るとなつかしきこと言はん方なし、まして蒼蒼したる礎石のこゝは門なりこゝは樓なりなど指さんばかりに敷き残されたる、誰か千年の昔翠檐江欄華を銜ひし王樓の壯麗を想はざる、仰げば閑雲悠々遙に松岳進鳳の山々かはらぬ姿に響ゆるもはかなし。

○満月臺と並びて哀情深きは百濟の舊都扶餘なるべし、名も半月城と呼ぶなり、燒跡に千古の麥の實を拾ひ、落花殿に姫嬪の末路を忍ぶなど去り難き心地こそせめ、まして錦江洋々うねりうねりて流るゝあたり彼方の麓此方の岸邊に半ば朽ちたる樓閣の二ツ三ツ落日を浴びて残れる、國亡びて山河ありとは誰か言ひなれし言の理ぞも六代百二十幾年我が祖先の血を染め骨を埋めしところぞと思ふに感懐しきりに湧いてつくるところを知らず。

○満月臺、半月城にまさりて空漠殆んど追懷堪へがたきものは樂浪の遺跡なるべし。唯見る一帯の高原、まばらなる松の若木につゝまれつゝ無數の古墳を宿せり。鳥は飛んで雲に入り江河流れて霞に

消えり、漠々として一物の確證を残さねば憶測も及ばず。暗中に物を探るに似て焦燥堪へ難きものあり、うらゝかなる春日影を浴びつゝ麥畑傳ひ遺物など湧るにうとうと睡氣を催し、上げ雲雀の聲をきゝつゝ一眠りするなど心行く業なるべし。

○溫柔の煙漂ふ京城のちまたちまたに多來にけらし。

ハハン物語

山口のぼる

○京城法事の内山教授は、極最近赴任した人だが、民法を愛持つて頗る氣サクな、明るい感じのする人である。

○何んでも赴任の途上、釜山でもその他の各驛でも、ヒドク歓迎されるので、朝鮮にゐる人は、コンナにも人なつこいんかと、大いに頼母しく感じてゐると、その夢は京城着と共に、一瞬に消へてしまつた。

○何となれば、それは外でもない例の瑞典皇太子が、氏と同じ列車だつたといふことが、明かにわかつたからである。

○また、氏は釜山以來、到るところで、人が口々に『チゲく』といふてゐるので、何んのことかわからず、京城へ着いて、友人に訊いて、始めて事態明瞭。但し今でも口癖のやうに『チゲく、ハハン』……路を歩く時でも、箸をおく時でも、ツイすべり出るとは御本人の告白。

靈台たより

市村 毅

◎鳳倉から汗嶺直洞を経て天聖へ、天聖から更に靈台へと漂泊の旅を續けて居る間に彼れ程山谷間を黄や紅の華かな彩りを以て飾り立て、居た樹々の装ひもすっかり色褪せて、何處を眺めても淋しい凋落の姿と變つて終ひました

踏む毎にサク／＼と崩れる霜柱を見ても、木鼠が落葉の上をカサコソと逃げて行く音を聞いても、又梢から梢へと飛び移る小鳥の囁きを耳にしても、何處かに慌だしい氣合がする様になりました、日に日に剥き出されて行く梢や幹を揺るがして、山の上から吹き下しては谷の底から唸り乍ら消えて行く風の音に耳を傾けて居りますと何とはなしに氣が減入つて終ひます。

◎此頃山の斜面にでも佇んであたりを眺めて居ると、よく渡り鳥の幾群か通り過ぎるのを見受けます、それ等は恰度風に舞ひ上る枯葉の様に、そして或る群は飄へる毎に銀白色の紙片でも撒きちらした様に輝き乍ら、山を越え野も渡つて、終に涯ない蒼空の何處かに其姿を没して終ひます、又深い谷間の雜木の中を分けて行くと、幾群かのツグミがキユ／＼と啼き乍ら突然飛び立つて、その瞬間に晩秋の心細い感に襲はれることがあります。

◎ひととき紅の葉蔭に命なりになつて居た山葡萄も、黄色の葉の間に提灯でも並べた様に吊る下

がつて居たタレの實も大方落ち盡してしまつて、時々干燥びた僅かなものが裸の枝に漸くしがみ付いて居るのを見る位になりました、又美しく咲き亂れて居た野菊の薄紫や桃色の花も、リンドウの派手な紺青の花も段々と凋んで、昨今では赤蜻蛉の姿さえ見かけることが稀になりました、昨年の今頃全南の和順郡内を歩いて居つた時のことを想ひ浮べると、北鮮の秋は餘りに飽氣無い氣がいたします。

◎此靈台や天聖には武陵里や荷浦里あたりと同じ様に高くて峻しい峰が聳えて居ります、それも大石灰岩層の區域から無煙炭を含む處の粘板岩、頁岩、砂岩累層を以て築き上げられて居る部分に入ると山容がすっかり變つて峨々と屹立つ大岩壁と深い峽谷とが目立つて参ります、殊に天聖里の觀音寺へ行く途中には崖が兩方から逼つて、どつちへ曲るか見當さえつかぬ箇所があります、紅葉、黄葉の技にはその彩りが蒼空の澄み透つた色と映り合つて實に見事でしたが、凋落の今日此頃此あたりを溪傳ひに歩いて行くと、餘りに岩骨が露き出されて居て、寧ろ物凄く様な感じを與へます。

◎若し山の上にも登つて遠くから斯うした場所を眺めると、此一千米餘りの厚さを有する水成岩累層は谷の底から峰の頂までまるで板を重ねた様に山の斜面を横切つて明瞭な縞を造り、北漢山などの花崗岩の山と全く趣を異にした雄大な光景を呈して居ります、殊に一番上位にある淡青緑色を帯ぶる砂岩、頁岩、板岩の部分に入るとその岩質の關係上縞の齒の様に尖つた奇巖が處々に突き立つて、紅葉の時には何とも言へぬ美しさ

を見せて呉れました、曾つて鱗木や蘆木、封印木などが此あたり一面に密生して、水の中に是等の岩層が堆積した當時のことを思ひやつては何時も神秘的な感に打たれて居ります。

◎久し振りで露上面と密田面との境にある高い山へも登つて見ました、初夏頃から秋の半頃へかけて日の光も充分に透されぬ位繁つて居る此密林地も葉が殆んど落ち切つて、その間から長安山の大きな姿や介川郡の高い山脈、さては大同江に至る迄手に取る様に見得る様になりました、天氣の好い日に此峰傳ひに歩き乍ら威鏡南道や平安北道との境に立並ぶ峻峰の雪の輝きを眺めて居ると、思はずすが／＼しい氣分になります。

◎風の少しも吹かぬ日などに斯うした山續きの斜面に枯草の中に身體をすつぽり埋めて日向ぼこする位楽しい事はありません、仰向けに寝て限りない大空を見詰め乍らとりとめもない事をそれからそれへと考へて居るといつか張り切つた心が蠟でも溶ける様に緩んでうつら／＼と夢心地になることもあります、然しやがて斯んな事すら出来ぬ様な寒さが來ることです、そして谷の中を荒れまはる風と共にサラ／＼と吹き付ける紛雪の音を聞き乍ら、百姓家の温突の夜を喜ぶ様になることとせう。

◎月給日の解

山口のぼる

忠北の財務に榮轉した宮本さん當代吏僚中の逸才である。平生曰く『人は月給日を樂むが、僕はその心理が判らぬ』判らぬのも道理いつも貰ふ方より拂ふ方が多い。

眞の雜筆

渡 邊 晋

土地の衛生

佛人マーテル氏の別荘が京城驛の西數町の山にある、二十年前から愛護せられたと云ふ話で、平地は畑、花園、傾斜地は自然の木立ちの山莊である。

愛護せられたと云ふ意味は、京城附近の土着の草木を悉伐から防いだと云ふことで、特に珍奇な植物を移植したのでも無いのに、京城附近には滅びたかと思はれる程の落葉樹種が亭々と繁つて居る。高い木の枝には藤がからみ、地面には鈴蘭も咲く、苔さへ青々と土を潤して居る様は、到底京城附近の感じでない。

境界の鐵條網の外に目を轉すれば、例のザラ／＼の砂山に草は生えず、下枝を切り取られた瘦せ松がボツリ／＼と立つて居る。

豊かさとしみの何と云ふ對照であらう。地極極樂が針金一重で境せられて居るとも見える。そして私の持論である朝鮮人の温泉を改造して保温を計り、掛け蒲團に綿を増したならば朝鮮の地相も二三十年の後は面目を一新し得ると云ふ確信を與へる好模範地である。

家の觀念

幕府の遣米使節の日記中に、毛唐人は家を建つる事を知り不申、大石に孔を穿ちたる岩屋の中に住まい居り候、と見た程に歐米の家屋は石、煉瓦本位である。ロンド

ンでは木造家屋の睡れる舊式の一廊が見物人の興味をそゝつて居る東洋で家と云へば木造の他には觀念が無かつた、私が瑞西に居た時戦後の住宅難を緩和する爲め市營住宅の一廊が急造せられた、壁こそ無いが用材木組み嚴重な木造家屋であつた、私があの家は何かと案内人に尋ねたところ、どの家?と不思議そうに問ひ返してその一廊を認めぬげである、それその家よと指させば、あれは家ではないバラックだと答へた程に、家屋に對する彼我の根本觀念が異つて居る。

炭火中毒

伯林大學シテルンベル教授の日本衛生觀中に、日本人は衛生上の心得に乏しく寢室に炭火の炬燵などを置いて居ると書いて居る。

御尤な觀察であるが、幸に日本に炭火中毒の少いば、家が惡くて通氣が自由であるからである、在來の日本家屋は前項に話した瑞西のバラック以下で、戸からも床からも天井からも壁からも外氣が侵入する、若し伯林の家の様な通氣不良、防塞嚴重の寢室に炭火鉢で寢たならば、翌朝は炭火中毒で自殺して居ることは受合ひである、此の意味に於て木炭採暖の吾人にとつては家の悪いは却て幸福と云へる。

近來外廊は洋風で中に疊を敷いた所謂文化住宅が多くなつたに就ては、採暖法に根本的變革を行ひ殊に木炭を止めねばならぬと思ふ。

人間の退歩

仔犬を貰ふて來た、まだ牛乳で育てる程の幼弱乍ら、便意を催せばやかましく鳴き立て、人を呼び

【一八】
寄せ、綱を解かせて、庭の隅の一番遠い處にヨチ／＼急いで、用を便する。

萬物の靈長は如何、便所は坐敷の床の間の壁一重である。家の前の下水には黄色い水が今でも流れる、市の汚物は市街に密接して堆積せられる。

全く以て犬の子にも劣る面目次第もない。

學校教育

夏の野山に散歩すれば、ある草の種が衣服に粘着してゐるさいがある、葉は車輪狀に輪生し、其の上下の莖を切つて、窺かに子供に張り付けて、御教附／＼とからから、小供等よく承知の草である。

此の草の名が八重葎であると云ふことを、日本植物圖鑑で搜し出した日に、學校から歸つて來た十四歳の子に、八重葎と云ふ草を知つて居るか尋ねた、今日丁度學校で八重葎を習つたが、どんな草か知らないけれど、動物に附着して散布する植物だと答へるのみで自分の常に承知して居るあの草とは氣がつかないで居る。

知つて居るものと思ひ出すことすら學校では出来なかつたのである。

六轉子の句

吉田 莊 一

奉天總領事館の杉浦齊氏、巧に句をやり、號して六轉居士といふ。この頃雜筆入門のしるしとして贈り來れるの句、曰く

落書に佇みにけり秋の聲
早刈の高梁束ねて秋日落つ

まい居り候と見た程に圓米の家
屋は石、煉瓦本位である。ロンド

育てる程の幼少人、位置は任
ばやかましく鳴き立て、人を呼び

早刈の高梁束ねて秋日落つ

後妻

—片岡校長へ参る—

井上 収

龍山の片岡校長から、私の『小母さん論』への参考品を頂いた。がどうも前號で、寄稿家、またはその體驗家にお尋ねしたお返事ではない。

もと／＼『参考品』といふのであるから、それが質問への返答でないことは明かで、どこまでも参考品に違ひない。この参考品には四つの筋書がある、一は私の『小母さん論』に同意する、一はあきらめの觀念から、人の妻となつたものが、先妻の子供から『小母さん』といはれて満足出来るか。一は享樂慾求など問題でない。一は仲介者への不渡り苦情である。

◆ あれだけの参考品文字の内に、

この四つの話があり、私は一體どれを参考にしたものか迷つた。實はこれもいらぬおせつかい、かも知れないが、片岡校長の鍾路校長時代からの御不幸には獨かに同情申してゐる一人の私であるが、片岡校長は、やはりどこかにその後添を求めて居らるゝ慾求のあることは想像に難くない。私は享樂慾念を片岡校長の如く問題でないならば、絶対に後妻を娶るべきでないと思ふ。

◆ これを前提として、片岡校長の今の人妻が『小母さん』といはれて満足出来るか、の疑問は受取れない、また小母さんといはず『母に代つて世話してくれる人』といふ導きといはれる事も、教育者の言だけに一層腑に落ちない。小母さんと云ふ言葉の響は、或人が想像するよりも、圓みと溫みとあるもの、親みも相當にあり母に代つて世話して呉る人が『小母さん』と云ふもので少しも不純でも冷かでもない、片岡校長のそれは、後妻に來る人の満足不満足に出發して居り、遺児への心遣りではない後妻などに來る人に、まづすべて人妻の新しい條件を具備したものは無い、殊に忘れがたみの多い所へ來る女に『小母さん』といはれ満足不満足などいふことはどちらでもいゝ、産みの實母でなく良人からは後妻であり、子供からは繼母であり、男女結婚の常道からすれば、變態である、これを道徳觀念からすれば、また男女貞操からすれば、良人に先立たれた未亡人に貞節を強ふる如く、妻に先立たれた良人も當然後妻などを娶るべき筋のものではない。

◆ 私の『小母さん論』の根據は、やむに止まれず後妻を娶る人の場合に、その遺された子供を中心におかあさまといふのは嘘であるから、眞實に即して『小母さん』お父さまの小母さんであり、私たちの小母さんだとしたらばといふので、森梧一氏は、母に別れた子は母の名に飢え、明けても暮れても『お母さま』を頭の内に尋ね求めてゐる、との實感により、なるほど、感じたので、先輩の體驗を伺ひたいといふので、片岡校長は享樂慾求など問題でもなく、小母さんは賛成だが、後添の人から見れば不満足だといはるゝので、どの點を私が参考にしたものか迷はざるを得ない。

片岡校長は畢竟、中間宣傳と世間の構成宣傳と不渡り手形が、一番氣になるやうに考へらるゝ、果して然らば、校長は何もそんなことに頭を煩はさるゝ必要はない、世間の宣傳や噂が事實でなければ、一向に考慮に値しない。

◆ 甚だ先輩に對し、失禮な事を申上げるやうだが、先生はそのお子様の爲に、また先立たれた夫人の爲に、孤獨を守らるべきだと思ふ。そしてお子様達のお母さまは、あの佛壇の内に居られ、子供の成長を待つて居らるゝ、と朝夕なり命日にははれるのが、一番教養の上に嚴肅味の加はることと思ふ。

◆ 私の場合ならば、必ずさうする

お取き

市内及び地方社友で
井上収氏近著『半島
に聴く』（參圓五十
錢）をお求めの方は
御申込次第本社でお
取次致します。

然し私は享樂慾求を決して度外しての議論ではない、そも／＼妻といふものは、一人であり、母といふも、二人ある筈はない、後妻、繼母といふは人倫上の變態で、その文字の上にさへも暗い影がさして居るやうである、仰せの如く、私も或は妻に先立たれ、また私がお先に失敬するかも知れないが、もし前者の場合、子供の立場から斷じて後妻繼母を家系の内に入れない。

もし私の所謂享樂慾念が、燃えて熄まぬならば、その機關を他に求むるか、家庭外に大びらに設置してもよいと思ふ。

(一一・一二)

【一九】

雜 筆

の 値 打

柄澤 四郎

×

たしが厨川白村の『象牙の塔を出て』であつたと記憶するが……己の心の生活の曝露狂があるならわたしは夫れを一種の藝術的天才だと見ても可からうと思ふ……と言つて居る。心の生活とまでゆかずとも、自分の感ずる所、信ずる事を、その儘に書くことは造作もない事のやうに思はれ乍ら、案外に面倒なことである。それ程の勇氣を持ち得ない自分を悲しく思ふことゝ、またそれ程の自由を與へてくれぬ環境に厭氣のさすことは、筆で飯を喰ふ者の屢々體驗することである。どうした譯かと訊ねると、人間の世間交際には、くだらぬお世辭が、ヨリ多く効果のあるものと自他俱に考へられて居る爲だ。更に言葉を換へるならば文章を書くこと云ふことが、直ちに經濟價值を産み出そうとする低級な効利觀か、然らずんば何等乎の爲にせんとする利用觀にのみ捉はれ勝であるからに違ひない。

×

菊地長風さんが、朝鮮で出来る書物に所謂の良いものゝないのは文藝的價值のあるものが乏しいことを意味する。著述する者の多くの考へが『儲けよう』『世間的に有名にならう』と言つた所に低迷して居るから、出来上つたものに生命がない。適にそうした天才的の閃きのある人が出ても、直ぐに

其の天分を、効利化し、權勢化することに墮落するように周囲が出来て居るから駄目だ。と話すが、私の所謂『言ひたい事が卒直に言へぬ』理由に一致する點が多い。新聞紙に夫れを求むることは、現代の資本主義經濟に立脚する總ての新聞紙に對して不可能なことであつて、敢て朝鮮の新聞だから駄目だとは思はぬ。經營者自身の個々の思想的傾向を辿るには、却つて都合の好さそうな雑誌に求めんとしても駄目だ。この點は朝鮮に於て發行する雑誌には、殊更に失望させられる。

×

毎號の京城雜筆をみて居ると、個々のものに就ては、随分、言ひたい放題なことを言つて居るが、決して効利觀に出て居ない。言ひたいことを卒直に言つて居る。夫れが態度として純であり、心悅しくも思ふ。自分は、それを雜筆の個打だと信じて居る。流石に雜筆誌上で、論理の輕業をやるやうな不心得者は居ないが、氣取つて可なりにも固くなつて居る者はある。なぜにもつと寛ろいで飾り氣なく物が言へないのだらうか、と感じさせられ者はあるやうだ。

吾々は、意識的にでも無意識にでも傳統的に、文章を書くこと云ふ場合は、そこに何等乎の形式を踏み技巧を必要とし、單にものを言ふと稱する場合には、素直に話すと云ふ自由を意味するかのやうに感じさせられるが、考へてみれば馬鹿々々しい譯である。強ひて演説の直譯速記文を以て文章の極致であるとして主張するのでないが、心持や態度に於て、文章を書くことを、そんなに形式的に、技巧的に必須の條件としなくもいゝ

【110】

譯である。イヤ寧ろ在來の文章觀からする技巧なんぞは管らぬものだと思ひたい。そう信ずればこそ雜筆への寄稿が、もつとく、無技巧であつても良きやうに思ふ。

×

雜筆は餘りに自己陶醉の文章が多くてね、と惡口を云ふ者がある成程そうした傾向があるかも知れぬ。然し京城で發行される多數の雑誌類が、餘りに非人格的な記事が満載されて居るのも不愉快でなからうか。もつとく、筆者その人の面影が浮き出して來なくては駄目だ。勿論、人格的調子である可きものを、妙にこじれた個々の趣味的調子を、極端に擴大し、誇張して書かれたものがないでもない。就中、己れの家庭宣傳に巧ぶつた陳飾を羅列して得々たるのなぞには厭氣のさすこともある

×

が然し何は免もすれ、直截簡明纖細、敏感……時に鈍感も結構だが……な自己表現、或は情趣豊かな感想、追憶の漫録として、個人的人格的色彩の濃厚な所に生命がある筈だと思つて、自分は惹きつけられてゆくのである。(一五、二二、二日)

◆變つた早起

山口のばる

榎本韓羅士、獨特の早起法を實行す、それに依ると、二時でも三時でも眼がさめたら早速起床、ちやんと洋服をつけて、二度と寝ないといふのである。『それでは眠いでせう』といふと『眠いとも時とすると夜の明けぬうちから居眠りをする』

生命がない。適にそうした天才的の閃きのある人が出て、直ぐに巧的に必須の條件としなくもい

迎された時代もあつたが今は全く見なくなつた。

芝居

——今昔思ひ出話——

前田昇

二

舞臺裝置を始め衣裳小道具迄是も大きな進歩をした、否劇の凡てを通じて最も其著しいものであらう。殊に電氣を利用するに至て全く面目を一新した。昔でも今でも大道具や衣裳小道具の精粗良否は元より座位に由つて等差のあるは當然だが、新調園菊等千兩役者の舞臺でも今から思へば夫は貧弱のものであつた。今でこそ舞臺は勿論花道まで疊表や雪布を布きつめるが、以前は大概望の中でも板の間にちかに坐つたものだ。座は何處であつたか今能く覺へないが、忠臣蔵の三段目で例の通り若狭の助が、右の片衣を引外つして『己れ師直眞つ二つ』と勢ひ込ん

が一般のものは今日に比べたらお話にならない。一體今日が少し贅澤すぎるかも知れない。小道具などの餘り目につかない所に昔の俳優の相黨苦心を拂つたものがある。五代目の音羽屋即ち先代の菊五郎は有名な癡り屋であつたが豆絞りを始め各種の手拭許り數十本貯へてあつたと云ふ。是は云ふまでもなく役々によつて同じ豆絞りを使ふにも其絞りの大小古き等まで注意する結果である。此邊は唯金にのみ飽かして贅を云ふに比べ味のある所と思ふ。

今の舞臺に絶対見られないもの二三を御紹介しやう。

『面明り』と云ふものがあつた。是は電氣や瓦斯は勿論洋燈さへ無かつた光明具の頗る不完全な時代に、重なる俳優の顔面を觀客に明瞭に見せしむる爲めに用ひたもので長さ八尺の弓のやうな竹の先きに蠟燭を立てる爲め四角な臺を取付け是に蠟燭を立て黒衣を着た者(俗に黒ん坊と云ふ)又は柿色の社袴を着た後見が是を持つて俳優の面部に近く關するのである。言ふ迄もなく俳優は活動して居るのであるから此後見は俳優と全く同一に進退せねばならぬ。所作などの時は其の指す手引く手に一致して此の蠟燭を上下進退するので中々容易の業ではない。一つ間違つたら蠟燭の火を俳優の横面に叩き付けるやうな事が出来る。今から思へば實に馬鹿げたやうな話だが當時は全く實際の必要上から起つたに相違ない。苦しい發明もあつたものだ。此の『面明り』は其の後瓦斯を用ふるやうになり實際必要を感じなくなつても所作事などには依然用ゐた場合もあつた。一種の趣きがあるなど、尙一部に歡

迎された時代もあつたが今は全く見なくなつた。

次は舞臺に於ける死體の始末である。切腹や斬られて斃れて居る者で別に必要のないものは後見が来て黒布(下等)には赤毛布などもあつた)で捲ふて死體は黒布の蔭を備つて舞臺裏に引込んだものだ。正面からは成程見へないかも知れないが少し側面即ち高土間などから見れば明かに見へて甚だ見苦しく興の醒めるものであつた。今では第一に成るべく舞臺に死體を残さないやうにする。尤も筋によつて死體が是非入用のもものは致し方がないが、否らざるものは一刀浴びせると踰限として簾陰か又は戸障子の蔭に至つて顛倒する。又は首を打つ時なども蔭で太刀音丈けにするか若くは幕切れか舞臺を廻して首を落す音だけを聞かすやうに行ふ。死體入要とあつて残存の必要があれば其後に放置して置く。兎に角醜ひ態は見へなくなつた。

京 城 雜 筆

での出に、丁度花道の中頃で長袴の裾が釘に引き掛つて若狭の助危く前にのめらうとしたを踏み堪へると同時に、此役者眞に怒氣心頭に充ち片脚に渾身の力を加へて袴を蹴り長袴の裾を小一尺引き裂いて約束通り本舞臺に懸つた。こうした不測の出來事の爲めに若狭の助の態度は眞に迫り實に見事であつた。殿中の幕で袴の裾が釘に引き掛るなど今日では到底想像の出來ない事だ。

衣裳や小道具は昔でも市川尾上と云ふやうな所謂宗家筋には代々相傳のものがあつて今尙それを用ひてゐる。例へば勸進帳とか土蜘蛛とか言つたやうなものに用ふるものでは等は元より結構なものだ

花道の出即ち揚幕から俳優が出るときに幕内で妙な奇聲を發したものだ。これは音羽屋とか大和屋とか其俳優の家號を呼んで豫め出場に先立ち觀者に知らせたもので勿論是は座頭とか中軸とか其一座の主なる俳優に限られたものだ。が、久しい以前から無くなつた。關西地方では十數年前まで此風があつたが今は知らない。

舞臺の上手揚げ幕の前即ち『チヨボ』(大阪の上床)の眞下に半疊と云つて疊の二尺四方位のもの敷ひて一人の男が坐つて居た。此男何んの呪いか裾を『クルリ』と捲くつて兩膝頭を二つならべて露出させ、見物席の騒がしい時や小兒の泣く時などに一種の奇聲を

發して制するのであつた。可なり無作法なものであつたが今は無い『口上』と云ふものが殆んど無くなつた。江戸時代には屢々出たやうだが私の覺へてからは淨瑠璃幕の時に限つて出たやうに記臨する。大概幕が開いて淺黄幕の前へ袴姿で三寶に奉書か西の内へ書いたものを載せて出て讀上げるのである。例へば……淨瑠璃名題『積る戀雪の關の扉』相勤めする役人替名、と云つて俳優並に出語りの太夫三味線曳きの名まで悉く讀み上げ、最後に『右の役人残らず相出で』云々と云つて引き込んだ是れも今は全く無い。

ものに『廻り出し』がある。説明するまでもなく舞臺下から押し上げるので極まつた形で山車の人形のやうな静止の姿で一進一止小刻みに刻んで押し上げられるのである。鳥渡意味の解らないものである。今でも狂言によつては行つて居る多く用ふるものは國性爺の紅流しの和藤内や床下の男の助又は瀧の文蔵などである。意味は無いが古風な一種の趣のあるものである。更に減つたものに『ツケ』がある『ツケ』とは拍子木で板を叩いて手足の舉動を誇大にするもので争闘即ち立ち廻りとか疾驅とか其他必要な動作の節奏を明確にする場合に用ひられるもので以前は

本社娛樂室成る

社友將棋同好會

本社の小さな娛樂室は、十一月三十日やつと工を竣へました、事務室や讀書室は明年結氷明けを待つて、再び工を續ぐことになつてゐる。兎に角娛樂室だけは、成功したので、本月から社友雜談會、句會、基會及び將棋會は開きたいと思つてゐる。先日廿六段(將棋)がやつて來たので、熟議の結果、とりあえず社友將棋會を組織することとし、同氏を師範として

- 一、本會は、雜筆關係者を以て會員とす
 - 二、本會は、毎月四回——毎週水曜日午後六時より開會す(但し正月以降は月八回)
 - 三、會員は、一ヶ月金二圓五十錢を納む(これは師範に對する謝禮金)
 - 四、本會を水曜會と呼ぶ
- これだけを協定した、師範廿六段は毎會出席し、親しく會員を指導する筈である。本社關係の御同好はどうぞ奮つて御入會を望む。

【三】

可なり頻繁に用ゐられたが近時頗る減少した。正に然るべき事だ。狂言の排列も大分變化した。以前は判で押したやうに先づ一番目として時代物を中幕に金ピカ物即ち義太夫物二番目が世話物で大切は必ず所作事と極まつて居た。是は可なり繼續されたが其の内に淨瑠璃幕が無くなつたり中幕物が略されたり近年では寧ろ一幕か二幕物を數種列べるやうな事になつて來た。畢竟時間の短縮と『ダレ』場即ち餘り面白くない場面を省かんとする結果と思ふ。實際從來のは餘りに盛り澤山で一幕でも幕數の多きを望むと云つたやうな傾向があつたが近來は觀覽時間を短縮し殊に一日の業を了つてから夜に懸けての半日娛樂となつて來たのは誠に結構で時代要求の然らしむる結果であらふ。

◆武道家歌話

平田久雄

滿鮮劍道大會に、朝鮮軍慘敗したと聞いて、荒木先生(巡查教習所)一首野次つて曰く。

我れ獨り飲むと思ふな池の鯉
廣い海には鱈もおるぞや

エヘン／＼と咳拂ひするのを見て
應援團の小泉先生、何をツとばかりこれも一首を贈る。

鱈水の味も知らざる蛙奴が
魚の心をいかで知るべき

これも肩を聳かして、傲然としてゐる。この光景を、ちらりと見た教習所長の藤井國兄君、これは風雲容易ならずと見て

洪水のあとや小雜魚の大騒ぎ
と／＼一瞬に吹飛ばして了つたので一同大笑ひ。

へば、所謂他家の佛を拜むもので
お家と思ふ念が乏しいとしてゐる

酒食が烈しいから運動せねば胃腸
をコラす、選舉の運動か但しは飲

偶 感

中 村 郁 一

雜筆の岐路

松本さんは京城雜筆が政治時事の報導論議が自由になつたとて、先月の紙上で發表された、お目出度いと云ひ度い、併し雜筆の爲めに果して是非か、松本さん此の際に筆を締めなさい、雜筆はあなたの經營ではあるが、將來の方針を取違へたら、困難に處する場合が出来ませう、政治を論議し、時事を評論したら、雜筆の寄稿家は減りはしないか、寄稿家が減れば……自然雜筆の人氣が……。

教育家の頭

今年の夏京城府教育會で編纂した京城案内はチヨイと小綺麗に出來てゐる、併し教育家の頭が窺はれる、卷末に京城四季の鴨綠節の俗惡なのを輯録してあるが、之は先づお互さま様な氣分を匂はしたつもりとして置いてよいが、朝鮮年表に至つては一言なきを得ない、上に萬世一系の皇室を戴き、神武天皇即位紀元を有する宇内無双の我國に生を享け、第二の帝國民を教育する重大なる任務を負へる教育家の集團として、此の年表に耶蘇紀元のみを根幹として掲揚し、神武天皇御即位紀元即ち我帝國の紀元を開却した一事はどんなものである？。一事が萬事、教育家からして日本國民に讀ましむる京城案内に我國の紀元を開却する様では誠に心細い次第である、之が私の藩で有名な葉隠武風から言

へば、所謂他家の佛を拜むものでお家を思ふ念が乏しいとしてゐる之では帝國の教育上チトかんしんが出来……。

府歌の權威

不學短才な私の蒙を啓いて貰ひ併せて先達の上に垂教を乞ふた大京城府歌に對する私見（十月三十日の京城日報紙上掲載）に付て、今日（十一月十日）まで何等の釋明も指導もない、尤も私の意見が一顧の價値の無い爲か、但しは當局なり委員なりの方に、釋明指導の辭がなくて閉息されたか、何れにしても反響のないには驚く、府歌は一時限りのものでない、永遠の府歌であらねばならぬ、緣目的のものでは出来ぬ、先日制定されたのは兎も角も府歌としてアマリ傑作でない、酷に失するかは知らぬが瑕瑾のある府歌である之を存續する事は府民の面目にもかかはる、更に、改作するなり、再募するなり、何れにてもよし、速に傑出した府歌を得たいものである、大京城三十萬府民中、奮起する文士なきや、此瑕瑾ある府歌を以て甘するは、府歌の權威をおとす所以で、ひいては京城府の面目にも……將又我等府民の面目にも……。

選舉と運動

現世の人間が凡べて悉く、孔子様やクリストの様なものにならない限り、理想選舉と銘打つてもやはり運動の必要はある、候補者あれば運動員があるのは必然的である、世には運動員の爲にかつがれて候補者に立つ人も往々ある様である、言語同斷沙汰の限り、金満家の候補者に限つて多數の運動員が蟬集して来る、酒食が烈しい、

酒食が烈しいから運動せねば胃腸をコワす、選舉の運動か但しは飲み過ぎ喰ひ過ぎに因る腹コナしの運動か、何れにしても、今年は初夏に學校組合議員、晩秋初冬に府協議會員の改選、運動員のあたり年……。

又

議政壇上に立つて獅子吼する人侃々諤々の論客、高遠の理想を高唱する爲政家、孰れも結構、併し乍ら府協議員は諮問機關である、議論の人よりも、理想に走る人よりも、當面の問題に熱の人を欲しい、深思遠慮のある熱の人なら、そして獅子吼する人なら尙結構、如斯の人は果して幾人かある……運動員の腹コナし運動と對比して實に……是は京城のみの現象ではない……（大正十五、十一、十日）

◎よか／＼話

吉 田 莊 一

◎西鮮日報社長の長谷川君は、將棋に於て初段の實力を有し、たまに京城に來ると、方々から招待されるので、二三日はどうしても豫定が狂ふ。

◎釜日の芥川氏も、同じく將棋をやるが、これは長谷川君より二枚くらゐ弱い。しかし老公決して駒を引けとはいはぬ。いくら負けでも平手でやる。記者が會て『それは無理だ、あんたが讓歩せんといかん』といふと、老公けろり『ソウいふと、さうかも知れん、近年大分やつたが、一度も勝つたことがない、向ふが少々強いかも知れん、よか／＼來年からこつちが讓るとしやう』來年の二字に、老公獨特の不負魂がある。

【三三】

帽子の間違い

篠田治策

瑞典皇太子殿下の午餐會が朝鮮ホテルに催された日の午後であつた。瑞典皇太子殿下には同妃殿下及び隨行諸員と共に昌德宮の秘苑に成らせられた。秋未だ高からずと雖も、亭々たる老松は透みわたる空を蔽ひ、鬱蒼たる密林は此處彼處に紅葉を混へて、幽邃閑雅の地域は外來の貴賓を迎ふるに充分であつた。玉流川のわたりに、飛流直下三千丈の説明をきき、不老長壽の藥水を飲んで、兩殿下は一行と共に打ち興ぜられて居つた。

一行の中に京城大學の今西博士も居つた。博士は朝鮮歴史に精通せるを以て、特に選ばれて殿下の御案内役となつたのである。私は此日同博士が帽子を被らざるを發見した。御案内役たるが故に、鞠躬如として絶へず脱帽せるかとも思つたが、帽子は手にも無い。手には只研究のノートや、原稿を容れたらしき折革囊を携へて居るのみであつた。嘗て東大の大澤博士は無帽主義で、帽子を被らず教室に通つたことも聞いて居る。今西博士も最近無帽主義となつたであらうか、さりとて貴賓の御案内役として、作法上如何なるものかとも思つた。私は奇異に感じたので、博士に其理由を問ふて見た。

博士の答へはこうであつた。即ち無帽主義でも何んでも無いが、本日午餐會の歸途に自分の帽子が見當らぬ。誰か先客が取り違へたのだが、其取り違へたと思はるる帽子を被つて來ても、萬一又其帽子が第三者のものであれば、次から次へと間違を生ずる故に、只自分一人我慢すれば夫れで済むと思ひ、其儘殿下に隨行したのであると。私は博士が斯かる重要な時機にも多少儀式的の外出に於て、何者かに帽子を取り去られても、何等の不満の色なく、更に他人の迷惑をも顧慮して不便を忍び、談笑平常と變らざる學者的の態度に深く敬服したと同時に、午餐會の來賓中に甚だしき粗忽者のあつたことを憤慨した。

兩殿下は夫れより秘苑を逍遙し、演慶堂にて茶果の饗應を享け、御機謙最も麗はしく御旅館に歸られたが、私も亦此日の御接待役たる任務を終りて夕方に歸つた。玄關を上りて帽子を脱し、家内に渡したるに、家内は直ちに私の帽子が代はつて居ることを見出した。再び手に取りて之を見るに慥かに違つて居る。内部を調べて見ると、今西龍と記せる一枚の名刺が挟んであつた。南無三ボー帽子を取り違へたる粗忽者は私であつた。先刻奇異の感を以て今西博士に質問した際にも、博士の帽子を私が被つて居つたのだ。普通の場合と異り、貴賓に隨行する際、博士をして無帽主義を餘儀無くせしめたことは、實に博士に對して氣の毒であつた。私は後に博士に對して其粗忽を謝し、寛恕を請ふたが、想へば實に近來の大失策であつた。

帝展招待日

感想

山田新一

一
タキシイを雨の上野新設美術館石殿の前に威勢よく乗り捨てた、それは十月十六日の朝。然し其處には見渡す限りと云ひ度い位澤山の然かも立派な自動車が一ぱいに並んでゐたので、たまさかの大奮発も、却つて其のみすぼらしさにグシャツと參つて了つた。

見れば今し石段を降りて來るの正しく、加賀百萬石前田侯爵夫妻である。成程侯爵は聞きしにまさる美男におはす。だが菊子姫のもの／＼しい毛皮裘が、決して其の人の美貌を雑誌の口繪以上のものたらしめてゐないのは何となく寂しい氣がした。

我等の一行十八人、自分宛招待狀「御家族御同伴」の文字に甘えて入場、一枚の招待券で四十七人入つたと云ふ記録に較べれば随分御遠慮申上げた事と云ひ度い。

一行中には、はる／＼京城から見學に走せ參じた朝鮮美術協會の森・前田兩君、目下京都畫學生の山口、李兩君に松崎嬢、それに今度の入選畫「少女の像」のモデルになつて貰つた、崔嬢等ありて大いに朝鮮臭たつぷりである。

然かも場内ではすぐ今度一緒に入選した龍中の遠田雄氏に遭つてお互に慶び合つたり、又和田三造氏の総督府壁畫下繪「羽衣」に見惚れてゐると本府の高橋濱吉視學官に背中を叩かれてびつくりし

たり、前三越支店長の橋本さんにもそこで遭つたり、何だか東京で展覽會を見てゐるような氣がした。

二
扱て今年帝展の日本畫では、何と云つても平福百穂の「荒磯」に一番強く打たれた。靜かに見てゐると、激浪は無心に戯れ、巖上の千鳥は遠くはるけく啼くが如く、巖を彩るの墨は墨にあらずして唯々男性的氣魄そのものを現はし、浪頭に躍る金泥は迸つて吾人の魂を洗ふ。自分は此の繪の前に久しきを忘れねばならなかつた。

福田平八郎氏の「朝顔」中村大三郎氏の「ピアノ」は自分の最も好まざりし處、それ等は共に日本畫家達の所謂藝術なるものが、到底自分等に肯定出來ないものである事を示して居るかのやうである。又山口蓬春氏の「那智の御山」は美しい又畫品もある。美術學校で西洋畫三年から日本畫の一年へ轉科して、大正十二年に自分等と同期に卒業した山口君が早くも特選首席で且つ帝國美術院賞とは其の出世の早やいのに驚かざるを得ない。此れは異數の拔擢としても充分注目し得るが、又同時に近來洋畫から出た日本畫家が案外皆好成绩を納めてゐる事實は餘程考ふべき問題ではないだらうか。

三
西洋畫部では、殊に今年は槐樹社具餘りに濃厚の感がある。

然して槐樹社も今や立派に畫壇的特色は作つて了つたが、さて行詰りと云ふ感はないであらうか。高間惣七氏の仕事には既に峠を越したるの感を認めるし、能岡美彦氏も遂に氏の最短所とも云ふべき惡達者さが眼について來た様で

ある。

茲に於いてか、自分等は鈴木千久馬、前田寛治等を中心とする、新人團がどうしても帝展に於ける重大な使命を擔つて來たことを痛感しなければならぬ。

「裸女」に現はされた鈴木君の革新的氣稟と、「〇嬢」によつて遺憾なく發揮せられた前田君の、鋭敏な感覺や、壯重な質量感帝展の將來に何を暗示してゐるであらうか。

會員委員の中では自分は矢張り和田三造氏の「羽衣」を挙げ瘦い之は實に傑作である。同時に自分は南薫造、金山平三氏等の諸先輩が何とかも一度昔日の霸氣を盛り返して頂けたらと思はずにはゐられない。

藤島武二先生が昨年に引續いて出品をせられなと云ふことは、却つて先生の藝術的良心の深さを知る者に取つては一種涙くましい尊敬を感じる。一日も早く先生の自信に充ちた傑作に接し度いものである。

四

青山熊治氏は其驚異的大作「高原」によつて彗星の如く今年の洋畫壇に十年振の返り咲をした。然かも洋畫部の最高賞である。

文展三、四回に「九十九里濱」「金佛」等を出品して三等賞、二等賞を續げざまに獲つた當年の青年畫家も今や四十の坂を大分越して了つた。

漂然故國を後にしてから大正十一年の暮に歸朝するまでの慘めな氏の放浪十年こそは、語るも涙である。然かし大正十二年の春から秋へかけこの自分が青山氏に得た親しい交友に於いて、清貧と不遇のどん底に涙をかくして超然たる

大天才の姿を幾度見たか。

卓子らしき卓子なく、椅子から寢臺に至るまで総ては氏自身の手によつてビール箱によつて造られてあつた大森の書室は、花と咲く露に夜の更けるのを妨ぐるに何物もなかつた。夜更けて電車の音を聞かずなれば、ビール箱を奨めて、自分にも眠りを與へてくれた。鬚髯茫々兵隊服のやうな異様な服を着た青山氏の口から出る話は、大抵は、或は巴里畫壇の話から遂に猥談に落ちるのを常としてゐた。ルノワール翁からの書簡を見せ、貰つた同じ夜異國の娘達の手紙

京義線

車中から

長谷川義雄

近頃、余はホテルを定宿として居る、油つ濃いバタ臭味は餘り感心せぬが、室内清酒、洗面器も、風呂も、寢臺も、きたない話だが便所も悉く一室内に備へ付けられてゐるから、頗る便利で手取り早い、何事も内地式の宿屋のように女中さんの手を借らずに要事が便ずるから、調法である。殊に氣に入つたのは、ホテルの宿帳には、姓名と住所のみを書けばよい、これが普通の日本旅館になると、まづ肩書原籍、住所、年齢、旅行の目的、族譜、前夜の宿泊所まで書かねばならぬので頗る七面倒くさい、年をかさねると、妙な老人の心理状態になるもので、年齢を書くことが如何にも極まりが悪い、高齢になると、最早諦めもつた

を見せつけられて交錯した不思議な昂奮の裡に寢につかねばならなかつた、そんな夜もあつた。

然かも青山氏四十才を半ばは過ぎて未だに娶らず、自分は當時二十五才既に妻子を抱えてゐたのだから面白い。

帝展に『高原』を見た時自分は心の中で『青山さん』と何度も呼んで見た。新聞雜誌帝展批評の多くはこの畫が或はシャバンヌ風であると云ひ、或は又セザンヌ張りだと傳へてゐる、だけれ共自分は矢張り此の繪の中に青山氏の美しい偉大な全人格を充分に見るこ

めか、別段極まりも悪くない相だ四十とか五十代とかになると、わけてこの悲哀があるものと見へる尤も老年は多くの場合、老境を意味するから、之も若返りの一つであるかも知れぬ。

私は、たま／＼久し振で車中に邂逅した山縣三郎さんに、話頭この事を話した。山縣さんは、ソールブレスの社長であつた五十雄さんの令兄で、少年雜誌の元祖少年園を經營した人で、今でこそ當年の文名はないが、四五十代の人には必ず山縣さんを記憶し、又山縣さんを通じて少年園を聯想するであらう。山縣さんも、自分の言に賛し、私が洋行した際は單に宿帳には日本山縣としした、その點になると西洋人は簡單明瞭だ、又日本の宿屋に泊ると、職業を紙屑商とするので、宿屋からは御冗戯でせうと笑はれる、併し、われ／＼の文章は結局紙屑籠に入れる、のだから紙屑商もまた妙ならずやと、他愛もない話に車中大いに賑つた。

【二六】

とが出来る。銀灰色に沈んだその色調と落付きと遠くはるかに浮んで見える海の藍色とは、人世の理想郷の夢を語るかのやうではないか。世相に飽き貧しさに疲れた青山さんは何時もそれ等に屈古垂れることなく、超然としてこんなに立派な靈の畫境を忘れることなかつたのである。

青山氏は、その日本に在りしと西比里亜に在りしと、或は又巴里に在りしとを問はず、世界の隅々に迄も愉快な、飾り氣のない奇行と逸話の種をまき散らかして來た人である、その事に就いては、本紙十月號に執筆した『本朝畫人異聞』と云ふ一文の中にも入れることを忘れて了つたから何れ稿を更めてペンを取ることになしたい。

今は唯、流浪の中に一生を終るかと思へ云はれた青山氏がかくも花々しく畫壇へ返り咲きしたことを、氏を知る人の限りと共に、喜びに喜んで擲筆して置かう。

◆本町奇人傳

石川 利夫

本町奇々園主人の倉田さんは、筆を持つて字を書かせると、渾然として一家を成してゐる。俳句が味いといふ評があるが、先生仲々作らない。京城での變り者で、口は悪いが、人の世話に随分する。いろんな發明を心がけてゐる青年で、現に世話になつてゐるものが数人ある。

これは奇人傳中の人ではないが若くて、働き手で、世話好きで、頼まれたらあとに引かぬ人に、浦島屋の川井氏。本町の名物だ。

食つて行けるではなし』

甲「左様、御同感で損はしても店

が右往左往、混雜なことだが大目然に清められた私共の頭は冷靜を

年の暮れ

久松前平

今年十月に馬鹿に寒冷が襲つて行人の襟を正さしめた、誰れに會つても『今年は馬鹿に寒さが早い』と身震ひする様な噂許り、此分では済むならば折角の豊作も輸入不足で減収、米の値が騰がるであらうと豫想された位であつたが天長節が過ぎて十一月に入ると反對に温暖になつて大騒ぎして引き出した外套を捨ててもボカリ／＼と心地の好い小春日和が續けられた、此次はきつと本當の寒さが襲來するだらうと思はれるので例に依つて全家族連れ辨當持參で秋の獎忠壇公園に清遊を試むべく八日の日曜日に電車に身を托して打ち興じつつ進む、五分に漏れず昌慶苑或は獎忠壇又は郊外に出掛ける人々で電車内スシ詰め盛況を呈して居る、窓外の人道にも秋の清興に出掛けると思はれる人々が多いやうであつた。

電車が黄金町の三丁目邊りに來た頃私の耳の側で『ドウですかこの不景氣は』『イヤ御尤も様でとてもやり切れません』と問答が始まる、ふと顧みると私の後側にブラ下がつる五十前後の老人二人の問答だつた。正しく經驗の深い商人同志の挨拶だと知つて聞くとも無しに耳をそばだてると話は進む。

甲『實は手を出しさへすれば必ず損ですから困つたものです』
乙『そうですね私も商賣を止めてしまはうかと思ふが止めた所で

食つて行けるではなし』
甲『左様、御同感で損はしても店を開いてさへ居れば、何とかならうと思つてな』

乙『實際です、然しこんな不景氣に會つたことは始めてですが今日なんか見て御覽、山登りぢや動物園ぢやと云つて相當金子を使つて散歩に出掛ける人も多いのですからモロシは金廻りのよくなる筈ですが』

甲『本當に此不景氣は分かりません、去年の暮れが不景氣のドン底だと云はれましたが此分なら今年の暮れこそ、みじめなものですよ』

乙『全く／＼今年の暮れ許りは切り抜けの出来ぬ商賣人がたんと出來ませう、大した不景氣ですよ』

と噂して一人が途中で下車、私はなんだか最低限度のお辨當を拵へて一家族出掛ける私共迄もが浪費者の内に數へられた様になつて身をすくめずには居られなかつたが經驗の深い商賣人同志の不景氣談が掛りきも無い眞の不景氣の聲だなと耳の底にウンと響きを感じた待つ間程なく獎忠壇公園についた、家族連れもあれば、三々五々の寄り合ひ散歩者もあつて大賑ひ實際不景氣風はどこを吹いてるかと思ふやうにある、南山の翠緑を背景にして紅葉が點綴されてる景色は何とも云へぬ、眞紅の葉櫻が落ちた其の上でお辨當開き、氣も心も清々する、子供等は無心に飛び廻つて愉快氣に見へる、まさしく樂園の人々だ、それから一同でそろ歩きして甘露泉と名づけられた藥水のある所に辿りついて清冽な藥水を吸ひ交し大和町に出た自動車も飛ぶ人力車が走る牛馬車

くことが如何にも極まりが悪い、高齢になると、最早諦めもつくたに賑つた。

ずやと、他愛もない話に車中大きい賑つた。

頼まれたらあとに引かぬ人に、浦島屋の川井氏。本町の名物だ。

が右往左往、混雜なことだが大目然に清められた私共の頭は冷靜を保つことが出來た、そして電車の中に聞いた時に何となく年の暮れの脅威におびやかされた様な氣になつたことなどは思ひ出しもしなかつた、私は生活苦にあくせくしてつまら無いこと許り考へるよりも自然に親むことを忘れずに常に清淨の氣持を保持することに努めることも光明の生活に導き得る一つの信仰だとも思つて居る。

見聞記入帖

石川利夫

○ 京南鐵道常務の立川さんは、實業家としては、ちよつと異色の部類に屬する快丈夫だと思ふ。

○ 支那に長く居つた人で、隨つて漢籍の總番は、たつぷりある。ほんの鳥渡した會話の中にも、深く支那學をやらねば、到底口から出ぬやうな氣品ある警句が、ほかり／＼出る。相對して、尋常のしろ物ではないと、つく／＼思ふ。

○ 東京では、魁新聞を長く經營してゐた。たしか週刊ではあつたが政界財界に、雷火のやうに畏れられ、また憚られてゐた。一たび論陣を張ると、正々の論、堂々の筆論敵を、壓伏しないではおかなかつた人である。

○ 見るから南州型といつたやうな風格がある。それでゐて、ぞん外歳は若いのである。若いけれども頗るの人情通で、あの名人肌の竹内技師長さへ、うちのおやぢは、腹は出來てゐると、大に自慢してゐる。

財界時事

鮮銀のこと

別府八百吉

▲鮮銀に多年あるが朝鮮にはまことに馴染のうすい橋本理事來鮮

君は稀れに見る小男で、京城にゐたら瘦せてゐるだけ矢鍋殖銀より一格下だらう、小男番附の横綱格だ、私は君の大連支店長時代に初めてあつたのだが、フロックを着てシルクハットを頂いてゐるとハットの方が長いやうにさへ見へた

▲此夏、東京で久しぶりに訪ねると、左眼にホウタイし、右眼を細くしばたき乍ら上目づかいに『ヤアしばらく』と云ふて置いて『毎日々々頭を絞る難問難問出さとう／＼のばせて眼にきやがつた眼だけなら好いが、横部君は身軀があぶない、副總裁の病因は隙な日銀から劇務の鮮銀に來任したためである、鮮銀整理の犠牲だね』とキビ／＼した調子で話してゐた

その横部君も間もなく死んだ。

▲『正副總裁の何れかを京城に置けなんて君、今日の鮮銀にどうして出来る、ただの一日も幹部は問題に苦悶せぬ日はないのさ、東京詰め重役が出て歩けるやうになるとシメたもの、それもいつの事やら……』なんがともいふてゐた然しその後老總裁は一月ばかり來鮮歴巡し、又橋本君が満洲から朝鮮に廻つて來た、して見ると橋本理事のいはゆるシメたものの時期が案外早く來たのかと思へる。

▲九月中旬に鮮銀は實行金利を二厘半引下げ、又今月になつて二厘平均の低下を斷行した、最近鮮銀のヤリ口は預金利下勸奨と云ひ割引日歩低下と云ひキビ／＼して來た、井内理事の如き平素の濃厚に似ず、市中銀行家や一般の間に色々當行の態度を論ずるものもあるが、吾々は俗論に關せず、ビシ／＼所信を斷行して行くつもりだといふてゐる。

▲がそのビシ／＼所信を斷行して行けるやうになつたのは、鮮銀内部の改革一進とも目し得るであらう、そこにビシ／＼すぎ／＼凡帳面な純銀行家の橋本君の來鮮は一層キビ／＼を助長するであらう。

▲キビ／＼は好いが、鮮銀本店の人材缺乏は何としても寂しい、東京中心主義は更に濃度を加へて行くやうにある、支店課次席古田君の豪腹ぶりも見られなくなり、氣の利いた頭の鋭い庶務課長の池川君もお去らばをきめ共に東京に移つて終つた。

▲從來京城の鮮銀支店課長は女房天下の所だつた、支店課長所管の行務を井内理事が何か訊ねたり相談したりする時、必らず淺見課長と古田次席をよんでゐた、幹部會にも二人が出てゐた、又支店課の仕事は課長より次席が決裁權をもち、外部に對しても亭主の存在より山の神のしたたかさが鮮やかに見とめられてゐた、新聞記者が行くと課長沈黙手持ち無沙汰、次席は廻轉椅子をまわしつつ獨り口を動かして氣煽をあげた。

▲古田君は家附の娘、淺見君はおとなしい養子のやうだつた、此の女房天下の支店課の實狀に對し淺見君も流石に不平だつたらしいと云つて山の神は亭主を尻に敷いて動かさぬ、亭主は動かうとするその不統一を一新さしたのが井内理事の喧嘩兩成敗のやうだ、淺見君は庶務課長に、古田君は東京へ而してあとには全然今日まで朝鮮に縁のなかつた山下秀雄君が課長となつて初めて支店課をおさめてゐる。

▲山下君も淺見君のやうに人物は濃厚で好銀行家のやうだ、正金から紐育の鮮銀出張所に入り、東京の検査役をしたといふのがその略歴である、支店課長といふ重要な仕事をいかに切り廻して行くかは今後の見物だが、支店側では古田君の如き口喧ましいシタタカ者の去り、篤實そのものゝ如き山下君の來任を歓迎せるは事實らしい

▲理事を除き、鮮銀の一枚看板は何と云つても武安營業部支配人だ、彼は數年前の經理部長時代より余程社交や應對に氣をつけ碎けんとしてゐるらしい、がヤハリ地金は、チョイ／＼見ゆる。夫れにしても巨漢で豪傑型に出來て居り押し出しは立派、其所説は先づ以て人を屈せしむる者有矣、而して信念強く、近ごろ相當ハラ藝もやる。

▲這回の京城組合銀行預金利下の如き内地追隨でなく朝鮮獨行である、殊に穀物資金の繁忙、年末を目先に控へた今日、相當議論は湧くべき理由と事情があつた、それを案外樂に手もなくまとめたのは君の手腕と準備の周到にありし事は多言を要しない。

▲君は井内理事と全別の大學生その今日は稍不遇、然し晩成の人かも知れない、今日行内理事候補として一二を爭ふ地位にある、武安理事といふやうな時代が何れ來るのだらう。

理事のいはゆるシメたものの時期が案外早く来たのかとも思へる。

浅見君も流石に不平だつたらしいと云つて山の神は亭主を尻に敷い

安理事といふやうな時代が何れ来るのだから。

東京雑筆

悪戯者

堀一知郎

學生が五六人、笑ひさうめいて高話をして居る、上野の喫茶店の午後の事である。私は一服やりながら帝展見物の淡い疲れを快く慰し乍ら、聞き耳を立てた

「電車なら、僕は乗券一枚で曲乗りをやるよ、例へばだねえ、日比谷から學校（一高）に行く時赤坂に用事があるとすれば、青山行に乗つて切符を出し、本郷を切らすのだが、手品の種は車の後に乗つて居たとすれば前部の車掌、前に居たとすれば後部車掌の處に出掛けて行き切らす事、及び中間下車場近くでやるにあるんだ」と一人が得意然と囁くのだった。

「何だ、そんな事が自慢になるかい、僕なんか、そんな場合には乗り損つたから乗換券を呉れろと正々堂々と頼んで、用を辯するよ」

と別の一人が口を挿む。と異議が八方から出て車掌が承知すまいと難ぜられると。

「大丈夫さ、東京には新しいから方角を誤つた」と低頭すれば、困りますねえ位で切つて呉れるよに一同腹を抱へて笑ふ。

「僕は大概只乗りをやるよ」と別の一人が満座の注意を集めながら云ひ放つ「揉まれながら下車する時、後方を指し通れの者が切符を持つて居る旨を暗示し、平氣で下りるんだ、ご方便な事には、二

人連れや三人連れの者が、よくあるから何時も成功するよ」に一同其大膽に嘆息を洩らすと、更に別なのが、

「僕は堂々と無銭乗りをやるよつまり目的の下車場となつた時、殊更に遠方の乗替券を請求しながら十圓札を出し、九圓九十三銭の釣銭を求めろんだ。すると大概の車掌は怒つて『駄目です、下りて下さい』と来るんだ。そこで素直に『はい』と答へて首尾よく目的の處へ下車するなんかは什ふだ』是には一座唸りを發したが、中に一人が頓狂聲を上げて『駄目だ、其鑒當を演るには、十圓札が要るぢやないか、お互は十圓札なんか持つて居る事は、何日だつて有りやしないぢやないか』に一同ワツはつは。

學生連の高話はまだ續く――

「僕は此間銀座で、臺口に十銭賭つて居る事を思ひ出して、コーヒを飲みに入つたものだ。處が飲んでる中に、壁を見るとピラに『コーヒ―十五銭』と書いて有るぢやないか。是を見ると飲んでる液體が喉に引掛るやうに感じたが併し時既に遅く、如何ともする事が出来ない。そこで女給の隙を見て銀貨一個を卓上に置くが早いお店を出で、後は一目散さ」

「僕はコーヒ―に金を付けて貰つた事がある。夫れは本郷のカッフェ―だつたが、勘定を済ましてストウブの側迄出掛けて行き、好い氣持で居ると『どうも有難ふ』と云ひながらウエートレスが金を呉れるぢやないか、つまり釣銭の客を間違へたのだ。そこで僕は遠慮なく貰つて來たが、四十銭きや無かつたよ」

に學生連は他愛もなく、翺々大きな口を開けて笑ひ合ふのだった。

◆基席異聞録

吉田 莊一

さき頃、有賀殖銀頭取の東上中東都の二三實業家が、基席を設けて歡待しやうといふので、築地の某亭へよばれた。

行つた見ると、同好の實業家七八名、それに青年基客で何とかいふ五段が一名、つまりまじやかに控へてゐる。

頭取は當夜の主賓といふので、第一ばんにその青年基客にぶつつかる。三目を置いて、例の調子で忽ち白兵戰と出かける。ところがこれは幸ひに、頭取の勝利となる併し第二戰以下は、何んとしても齒が立たない。

それから列席の天狗連入れ代り立ち代りぶつつかるが『今度は俺の方が好い』『ウム、とう／＼仕止めたやうだ』などと、意氣揚々石を並べて見ると、誰れがやつても、結局一目づゝの負け。まるで判で押したやうだ『君も一目か、僕も残念乍ら一目！』……残念でも何んでもない、この一目には、凡そ百目位の實力の差がある。但し一同が夢中になつてゐるから、這裏の機微は、少しも氣づかない依然として『ヨ―シ今度は俺だ』

○

當日頭取と一所によばれた森理事、つく／＼これを眺めて『イヤ今日は思ひもうけぬ良い學問をしました！』

山 ところく

下出 繁雄

北 漢 山

京城からみた北漢山群は氷河に
削られたアルペンの嶺の様、晩秋
の澄み切った大空に猛り立つてゐ
る。實に登高を魅惑する強い力が
迸り、スウイスの恐レ山に吹き寄
せる様な雲が蟠る。蒼黒い影が落
ちて夜陰に數知れぬ星がその深い
闇の谷底に飛ぶ。誰れも之を知ら
ない。朝晴れの日の光がバラ色に
山頂を染めると一切の岩塊はザワ
めきたす。憂鬱より快闊に、快闊
より再び憂鬱に——山は強い生き
ものである。

岩鷗の様に高山の絶頂を愛する
眞晝の強い光がものうい。眼量ひ
がする程の岩壁を匍ふ冒險的な虫
はどんな夢をみるであらうか——
文殊庵から太古寺を経て萬景臺の
懸場をからむ、北漢山群の最高峰
と云ふ白雲臺のキャップの上に立
つてねそべる連中なんかは一種の
生命しらずの岩鷗かもしれぬ。あ
の滑かな足場、危険な山肌を匍つ
て上下するには余程の度胸がいる
白雲臺のお隣りの鐘を伏せた様な
仁壽峰にいたつては一種の自然の
惡戯と思はれぬ。飛弾山脈中
の小槍の比ではない。俺が最初の
拾綱をブラ下げてみせるよ。と云
ふが山靴の釘がガチ／＼震えてゐ
る。あゝした處はカーターの自慢
の靴もツエルマツト製の毛唐足袋
も結構ではない、素足がいい。し
かもロープ使ひが巧でなければな

らぬ。氣の弱い者には危険である
『岩礫りのゲレンデとしての北漢
山群』こんな題目がつけられるな
らば面白い山岳記事が書かれるか
もしれぬ。北門を下つて洗劍亭及
平倉里から大成門に出る順路を外
れてすぐ尻根にとつて。そこから
文殊庵迄がロープを一日中伴侶
として遊ぶことが出来る岩の海だ
京城から猛り立つて見える山頂は
そこにある。壯大な自然の城、固
い花崗岩の世界、唯岩、岩、岩石
の哲學の小さな紫色の花がそこに
咲いてゐる。

又洗劍亭から龜谷を経て僧伽寺
に出て碑峰に重なりニクサツク
を背負つてゆくのも思ひつきや好
奇心だけでは行かれまい。僧伽寺
から文殊庵に出るのもよい。併し
もうこれからは日も短し冷い雨
でも降り出すと青年團制服の様な
青雲才にタオル一本の輕装では決
して飛出されぬ、風邪を引いたり
ひどい目に遭ふ憂いがあるから。
山は單なる旅行の心や、ランニ
ングのグランドと心得難い力強い
意志が潜んでゐる、往々にして悲
劇をも超越して哄笑する。

道 峰 山

狼の牙の様に朝モヤの彼方に亂
れてその尖峰を現してゐる。清涼
里或ひは往十里から北漢山群の高
峰白雲臺、仁壽峰と列んで道峰山
群の一團か屯してゐる。何んとな
く妙義山を偲ばしめ、小規模の感
を抱かしめる。

十二月の初め山中の望月寺に遊
んだ。紅葉もすっかり落ちて溪流
の水亦涸れ、裸石露は、靜寂な趣
が漂つてゐた。隣政府から一里虎
院里の豚小屋から曲つて一時間で
望月寺の麓をみる。山深く入るに
つれその鋭さを失つてゆくが、一

(110)

連峰の山頂に立つて所謂道峰山最
高點を深い谷から仰ぐならば晩秋
の逆光に三尊の菩薩の様に登えて
ゐる。こゝも亦捨て難い岩礫りの
場所である。

望月寺から入つては平凡な墨書
的風景を賞めてくる位のもので心
臟を踊らせる底の歡喜はない。寧
ろ蒼洞から天竺寺に入り、險峻な
スラブを匍ふ方が愉快が深い。東
面すると水無山が眞白く山嶺をさ
らして大空の眞下に息をついてゐ
る。全山の岩容を示して涸渴を感
ぜしめるところ名の通りであるが
さして登攀の誘惑を感じない。

遠望して鋭い峰々も谷の浅い爲
め遂に北漢山の大に及ぶべくもな
いが唯寺院の庭に太古の様な靜か
な甘い午睡をむさぼるにふさはし
い。清水あり藥水と云ひ、功徳水
甘露水と云ふ有難い名前に免じて
一杯はのまねばならぬ。

晩秋の山は落葉して灰色の山肌
が露出してゐる。そこに潜み盡き
ない味ひは岩壁の美である。大山
つみの神の巨斧の跡に鋭い莊重な
山靈の交響樂をきく。下界に於て
到底見られぬ超越——意力の表情
永く閉ざれてゐる。岩礫りも將に
この自然の殿堂の神秘驚異に參す
る手段技巧であらねばならぬ。こ
の崇高な敢て高山にあらずともか
くの如く形容せらるる山岳の至上美
を憐れても、苦汗の行なくして、
練磨された技巧なくしては到底
その眞隨を嚙む事が出来ぬわけだ
筆者はこの近郊の連山の山貌を
限りなく愛する。その堅固な岩相
を鋭いネエールブーツで踏み渡る
のは快い。もつと慾を云ふならば
そこに蒼白な氷河地帯があつて呉
れるならば——と怪奇の岩壁に凭
れて幾度が希つたことであつた。

八年振りの

京城

旭 さ ゆ り

方台榮様

朝鮮に於て私は八年前と今日の比較を靜かに考へて見ました。無論私の印象は京城に於てのみ、殘こされて居るので私の記述は凡て京城を中心としての御話で御座います。

私の八年前に來た時は眞夏の八月で浦尾旅館と云ふ純日本式の旅館でして恰度半月餘り居りました。今度も矢張り十幾日を此朝鮮ホテルに過して居ります。四階八十號のルームで南窓を開くと、昔と少しも變らない南山の姿が秋の爽やかな空に青々と聳えて居ります。

そのあたりは八年前に想像もつかなくつた朝鮮神宮が崇高に鎮座しました。何とも云へぬ敬虔な感じに自然頭が下がりそれが恰度併合後の朝鮮に魂を入れた様な嚴肅な氣持を起させます。内地の名匠で昔左甚五郎と云ふ大彫刻家がありました。凡ての彫刻に最後になつて眼を入れた時初めて全體の形が完成したと云ふ事ですが朝鮮神宮は朝鮮に眼を入れた様なもので第一お社が遙かに北の方滿洲の大原を睥睨して居る様に感じられるではありませんか。だから私は新日本の眼だと云ふ意にも思はれるのです。

方台榮様

總督府、京城府廳、京城大學と其當時想像にもない大きな建物がぞくぞく出来、從て其内容の充實

さにはこれ又一驚を吃さずには居られません。明るい感じの京城も其一つに加へ度いと思ひます、それから南大門通りのメインストリートが完成して私を迎へて呉れましたことなど全く大都市としての京城を直感致させます。殊に私の滞在中に山林大會や水道大會、それに水産大會と全國的の會合が三つも開催されました。とりわけ瑞典の皇太子殿下が御來朝になられ全市民こぞつて其歡迎に熱中され又北歐の樂聖ボリスラス兄弟の演奏會、これも同じホテルで直ぐ隣望、私とすつかりお友誼になつて了ひました。何しろ東京に居りましたのと少しも變らない程社會的交渉が深いことを更らに感服致しました。要するに私は從來の東京京都と申すことを改めて東京、京城と申しても餘り遜色はないと思ひます。

方台榮様

私は齋藤總督御夫妻をあの清々しい倭城台の官邸に御訪ね致しました。奥様の昔に變らない溫情の細やかさ總督のあのお優しいなつかしみの溢るゝご客姿に接してどんなに感激に満ちたこととせう。常に凡ての人々に平等親切で日本人間にも稀れに見るの御人格者、此御夫妻をいたゞいた朝鮮は幸福此上も無い喜びだと只管痛感申し上げます。同時に齋藤子爵閣下の御健康を心から祈り上げて止みません。

方台榮様

今度私は貴方の御紹介が重で朝鮮の青年や淑女方に度々御目にかかる機會がありまして大變嬉しう御座いました。皆様御若いのに何れも智識慾に燃えて居て淺薄な私の驕な者に迄も接觸され、近代文

化のほんの匂ひだけでもかがれ様と力められたことに多大の敬意を拂ひました。

何卒朝鮮の青年方の益々健やかな發達せられんことを渡歐の途次衷心から希望致します。

うわさ雜記

山口のぼる

◎法學專門學校教授の鷹松さんは、中學時代井上聖二(技藝學校)先生から英語をおそはつたものである。だから今でも師恩を重としその時々音問を缺がさぬやうにしてゐる。

◎一日鷹松さん喟然として歎じて曰く『どうも先生といふものはエライものだ、この年になつてもやつぱり井上先生に會ふと自然と襟を正すことになる。この分で行くと、一生頭はあがらないな』

◎何んでも井上先生は、その昔やかましい先生で、生徒一同ビクビクしてゐたものさうだ。尤も英語と來ると、井上さんは、實際天才的にうまいんだ。

◎鑛業會の德野さん、隱山和尚の達磨を秘藏し、日々これを掲げて樂しむ。一日大村商議書記長訪問してこれを見『ウム、我輩の趣味とピッタリ合つてゐる、當分借用に及ぶ』と、さつさと取り外づして持ち去る。その後數月德野氏大村氏に『アレはあれ切りですか』と訊くと『なに、そんなことはない大々的代價物を持ち込むよ』と、待つこと一ヶ月、齋とこの代價物を見ると秋學とかいふ阿呆繪師の、煙のやうな惡畫。德野氏啞然として『ハハ、これが大々的ですか、なるほど、ハハ』

死 生 (下)

井 上 要 二

手術後手術の結果は良好なるが如きも、心臓大に弱はり痲痺でも來ると大變なりと醫師の憂慮する所なりしが如し。嘔吐頻に來り、何物をも攝取せず、藥を飲み牛乳を飲み重湯を飲む、悉く嘔吐の苦痛を感じるのみ。この儘にて進行せんか、衰弱甚だしき身體は益々衰弱するならんと憂慮するも如何ともする能はず。偶々枕邊に在る病床日誌とでもいふ可きものか、熱度、脈搏度數、呼吸度數、便通回數等を『グラフ』其の他の方法にて記載せる一片の紙あるを見て竊かに之を取り上げ見たるに其の『グラフ』の表示せるもの病症の重態を示し、且つ屢々『カムフオ

ル』注射などせる事を記載せるを見て如斯病症にては生命の持續も覺束なかるべし、何等かの方法によりて飲食物を攝取せざれば命數終る可しと自覺し、驚きて飲食物攝取に心を用ゆることとし、冷却せる重湯を一滴二滴と舌にあて舌をして吸取せしむる事に努めたりしが、幸に舌は一滴二滴の冷却せる重湯を吸取し、漸次藥湯其の他の飲食物を攝取する分量増加することとなり。看護婦は病床日誌が患者の目に觸れて病人の神經を過敏ならしむる虞ありとて之れを取り去れり、然るに余にとりては見れば害となるべき病床日誌を見て自己の生命の危篤を感じ、自ら飲食物攝取に努めたる結果が病氣を治癒するに大効果ありたることを信じ、眞に不可思議なる出來事と考慮するの外なし。是れ余の大患に於ける一體験として、忘るゝ能はざるものなり。

是等二大體験を得て、余は生命

(三十一)

に對する感念は前述の數例にも勝れる生命の岐路の機微なることを思ひ、生命の問題には超越して立つべきものなりとの考慮を強からしむるに到れり。以上論じ來りたるものは病氣に對する死生觀なるが、其他の場合に於ても死生の問題は同様に實に機微なる點に動く如き感を年を逐ふて強からしむ。

◆和泉町夜話

石 川 利 夫

末森富良さんは、和泉町の大御所である。町内の事といへば、何によらず同氏に持ち込むのである。すると氏は『ようがす』と、可なり難件でも快く引き上げる。隠然として『守り神様』といったやうなことになる。

○
その末森さんは、モウ十五年和泉町に住んでゐる。名實共に草分けの隨一。それに次ぐのが岩間元次郎氏、これが十年近く住んでゐる。初めて家をつくつた時は、それこそまッ書間でも、狸が腹鼓を打ちさうな、荒涼たる原ッばであつたさうな。

○
末森さんの今の邸宅は、堂々たる一城廓、儼然として城西一帯を睥睨してゐるが、その昔は城壁外の、異臭粉々たるゴミ捨場。誰れ一人顧みるものもなかつた。何んでも競賣か何んかに附せられた時通りすがりの同氏が、冗談半分に坪六圓かに入札したところ『あなたに落札したから引取つてくれ』に末森さん『ハハーン』と眼を白黒したさうな。どうして／＼今は十倍以上の値打になつてゐやう。

南滿雜詠

笠原ふみを

ひたすらに

あながれし日はむびなれど
こゝ滿洲の人となるはや

はしり行く

汽車の窓邊にいやしげき
虫の音聞きぬ秋の夜の原

をりたちし

これらの驛にも痛鋒の

馬車は客まつめづしと思ひぬ

（ホロをかけるとカマボコに似たるより斯く呼ぶとむむ）

たけ長き鞭ふる

音の秋空に

こゝだ響きて馬車ははせ行く

旅ゆえか

あふ唐乙女道すがら
いぶかしげに吾もをかへり見る

あなとほと

こゝの小さき唐町に
日の童子が笑みて遊ぶも

吾が行ける高梁畑

群すゝめ

うんかと散りぬ夕陽空に

これの驛にも蒲餘の
馬車は客まつめづしと思ひぬ

群すどめ
うんかと散りぬ夕陽空に

黒したさうな。どうして／＼今は
十倍以上の値打になつてゐるやう。

二十五週年紀念

特價販賣

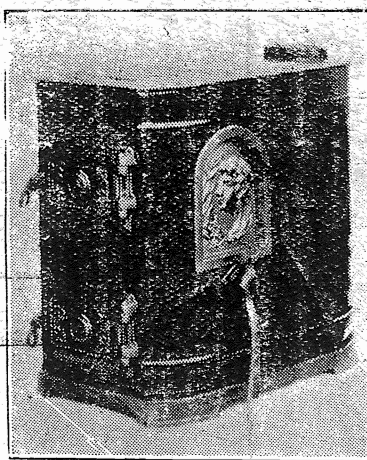
創業以來貳拾五週年の經驗
を有し最も信用あるペーチ
カとして鮮滿第一と定評ある

宮崎式ペーチカは

今回商工省發明獎勵費交附規則ニ基ク發
明表彰規定ニ依リ審査ノ結果優良ナル
發明ト認メラレ有功賞牌及賞狀ヲ賜フ

特色と効果
一、放熱強大
一、完全燃焼
一、保健全燃
一、燃料半減

本年度新發賣三號型



御申越次第カクタロ送呈

京府城山龍驛前 電話龍山長八二番

宮崎組本店

京府城本町三丁目 電話本局二八八番

同京城販賣部

在來品に改良を加へまし
た陳列所も落成致しまし
た實物御覽下さい

士居八段主幹

月刊將棋新誌

(二冊定價金三十七錢)

東京市橋區西紺屋町五

發行所 將棋新誌社

市内永樂町二丁目

木戸齒科醫院

院長 木戸 虎藏

西洋料理
支那料理

東京へお出での節はどうぞお立寄りください

東京芝區新櫻田町一七

泰明軒

市内明治町二丁目

內科小兒科 中島病院

院長 中島 貞信

市内明治町二ノ七五

利根川齒料醫院

院長 利根川清治郎

市内旭丁二丁目

外科
皮膚科
瀬戸病院

院長 瀬戸 潔

市内鐘路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

人生の幸福は健康より

健康それは參精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて
(定價内用二十瓦入壹圓五十錢)

京城本町二丁目

總督府參
精發賣元

貴生堂藥品店

電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京 漆

(新柄見本到着)

京城本町三丁目

あらぎ屋

電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目

内兒科
木村醫院

電話本局七二五

富永式特許暖爐

歐米風の

生活様式から

我等の文化生活に

ピッタリ適合して

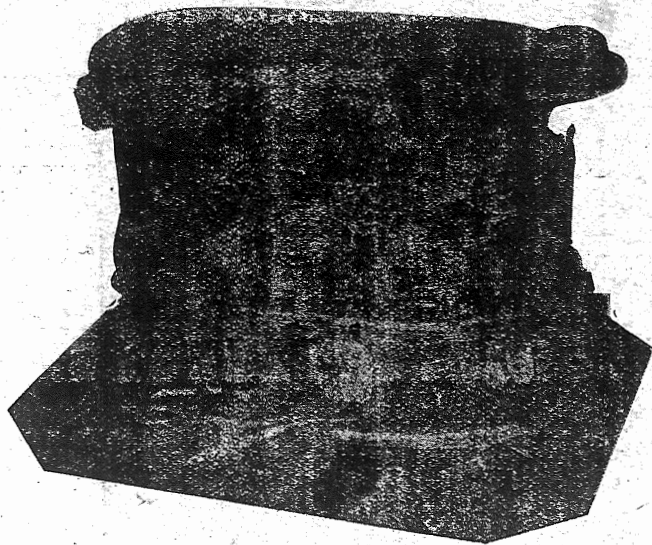
遺憾なき迄

改造された

眞に

革命的暖房具

富永式暖爐



五大特長

其一 燃料の一大節約

一冬期中煉炭一噸乃至一噸半

其二 絶へて灰塵飛散

の患なし

其三 一般炊事に利用

して尤も輕便なり

暖炊きでも焼肴でも

其四 毫も火災を起す

の虞なし

イクラ焚いても煙燻灼熱せず

其五 煙突掃除を繰返

すの要渺なし

組合事務所

京城長谷川町

朝鮮商工
株式會社

京城出張所

電話本二三一 同一六九

京城本町二丁目

發賣所

青々園茶舗

電話本千百十一番

有効である。

近來は外國語の使用が著しく増

りである。折角の名文章もこの入
らざる餘計な片假名挿入によつて

片假名

片岡喜三郎

子供の時から片假名といふものを好かなかつた。今日でも洋食と同程度に嫌なもの一つである。何々ホテルに於てなどいふ宴會に出るべく餘儀なくされることが苦勞千萬であるやうに、片假名交り文を読ませられることはまことに頭痛の種である。いま／＼しいことには洋食がますます／＼繁昌してやれ披露會だ、それ差別會だと云つては形式一片の洋食で事をすますことが大流行である。片假名の方はいゝ塩梅にだん／＼衰微して今では有れどもなきが如き有様になつたことは勿怪の幸である。今日の新聞や雑誌、單行本の類でも片假名交りを採用してゐるものは殆んどあるまい、若しあるとすればそれは金葉ほどの固苦しいものか、官報か告示文位のものであらう。

けに平假名は優美で趣があつて感じの軟かいものであるのに片假名は無風流で殺風景で鋸屑を噛むほどの味もない代物である。然らば片假名は世の中で全く無用の長物かといふとそうでもない。普通の平假名交り文でもこの片假名で挿入しないと折合はない言葉がある。之が片假名のたつた一つの生命である。『ツルリと売けた頭がテカ／＼ひかつてゐる』などのツルリやテカ／＼はどうしても片假名でなくては治まらない。その他ニッコリ笑つたのアット魂消たり凡て感情發露を表すには片假名が

有効である。

近來は外國語の使用が著しく増加して二言目には毛唐臭い言葉を申さねば新人でないと心得てるものが多いやうである。この外國語體への言葉を挿入する場合もこの片假名と決つてゐる。燐寸、麥酒、洋燈、總髮を、まつち、びーる、らんぷ、おーるばつくと讀ませることも無理であるし、また平假名ではうづりが悪い。マツチ、ビール、ランプ、オールバックと片假名を借用する外はない。殊に外國の人名地名や、翻譯の出來兼ねる熟語等は片假名の厄介になつて曲りなりにも音を辿らねばならぬ。こゝへらが片假名の價值であつていや／＼ながら之を使用するのは、空腹をふたげるだけなら洋食に限るのと同程度である。

まかごろは洋行といふことがこよなきものとされてゐる。何某が洋行した、一年あまり歐山米水を見て歸つて來た。それとばかりにそつちからもこつちからも講演の依頼で門前市をなす。そこで何某は見たこと聞いたことに三分乃至七分の出題目を加味して聴衆を煙に巻く。この際聴衆にわかりそうもない外國語が頻出するのはいふまでもない。わからぬながらも外國の總てが優秀で自國の凡てが劣等であるやうに聞きとれる場合も少なくない。

かうしたことから一文章を綴るにも十や二十の外國語を片假名で挿入せねば氣がすまぬ連中がいくらかある、それも日本語にひき直すことが困難な言葉ならともかく自國の言葉で立派に意味の通るものをわざ／＼片假名の厄介になつて得意になつてゐるのは笑止の至

りである。折角の名文章もこの入らざる餘計な片假名挿入によつてメチャ／＼になつてしまふ。なか／＼い文章だなと思つて氣持よく讀んで行くとこの片假名に突きあたる。丁度具合よく炊けたご飯の中に石ころが交つてゐて齒にガシリと來たやうなものである。その上何だかおれはドイツ語を知つてゐるぞ、おれはフランス語がわかるぞといふたやうな臭氣が漂ふてゐてさもし氣がする。

要するに片假名は生れつき人にすかれぬ性に出來てゐるが今日の場合はことに役廻りがよくない。人の名前を書き並べる場合でもいろは順になつてゐるのは其一團がゆかしいものゝ集合でありアイウエオ順にやつてゐるのはいかどはしい様な氣がするのはひが目か。

老童野球團

平田 久雄

遞信局でも、四十以上の老童野球團が出來、白髪を染めて、ふん戦力闘してゐるが、それに對して京城郵便局でも、ナニ一步も譲るもんかいと、昔とつた杵柄連、新にアイロンを織にかけ、大に若返つて、對抗接戦してゐるのは、目醒ましかりける次第なんぬり。

○
先づ遞信軍の陣容を見ると、小原、笹澤、宮原、飯倉、大塚、岡島、高谷の諸氏。次ぎに京郵軍を見ると、永井、眞崎、森田、有本、林、言田、田村、乾諸氏。さて兩軍の後見役はと見ると、樺川、保阪、松島、足立、島林の御歴々。若し戦闘員に缺休でも出來ると、
【ヨシ僕が出る】

恭爲の話

鉅鹿曉太郎

二十年の昔僕が棒編の給に小倉の袴、白い鼻緒の朴の下駄を穿いて都大路を闊歩と云ひたいが少しおけて歩いて居つた頃、兩國附近の寄席の廣告行燈の両面狭い處に、無理に納まらした格好は茶碗の中に蛇がドグロを巻いた様な文字で書かれた浪花節の所謂眞打ち「京山恭爲」であつた。

當時は姉川中納言だの中山左近將監だのと突拍子もない變な名を付けた大阪上りの浪花節が緋の衣を着たり、冠を頂いたりしてあらはれた浪花節全盛期であつた。

恭爲も亦此の一人であつた。

僕是不幸にして彼れを聞く機會を持たなかつた。

夫れが最近此京城を訪ねたのである。上手か下手かと聞かれる度に僕の答は「何しろ二十年前の大眞打ちだから上手だろうと思ふ」と云ふのであつた。

處がドウした風の吹き廻はしか此の老大家を聞いたのである。

『モタレ』が新物讀みであつた爲め、座長と新物の並ぶのを避けて其前席と入れ替つた。

浪花節を聞く毎に思ふことだが其の所謂節は大體に區分は出來ても型がないことである、十人十色で自我的節廻しをやる處が面白い個性を隠し否な殺すことを兎角必要としたがる今日此頃、低級と云はれ卑俗と斥けらるゝ此浪花節の節廻しに個性を澤山に出す處が

痛快ぢやないか。

金屏風の後ろで彈く三味線も要領よく此變つた節にあはせて居る但し引きりなしにやる懸け聲は悲鳴の様に聞えて耳觸りのことは今も昔も變らない。眞に「なくもがな」である。

斯くして現はれ出でたる老大家恭爲、座長の風采態度、服裝共に立優つて立派である。而も卓子掛けの數多く奇麗なこと眼も覺むる許りである。

一聲高く張り上げた第一音聲は、聲量の豊富を思はせて満場静まり返つたのである。

續いて第二聲、三聲。最初とチツとも變らない節の文句は、俗言雅言の混合で而も其雅言が大方時代離れがして居る。先づ題材の古るさに一驚を喫せられる。對話は最も得意とする處と見えて、場面の進展は全部對話で持切るのが概がある。此點は講談と選ばない。而して其の人物の描寫が前後撞着、木に竹を繼いだ様な無理を平氣でやる。同じ文句を二度も三度も繰返へしてシヤア／＼して居る。氣が付かんのかも知れん。

期待が大きかつた丈けに失望が大きい。第一に考へ浮んだことは偽物でないかと云ふ點である。併し之れは跡で矢張り本物であることを確かめた。聴衆の中には態と大欠伸をする者があり「長々とやつて呉れい」とヤジる手合も出て白らけ渡つた位に實際聴かれなかつたのである。

是れが二十年前の大看板である盲千人眼明き千人位で説明が盡されぬ。

要するに彼れは二十年前其の儘であるし大衆は進んだのである。

【三八】

僕の觀る處では一行中二名は遙かに彼れを凌駕して居る。而も此の大看板の下に雌伏せねばならぬことは齒がゆい事であらう。

藝の程度は比較的判り易いにも拘はらず此實狀を見ることは一般に看板に對する盲信と周圍の意氣地なさを語るものである。

浪花節ばかりぢやない。社會の各方面に案外多くの「恭爲」が居ることに氣付かねばならぬ。

此の「恭爲者流」の中には境遇の産物がある。此の手合は浪花節が拂つた丈の苦心も研究もなく塵溜めに「ウド」が伸びた様にニョキ／＼と太つたのである。

此の恭爲は高座の上で「カン／＼」にかける様に切實にその眞價を暴露しない處に存在の餘地がある。

大衆が此れを其の儘受取るのは勿論周圍も亦此看板の蔭にかくれ、此の眞打ちの力に倚つて小さな自己を生かさんと心懸けること正に浪花節以上である。

茲に滑稽があり悲哀があり停頓がある。

法專の騒動

山口のぼる

◎法學専門學校の騒動も、一時はどうなることかと思はれた。

◎生徒の自重で、平調に復したのは、結構である。

◎さすがは、法學をやる連中と慎重振りに感心した。

◎一つは、佐藤校長の腐心にも敬服する。中に立つて、實によく善處したものである。

◎就任の初め、いろ／＼の評をしたものもあるが、これで内外に於ける氏の信望を知ることが出來やう。試金石だつたといへる。

『僕は、パリやネアブルの博物館で、ヘルキュラニウムや、ボ

が一番精巧であり、隨て製造も盛んであつて、通信販賣で各國へ供

云はれ卑俗と斥けらるゝ此浪花節の節廻しに個性を澤山に出す處が

要するに彼れは二十年其の儘であるし大衆は進んだのである。

於ける氏の信望を知ることが出来る。試金石だつたといへる。

KUWA=NA. MEIBUTSU

ラエン、イマム

何れもが、世界を一口呑に仕たよふな顔付をして、談論風發、意氣軒昂、口角泡沫を飛ばし、今にも東洋の天地に、風雲を捲き起しそふな、事計り饒舌つて居る。

處は、松風薫る南山の麓、脂粉の香り漂ふ大樓銅翠の一ト間。

時は明治四十年の夏の夜頃。

人々は、統監府の大官、釜嶋外事総長を筆頭とし、堂元御用係、大梅書記官、等、等、外務關係の人々計り、胸襟を打披き、深酌高唱、阿嬌のとりなしに、サラリと俗腸を洗つて居る、シイーン

元來が野暮で無い人々の揃ひ、話頭は何時か人々の機微に落ちて溫柔圓轉、さながら思ひを裸にしたよふな、放談高説から、情熱の燃焼、生命の飛躍とでも云ふべき妙境に入り、更に一層科學的奥蘊と藝術味の深刻に徹していつた。が言つて居る事が、矢つ張り世界的だ。

『君、あれは何處の國にも有るよ、彼の物を、イングリツシユでは、Dildo。フレンチでは、Gode-miche。ラッセンでは、Phallus, Fascium。イタリヤンでは、Pascium。ギリキの古代では、Olishos。インヂアンでは、Apadravga.と云ひ、地球上恐らく、此の名詞を持たぬ國は先づあるまい』

『僕は、バリヤネアーブルの博物館で、ヘルキユラニアムや、ボンペイヤから、發掘された、圖書や實物を見た事がある、純金のも象牙のもあり、精巧を極めたものだ、當時あれを、薄き絹のきれに包んで、鑑賞して居た、貴婦人連の其の頭まの、藝術味の豊かなりし事には、全く感服するよ』

『僕は、ライプツヒの博物館で、英領ニゲリヤのハウザス人の使用した、と云ふ、マデイゴと云ふ、本作のものを見た事がある、南洋の土人間にも、あれの一種があると云ふ、又果物を利用すると云ふ事も、行はれて居るさうだ』

『西洋の婦人が、其の目前で、バナナを其儘皮を剥く事を、非常に嫌ふと云ふ事を、知らずにやつて失敗した日本人が澤山あるが、碧眼婦人は神経が、チト過敏すぎると思ふ』

『紀元前一世紀、印度で出来たワツチャリーナと云ふ人の書いた、迦摩須多羅と云ふ本に、あの製作使用法が出て居るが、それは男子が携帯すべき要具としてある、微底味を加ふべき中間作用の補助機關としてであるらしい』

『舊約の、モーゼのOnanが、Onanisu.の語源である事は、隠れなき事實であるが、一説には、あれはImitation. Penis.とも、Koitus. Interruptus.とも言はれて居る、結局あの物品はOnanyと起源を二にする物で、文化人の製産物では無く、人間の生の根帯に基礎を有する物らしい』

『総て世の中の事柄は、よし夫が悪にもせよ、社會に存在して居る以上は、夫が存在する丈の理由が要約付けられてあると見へる』
『流石美術國丈けに、佛蘭西の』

が一番精巧であり、隨て製造も盛んであつて、通信販賣で各國へ供給して居ると云ふ、何んでもベルヂヨンが、あれを亡國の原因の二に數へて、盛んに憤慨して、堂々と論じた事がある、全く同感だ、日本の彼の種の廣告を新聞雜誌に掲載する事は、斷然禁止とすべきものだと思ふ』

『日本の物も幕府時代のものがモールの本に一種、クラウスの本に、三種出て、寫眞版に堂々と耻をさらして居るが、あの相互式の者は、日本獨特の誇るべき(?)發明であるらしい』

『朝鮮でも、ツイ近頃まで、安國洞の雜貨店に賣つて居て、買ふ女が其店に入り、唯黙つて微笑すれば、出して呉れたと云ふ話だ』
『フレンチやイングリツシユを多量に使つてコンナ六ツカシイお話し計りをして居た。』

二

『東京へ行くが何か用は無い』
と言つたのは、例の釜嶋君、相手は仲居のお松さん、某る夜柳翠の宴會の半ばの事だ。

『お土産を買つて来て頂戴よ』
『何がほしう』
『あれを買つて来てネ』
『あれとは何んだ?』

『あれですよ……それ、此の間貴方のお話しの……ボンペイの純金製……成るべく藝術味の豊かなのをネ……東京では、兩國の向ふ河岸に賣つて居るんでしよ』
『……ウん判つた、よし買つて来てやる』

『きつとネ忘れずにネ……』
お松さんは、一時の氣まぐれのじよふだんからコンナ注文を仕て居た、釜嶋さんが東京から歸郷した

のは、夫れから一ヶ月程の後であつた。

三

仲居の役目は、中々に氣骨の折れるものである、特に今夜はお客が込んだ、鄙るものは歸し、歸らぬ者は夫々適當に始末を付けて、板場の火も落した、午前一時過ぎお松さんは仲居部屋に引取り、長煙管で一服して、ホットした。

お松さんの頭の中には、先刻からの、幾つものオブシーンがチラチラして、氣の落着かぬ晩であつた。付いて、氣の落着かぬ晩であつた。コナナ事は無い、不思議だと思ふて居つた、よくお客さんから、『しよつ中見せ付けられて計り居て、やり切れ無いだらう』なんて、言はれた時に、『慣れて居ると、何ともありませんわ』

などと答へるのが常であるが、實際は寧ろ嫌悪感を包蔵して居た、夫れは大官達の、淺猿しき人間味の發揮、自惚れとノロさの其の愚性のむき出し、地位を笠に着た權柄振、などに對する反感と冷笑、且つは、いた／＼しき犠牲の小羊に寄する、深き同情であつた、而して光景の暴露に近寄る程、其嫌悪感は一層強かつた。

先き程、あの年増藝者の梅吉が屏風をソツと片寄せて、出て來た時の有様、夫れを觀た利那にお松さんは、ハット心を喰られて、羨みの嫉妬感が燃ゆると共に、からだ中に、怪しいショックが響いて一部的神經が機敏に作用した。

根が緩んで、フラ／＼揺れて居る、投げ鳴田、幾筋かの後れ毛、だらけ切つた、長襦袢伊達巻の、シドケなき袖さま、少しく上氣して、艶を失なつた顔、充血して潤

啓上

二つの誤植について

川上喜久子

啓上

今日は『京城雜筆』を御届け下さいまして有難うございました。また私の拙い文章を御掲載下さいました事をも併せて感謝致しますところがある文章の題は『奇遇』と誤植されて居りますが、私はたしかに『奇遇』としたつもりでございました。奇遇と奇遇とは大へんちがひではございませんか。ほんとうに困つてしまひますそれから中頃の『かゝることは稀有の話ではない』私は頭が悪い上

んだ眼、白粉の斑らに剝けた口のほとり、特に彼の女が、何時もの横置屋とは似ても付かず、うぶの素人娘のよふに、人の目を恐れ憚るかの如く、妙にはにかみと満足感の微笑を含み乍ら、しなを作つて廊下の化粧室へ、尾長の金魚が泳ぐよふに、たよ／＼と去つた時の印象である、伴奏者は統監府切つて……有名な……あの入である。

夫れは、音楽の名人が奏でた、最後の高調の、余韻を想はせるものであつた。

お松さんは吐息をついて、ヤケに煙草をはたき、電燈のスイッチをひねつて、暗闇の臥床にもぐり込んだ。

四

夫れから暫くして、突然お松さんは悲鳴をあげて……悶へ苦しむ其物音に朋輩三人が、驚き駆け付け、電燈を明るくして、一體と

【四〇】

原稿の下書きが此處にありませんゆゑはつきりとはしませんが、どうもあゝは驚かなかつた様です。何でもあの所は『かゝることは永く考ふべきではない』といふやうな意味の數語であつた筈だと思ひます。それでなくては下手な文章が以上の二箇所で一層筋の通らない妙ちきりんなものになつて居ります。ことに題のちがつてゐるのは牛の首へ馬の頭をはめたやうな感と與へます。しかし誤植でなくて原稿にあつたてゐるのなら明に私の失策でどんなにもお詫を申さねばなりません。とにかく私の整はない文章と金針流の文字とがどんなに御多忙中を御惱ませしたかと考へるとまことに恐縮のいたりでございます。

ふしたと聞くと、遽かに腹がヒドク痛むと云ふ、夫れでは醫者を呼ばふと云ふのを、それには及ばんと、たつて止めて居たが、間もなく近隣の吉本醫院から、院長がやつて來た。

ドレ／＼診てやろふと、潤亮院長無理に蒲團を捲くつた時に、腹痛にはあらで、熱傷の火傷たる事を發見した……最も神經の鋭敏なるべき部分を中心として、其の周圍一圓に……而して……。

此の光景を、一瞥した院長は、何思ひけん『馬鹿野郎』と一喝すると共に、三十女の肉付よき腰部を『ピシヤツ』と一トなぐり、忽然袂を拂つて、跡をも見ずして歸つて往つた。

Comic Tragedy の幕は切つて落とされた。

枕許の火鉢には、使ひ残りの鐵瓶の湯がガラ／＼とどきつて居た

罪もなき、無抵抗の小兒を殺すは

あらうか。予は甘粕に同情するが

不可解

中 島 司

曾て憲兵大尉たりし甘粕君が千葉の刑務所から放たれて、再び娑婆へ出て来たので、天下の新聞が得たり賢しと張膽明目、とても大した勉強振りであつた。

甘粕が出た、其の行く先は満洲だ、いや東京に居る、いや箱根に行つた、嘘をつけ、東北の某温泉だ、と新聞記者達は蚤とりまなこで探し廻つた。それをまた當の本人が、自分の意思でか但しは他人の寸法でか知らないが、風の音にも枯れ尾花のそよぎにも怖ぢるかのやうに、世間を憚り名前まで隠して山の中に潛み込んで、身の周りには何々憲兵の護衛付きとは何といふ事であらうか。私にはどうも甘粕君の心事が解りかねる。同時にかうまでして大事をとる官憲(?)の方針が不可解だ。

甘粕を世に出して、放つて置いたら、甘粕の身邊が危険だとの心配は尤なことだ。甘粕によつて不法に手を下された人達のために、或る一味の人々から甘粕が、不法に復讐される危険の伏在することは決して杞憂ではあるまい。さういふことはあつてならない事だ。

併し苟くも帝國の軍人、陛下の忠良なる軍人だ、大和魂の權化たる武人だ。その軍人たり武人たる者が、たとひ一途に國家を思ふ忠心義心から過まつて國法を犯した事に恕すべき點あり同情すべき點があるにせよ、憲法治下の帝都にて三人の生命を断ち、しかも何の

罪もなき、無抵抗の小兒を殺すほどの、武士にあるまじき所業を敢てしたことは、飽くまでも人道違反だ、否な人道蹂躪である。而して武士道精神である。若し此の甘粕なる人の出獄を迎ふるに、義人志士を遇するが如くなるに於ては世道人心に影響する所、まことに憂ふべきものがあらう。

予は今更甘粕の行爲を批判して之を責めることは、彼れに對し酷であると思ふ。彼は神妙に國の刑に服した。彼はたしかに心中懊惱に堪へざる如くである。彼は本來決して悪人でない。彼は一朝有事の日には、最も勇敢なる金鵄勳章級の一人たるべき武人である。而して彼は之を憎むべきよりは之を憐れむべき人間である。彼れのために何よりの不幸は帝都の大震災そのものであつた。

但だ予輩の最も彼れのために惜む所は、彼れの出所進退だ。出獄以來の業々しい隠れ方は一體何のぞまだ。そんなに命が惜いのか、軍人としてそんなに身が可愛いのか。何故もつと公明正大に、もつと勇敢に、而して神妙にあり得ないであらうか。俺れは國家のために忠ならんとしてついあんな事をしてしまつた。併し俺は悪かつた。如何にも手段を誤まつた。相濟まぬから甘んじて刑に服した刑餘の俺は一旦死んだも同然だ。今更命なんぞ惜しいとは思はぬ、逃げも隠れもしない。白日の下に怖るゝ所はない。大きな顔はしないが、来る人には神妙に『甘粕』として逢はう。よしや我れに害意を有する人にでも、虚心坦懷で面しやう。——と何故さうした態度が執り得られないであらうか。何故さういふ態度を執らせられぬで

あらうか。予は甘粕に同情するがために此の言をなす者である(大正十五年十一月四日品川に夜雨を聴きつゝ記す)

◆新聞界小話

吉田 莊一

◎朝新の萬籟叢中紅一點の杉浦幹子女史——紫影さんも、すつかり紙上影をひそめてしまつた。

◎どうした譯だと訊いて見るとさてく世間はうるさいもんだ。◎相手が婦人だけに、その人に就いて、書いたものに就いて、いろく彼是れいふらしい。

◎それを亦た、社中で問題にして四の五のいふものがあるので、自負心の強い肩振りさん(幹子女史)すつかり冠をまげて、その義なら私にも覺悟があると、とうとう署名しては書かぬ事になつた。◎婦人記者といふ存在も、こゝ京城では、なか／＼むつかしいものらしい。

◎朝新編輯局長の和田重義君は一風變つた存在である。新聞製作を天職とし、何の野心も、何の慾望もなく、十年一日のやうに、同社の柱石として、最至難の仕事をやつてゐる。

◎たつた一ツの道樂は、畫畫の掘り出しで、開かあると、そこらをひやかして、ぞん外良いものを發見する。朴實重厚で、めづらしい人格といへる。

◎今度京日を罷めた連中で、最も機敏なのは、田中守寛(販賣部長)君だらう。一週間と經たため中黄金町に家を相し乾物店を開く。

◎朝新政治部長の久松前平君、先月末京日にかはる。圓滿轉歸。

落馬の洗禮

川村十二郎

多年の念願が叶うて、私が乗馬を始めてから、丁度四回目の九月十八日のこと、幾分か呼吸も呑みこまれ、『馬』といふものに對する恐怖觀念も餘程薄らいで來たので、有體に白狀すると、此の日も練習を始める前に、

『こんなことで、私は、落馬もせずに、段々うまくなつて行くのだらうか知らん』

と内心聊か張合ひの無いやうな、そして生意氣千萬なことを考へたりしながら、馬背に跨がつたのであつた。

◆ 教官のXXさんは、親切に指導してくれた。前回の時から、私は反動の比較的軟らかな『仙美』に乗せて貰ふことになつてゐた。

今日は、庶務の連中の練習定日にも拘らず、外には誰もやつて來ず、馬が六頭とも皆あいて居るの
でXXさんが『もう少しおやりなさい』と云はれるのを好い氣になつて、一時間以上も乗りつゝけたので、聊か疲勞を覺えるやうになつたけれども、XXさんから『もうあなた、漢江の川つべり邊りへ出掛ても大丈夫です』と、甘いお砂糖を嘗めさせられた後に、

『ちと、駈歩をやらにや、面白くありませんねえ』
と云ひながら、私と馬首を並べて進みながら、側方から、私の馬の

尻ツベたを、ビシャーリ／＼喰らはすので、張りの強い、私の『仙美』は意氣込んで、立ち上りさうになるので、私は『こいつあ危ない』と、一生懸命鞍の前橋に御嚙みついて見たけれども、何を云うても、今日で、やつと四回目の離つ兒なのだから、尻がよく鞍上に据らず、忽ち上體の安定を失つて左側前方に、堂とばかり落ちにけりイ……。但し、落ちながらも、手綱を確かり握つて離さなかつたのは吾ながら大出来だつた。

『落ちさうになつたら、鞍よりも、馬の鬣に掴まつた方が、調子が、好いですよ』
と、XXさんは、事も無げに教へてくれた。

◆ 今度は馬を替へて見ると云ふので、XXさんの『新館』に乗替へたが、ひよいと私を乗せたまま、既の中に駈け込まうとする、私は、『やれ／＼これで休まれる』と思つて居ると、XXさんは、
『癖になるから、馬場へ曳き出して來て、もう一遍お乗りなさい』

と云ひながら、五六尺ほどの長さの針金を、私の馬の鬣に結びつけて、その端を自分で噛みながら、又もビシャーリ／＼した／＼喰らはすので、またも二度目の墜落併しこんなことで閉古垂れては男子の一分が立たぬと、勇氣を鼓して三度飛び乗つたが、實はもう好い加減身體が疲れて、兩脚で馬腹を締め付ける力が弱つて居た。到頭三回目には、兩脚を開き、尻餅を突いて、頗る見苦しいさまをしてまた落ちた。併し私は、
『乗馬は三四回も落ちて、氣絶するくらいで無くつちや本當に

巧者にはならん』

と云ふことを豫めて人に聞いて居つたので、これ式のこととは固より覺悟の前、別段卑怯な考へは毫頭無いのだけれども、何分可也疲びれたので、今日は是れで御免蒙ることにして切り上げた。後で氣がついて見ると、右腕關節の内側を大分擦り剥いてゐた。それに右膝のふくらみが馬鹿に痛い、何でも巧者に落つる様にならないと可けないのださうだ。

◆ 宿へもどつて、落馬の一條を話すと、宿の主人公は、
『さうですか、それぢやア、あなたも慥々一人前ですね』

と、冷笑かしたのか褒めたのか、が、併し、自分でも今日落馬の洗禮を受けて『これで何うやら、モノになりさうだな』と思つた。

◆ 人さま／＼

石川 利 夫

◎中島長作氏、訴訟用で平壤に行き、牡丹臺の秋色を採くる、感懷を本社に寄せて曰く

一しきり落葉の雨のはら／＼と
よぎれば高し秋のおほ空

◎本號には、珍らしく漢銀の堤事務が句を寄せられたが、元來氏は、長い間和歌をやつたもので、その師匠は、釜山税關の高柳といふ人だから『俳句の方は、まるで自信がないんですよ』

◎鈴木商店の澤村さん『僕なんかモウ、豫備役に編入してくれてもいいわ』『そんな辭令は、なか／＼出しませんよ』『すると幹部横暴だね』『イゝゝ社員怠業ですよ』澤村さん頭をかいて、『これはなか／＼キビシイなア』

酒禮讃

中島長作

俺れは眞面目なる意味に於て酒を禮讃する。然し禁酒論者は酒の個人的社會的害惡を街頭に絶叫して、飲酒亡國論を振りまわし、醫者は酒精中毒の恐るべきを教へて居るが、政治に外交に商賈に選舉に其他人事百般のこと皆此の酒の效能にて圓滿に行はれる所を見ると、滿更ら酒と謂ふものが人生に有害無益で無くて良いものとも思へる。だから俺等も毎日其恩澤に浴して居る。

西歷千九百二十二年米國の共和黨が天下を取つた時に、其大統領クリッヅ氏は戰後の國民的緊張を策する爲めにか萬難を排して全國的禁酒法を施行した。其れから二三年米國の左黨連中は此法律に隨分苦しめられた。

然し斷ち得ないものを禁ぜられて彼等は黙つて法律に盲従しては居なかつた。米人一流の反抗心から脱法方法を考案して遣る類ない衝動を醫せんとした。米國領土以外の公海上に公々然と一萬噸級の酒吞船を襲撃して法律を尻目に五色の酒に大騒ぎをしたり、酒吞みたさに國外旅行と洒落れ込んだり酒の定義を變更したりして禁酒論者を口惜しからせて酒の味と非肉の味に暫し陶醉した。然し公然と充たしたい慾望は何時か頭を擧げて來る。禁酒反對の聲は一般投票によつて各州で一勢に擧げられたそして非肉にも今度の下院の総

選舉で禁酒法を強制した共和黨は一敗地にまみれ民主黨が勝利を占めさうだ。酒吞黨は江戸の敵を長崎で討つたのだ。

春秋の筆法を以てすれば禁酒法が共和黨を破つたと謂ふ譯だ。

謹嚴其のものの様なクリッヅ大統領もさ酒の威力に驚いたらう、そして覺へず苦笑を漏したに違ひない。此れは對岸の火災だが吾々の日常生活と酒とを考へて見ると、日本人も米國人に負けず酒ずきの國民だ。生れたと謂つては酒宴を始め、死んだと謂つては酒にする。悲喜哀樂皆酒に終始する國民の元氣も大部分酒によつて保持される。大臣の政治も待合酒から生れて來る。禁酒論者の註文通りな世になると政府の歳入は恐威されて大蔵大臣が第一に困る。

其爲めでもあるまいが、年々殖へる七十萬人近くの人口のはけ口に苦み、食料問題の解決に腐心しながら日本食料の大宗である白米を毎年何千萬石かをつぶして居る勿體なさだ。

こんな事を考へると禁酒論者の説が尤もらしくも聞へるが、やはり晩になると晩酌がやりたくなる宴會に行くと無茶酒を呑みたくなる、酒を呑む事に於て吾々は米國人以上かも知れない、人口問題、食料問題解決の爲め外に良い税源でも見付かつたら日本にも禁酒法を敷いて見たら如何、禁酒論者の御機嫌斜な事は請合ひだ。宗教家や其所らの偉い人達からは讚美の辭を山程呈されやう。然し其んな政治家は米國の轍を踏んで選舉には蹴落される事請合ひだ。此多米國でも民主黨の大統領が天下を取るに禁酒法が撤廢されて反對に勸酒

法でも敷かれやう。其時こそは太平洋を相隔てゝ日米酒吞合戦でもやるが良い。

氣の少さい禁酒論者の行き場所が無くなりやう。

吾々は酒吞黨を禮讃する。

酒無くて何の己れが櫻戔の句は日本男子の國民性を表徴する様な氣がする。然し最後に斷つて置くが、俺れは決して酒屋の提燈持を頼まれた譯でない事を。

灘の生一本に舌鼓を打つ御連中如何で御座る。

◆小僧嘲弄記

吉田 莊一

◎鐵道の林原(憲貞)さんは、テニスと將棋とが、おハコである◎どつちも相當纏奥を究め、割引で見ても、立派に一人前は行ける人である。

◎所が、此處に觸に觸はることが一ツある。といふのは、局の娛樂室で、將棋をやつてると、いつでも仕出し屋(局の)の子供が『おぢさん、一ツなぶつてあげやうか』と、窓から小僧らしい面を出す『ウん、來い』といふと、のこ(這入)つて來る。

◎いつものことだが、やつて見ると、どうしても林原さん旗色が悪い。そして小僧曰く『おぢさん苦しからう、お氣の毒ぢやのう』と來る。

◎迎もいかんとあきらめて、他の人にやつて貰らうと、このおぢさんも、小僧から『おぢさん、アソビは將棋はヘタぢやのう、まるで將棋の法を知らんからのう』とやられ、堂々たる御連中『君、何とかして仇討ちをしたいのう』

讀後雜感

別府 西海

◎永樂町人の執筆が毎號三頁位欲しい、その人生觀も面白いけれど、私はその考古眼に敬服してゐる。

◎生活記錄の寄書に實に好いがある、然し手前味噌や自家廣告や、ひとりよがりの長々しいのも稀れに見る。

◎表題を小活字とし内容を多く盛るのは結構であると思ひますね十月號まではみだしが大きすぎた。

◎一流人物——朝鮮の——の寄書があれば多くあつまるのは編輯諸君の大努力の結果だらう。

◎が、一面に於て本誌が、いかに讀まれ、いかに勢力あるかを語るものと思ふ。

◆記者の手帖

吉田 莊一

◎前號平北知事谷さんから頂いた原稿、杉浦君の追憶とあるは、松浦君の誤りであつた、實に申譯ない失態だと思つてゐる、こゝに謹んで谷知事にお詫ひする。

◎前號は、失態だらけで、川上喜久子夫人からも、抗議を申込まれた。その他にもいろいろ誤植があつたらうと思ふ。爾今大に氣をつけるつもりである。

◎西崎千枝子夫人の歌の中にも一二悪い所があつた。但しこれは記者の失策でなく、取次いでくれた徳野さんの、書き寫した際の誤りで、あとで、原稿を見せると、『こいつはこつちが悪かつた』と徳野氏すっかり降参してゐた。

玩具

穂積眞六郎

よく教育雜誌を見ると二十世紀は子供の世紀だと書いてあります、兎に角婦人問題と教育問題とはこの世紀に倍々其流域を擴めて行く大きな流れの二つなのでしよう。

近頃内地に行くとき東京の新しい娘にびつくりされるさうですが、同時に一步家庭に入ると若い奥方から教育について大分やかましい論說を拜聴させられます拜聴は別に恐縮することもないのですが話が朝鮮の家庭教育のことに及び、終に朝鮮の子供はどんな玩具を持つて遊びますか、朝鮮には昔からどんな玩具がありますか、と云ふ段になると、朝鮮在住者たる責任上只拜聴だけで済まなくなるので困ります。

内地の玩具にしても『きちょう』とか『ぶりく』とかむずかしい昔からの玩具の歴史を調べた事もなく朝鮮に永年住みながら前號の『眼のない魚』も知らない程『眼のない人』である私にとつては朝鮮在來の玩具などの質問に對しては回答が不明瞭を通り越して白紙に近くならざるを得ないので、尤もこの問題になると一束の明太魚に何個の眼がないかと云ふこと迄熟知されて居る方々に伺つても餘り明瞭な智識を今迄授けて頂いたことがないので、本町の通一本歩いて四軒や五軒の玩具屋はすぐ眼に入る程玩具と仲のよい内地人としては朝鮮の子供の爲に在來の玩具の研究もし、又新しく慣習に適してしかも爲になる玩具を工夫する位のことば考えて見るべき様にも感じます。何卒玩具についてよい材料が御座りましたら御高教を皆様願ひ上げます。

海から

陸を見る

松崎嘉雄

二

人をして最も畏敬の念を起さしむるものは何であるか、僕は力であると信ずる。限りなき狂瀾怒濤に直面する時、何人か此大自然の力に畏れざるものがある!!、堂々と雲表に君臨するやうな芙蓉の峰を仰ぐ時、何人か其の崇厳美に打たれざるものがある!!、之れ即ち太古に於て天柱を碎いた火山の爆發により、無限のエネルギーを以て地軸よりほとばしり出でたる溶岩土塊の堆積から成つた所謂大火山の雄なものが即ち此の太美姿であつて、その熾動より靜のエネルギーとして千古永劫に其の力を示しておるからである。天涯より落下する『ナイヤガラ』の偉觀——

數萬噸の艦船の航走する莊觀等は孰れも之れ力の表現が吾人の腦裡を強く打つからである。關東の震災が名にし負ふ勇敢なる大和民族に、一大畏怖の念を與へたが、之れ亦た大自然の力である!!、此の力を善用すれば社會の利益を増進することも又た同時に社會を破壊することも共に測るべからざるものがある。私は茲に海上の建築に對して此の大自然力が如何に横暴を逞ふするか事實を一言しませふ。

今絶海の孤島に一大燈臺を建てやうとする。木材、煉瓦、セメント等多量の材料を大陸より運搬し

て、先づ之れを陸揚げしやふとするも、海岸は突兀たる絶壁にして元より道もなく、一朝颶風の來るあらば激浪の爲め材料の流失を免れぬから、多數人夫を脅勵して出來得る丈短日に安全地帯迄之れを陸揚げしなければならぬ。故に恰も戦場のやふな氣分で人々は晝夜の別なく汗にまみれて活動を續つけさせられる。我古老の談に依れば或年の夜半颶風襲來と共に見る／＼怒濤の爲めに海岸より數十尺の高所に揚げて置いた木材が奪はれんとし、人夫は蟻のように協力してこれを防いで働らいてゐる中に、一人夫は木材に取り付いたまゝ高浪にさらはれて浪のまに／＼救助を求むる聲も漸次かすかに沖へ／＼と流され去つたが、之れを救ふの方法もなく遂に行働不

聞くがまゝ

山口のぼる

熊本利平氏が來ると、各新聞雜誌の外交員といふのが、それこそ蟻の甘きにつく如く、一度にどつと朝鮮ホテルに押寄せる。すると熊本氏これを散々待ちあぐませた擧句、各員同時に御引見となる。

何かいはんとすれど、ハタに同業同臭あり、眼を白黒すれど、遂にいひ得ずして空しく引さがる。中には『夜中御來訪、何か緊急御要事ですか』と辛辣にやられて『ウ、ウ』三たび叩頭して、大事々々のカバンを忘れて失踪するもあり。まことに是れ天下の奇觀なりとかや。

福岡市長の時實さん、先月初め

明となつた悲慘事もあつたと云ふ嗚呼如斯きは大自然力に對する人の力が如何に無能なるかを示すと同時に絶海の孤島にも世に知られない貴い犠牲者の數あることを示すものではないか。私は大都會に於て天を摩するの大廈高樓を見るごとに、孤島に於ける燈臺の建設の困難を想ひ出すと同時に大陸に於ける建築家の幸福を想ふのである。

吾等が今日比較的平穩に航海に従事し得るは前述の如き貴き犠牲者により築き上げられたる燈臺によることが多い。即ち人力が大自然の力を征服せんとする努力は陸上よりも海上に多くして之を完全に征服又は利用せんとするは尙前途遠なるものがある。

京城にやつて來たが、例の天神轡をしごいて曰く『どうだ、若くなつたらう』見ると、一本の白毛だもなし『イヤ、これは變だぞ』といふと『内所だぞ、實は染めてるんだ』『スツバ抜きますぜ』『イヤ、それは困る、そこで先づ一杯』例に依つて圓轉たるものだ。羨む福岡の好市長を迎へたることを。

京大漢文科擔任の兒島教授は、齡既に五十餘。その東都を去つて朝鮮に赴任せんとするや、親近皆之を留む。曰く『その歳で朝鮮行でもあるまい、よししたらどうだ』教授白頭を振つて曰く『イヤ、俺は之から勉強するんだ、東京の様な騒々しい所はかなわん、留めるな』斯くて着任以來、常にぼろ／＼の古書を抱いて眠る。

少年芝居

—澤田と私—

森 次 郎

何でも尋常四年の頃だから私の十二歳の話である。近所の藝屋の子に大變笛の巧い友達があつて私達六七人の餓鬼大將組が毎日集つては、太鼓を叩き笛を吹き、素面であつて居た。縁日の晩や祭禮の時は外の子供達の様に見世物小屋も覗かず、買ひ喰ひもせず朝から晩までお神樂堂に陣を取つて熱心にお神樂を研究した。其の頃流行した素盞鳴尊の蛇退治、馬鹿退治等は始めから終ひ迄スツカリ呑み込んでしまつて、終ひには『鎌倉』とか『大トロ』等と云ふ囃子の叩き方まで會得した。そして私達の藝術が聴いて認められ、町内で二三の有志が發起で本式の少年神樂を組織して呉れた。

一二年経つと私達の此神樂は段々と芝居かぶれが見えて來た。其頃非常な勢ひで歡迎された所謂壯士芝居を私達は熱心に研究した。川上晋次郎の『大先生』、『小先生』高田實の『劍の報ひ』等は何べんも／＼見物に行つて、臺詞等はスツカリ呑み込んで居た。唯だ困つたのは女形であつた、一座の中に居た早川と云ふ金物屋の息子の姉が芝居好きで、よく入つて呉れた然し此姉さんは當時二十二三歳で私等の十二三歳の一座へ入つて唯一の女形ではあつたが、何んだかおばさんに芝居して貰つて居る様

で釣合がとれなかつた。

お神樂がいつか壯士芝居に變つて半年程経つた頃には甲州屋と云ふ旅館の主人公の肝入りで立派な引幕が出来た。何んでも『正美少年演劇團』と云ふ名が大きく幕を斜に貫いて赤と緑のダンダラ染めであつたと記憶して居る。前にお神樂の時非常に肩を入れて呉れた藝屋さんがこんどは本腰になつて藏の二階を解放して舞臺に宛てゝ呉れた。そして毎月一度宛近所の人を招いて私達の芝居を觀賞して呉れ始めた。遂々私達は本氣になつて稽古を始めた。甲州屋に長い間寄食をして居た熊見さんと云ふ人が昔田舎廻りの俳優であつた關係から、さしづめ舞臺監督兼振り付けと云つた名で稽古をして呉れた。臺本も出來て、本讀みをして正式に舞臺稽古が始まつた。

此『正美少年演劇團』はとうとう彼方此方から招かれて芝居をやりに出懸ける様になつて來た。カッラ等も一通り揃つて其頃には酒屋の娘でオユウちゃんと云ふのと會社員の娘でハツちゃんと云ふ二人の可愛い、女優さん迄出來て居た處が一座に對して一大鐵槌が其歳の二月に下つた。これは確か馬場さんと云ふ富豪の家に結婚式があつて宴會の餘興に招かれたのが導火線であつた。私達は唯今日を晴れの舞臺と喜んで勇んで、得意の『大先生小先生』四幕を川上高田實を喰ふの意氣込みで何百の來賓に觀せた積りであつたが、來賓中の學校の校長さんが、それを見て吃驚して、早速翌日其父兄を招き大目玉を頂戴した。私の母等

【四六】

は寢耳に水の話に驚いて私を前に据え『何んと云ふ、お前は馬鹿者が戦争の眞似でもして遊ぶなら子供らしいが、役者の眞似等して』と云つてボロ／＼と涙を流した。

一座は完全に粉碎されて了つて芝居のし字も口に出す事が出来なくなつて了つた。そして其歳の翌春には學校を卒えて夫々中學校に商業學校へと、思ひ／＼に散つて了つた。二枚目役で巧かつた藝屋の息子は今外務省に勤めて瑞典に行つて居る。スターであつた、酒屋のおユウちゃんも子供の四人を抱えて酒屋の女主人公になつて居る。おハツちゃんも或辯護士の妻君になつて居たが四五年前に逝つた。それでも此一座の中から名優が二名出た。澤田正二郎と市川松蔭である。それに落語界に飛込んで今は舞踊と劍舞で名を賣つて居る源一馬も『大先生小先生』の敵役として私と立テ役者であつた。

先月珍らしく大阪に三週間滞在して折柄中座に興業中の澤田と三年振で逢つた。水は濁つて居ても人の心に何んとなく享樂の跡を思ひ起さしめる様な道頓堀の船料理で麥酒の泡を吹き拂ひながら二人は思はず眼を見合して笑つた『大先生小先生』の狂言中大格闘の場で夢中になつた澤田が私をグイグイ締めた爲め私は遂に泣き出して了つて舞臺で小便を垂れ流した事がある。

『僕は君の手紙を見た日舞臺に立つと、屹度その事を思ひ出すよ』

本人の私はスツカリ忘れて居たが澤田は仲々頭のいい男だと思つた

蠟

る。其の大きなになると、一寸余のものも、珍らしくはない。産兒は胎生であつて、母胎は何時

黃州は昔時から、支那への陸上交通の途上に當る一邑であるから支那から輸入をうけたものであ

蠍

奥田直毅

京義線の本線から、兼二浦行への乗換驛、黃海道の黃州と云へば平壤驛から四ツ目、京城に近い一驛であつて、今では鎮南浦をも凌ぐ林檎の産地である。

其の林檎の名物の土地に、もふ一つ不可好の名物がある。

其れを蠍と云ふ。

蠍。日本ではこれをサソリと呼び、八重山群島、台灣等に産するも、其の他の地方には未だ生棲するを聞かず。朝鮮では、僅に唯だ此の黃州のみにありて、他に生棲する處はない。

此の蠍と云ふ毒虫は、何う云ふ虫であるかと云ふ事を、先づ概説して見ると。種類から云へば蜘蛛類に屬し、腹部は蜘蛛の如く囊状をなすと、却つて蠍蟻に似、腰部は又た蠍蟻の如からずして狭長、其の末端に到るに従ひ、女人の頭髮の如く針状をなす。全身十三の環節より成り、頭、背の七環節は扁平であるけれど、背後及尾部の六環節は麥粒状をなし、頭上には六箇乃至十二箇の單眼を有し、頭に大きな一對の觸鬚があつて、一見蟹の錯に似て居る。脚は四對あつて疾行し得べく、尾端に一箇の毒針を有して、敵に向ふ時は、尾部の後端を上曲げ、猛烈な毒汁を注射する。平生は乾燥した塵芥や、枯葉や、石の下などに棲し蜘蛛や小蟲などを食ふ。彼れが疾行する時は、必ず尾部を掲げて走

る。其の大きなになると、一寸余のものも、珍らしくはない。産兒は胎生であつて、母蠍は何時も小供を尾頭に背負ふて居る。全體の環節が、蟬の如く硬く出来て居るのみならず、尾部は鐵鞭のやうで、障子や、襖などを疾行する時などは、恰も落葉を掃くが如き音を發する。若し誤つて彼れの鐵鞭に觸るれば、其の一刻の甚しきに到つては能く人を斃すのである。

黃州は昔時から、支那への陸上交通の途上に當る一邑であるから支那から輸入せられたものである。とは何人も推察する處であるけれど、果して然らば其れは黃州計りではない筈だ。先づ黃州へ来る迄に、支那へ近い各都邑地方にも、蠍が輸入せられたに違ひない。然るに國境の義州、白馬の如き往時支那交通の要地として、往來頻繁であつた地方は勿論、平壤にも蠍は居らぬ、さらば何處から此の黃州計りに輸入せられたかと云ふ事になると、全く不明である。

元來蠍なるものが、朝鮮の何れの地にも棲せぬのに、唯だ、此の黃州ばかりに棲栖するのが、既に奇であり、珍であらねばならぬ何となれば、此の虫は蜻蛉や、蟬や、蚤や乃至魚類、鳥類の如く卵生でない、卵生ならば其の卵が、何かの機會に偶然、或は故意に此處に運ばれて、而して繁殖した事もあつたであらう、又た人間と特別に關係を有するものなれば、人間に運搬せられて、此の黃州に其の種を繁昌させたと云ふ事もあろう。が、之れは人間とは何等の關係もなく、況んや人間の蛇蝎視する、其の本尊の蠍に於てをやである。これが何うして此處に來たのかは、頗る奇つ怪と云はねばならぬ。若し黃州が蠍の棲栖地方との貿易地であり、或は相隣接した處であつて、商取引、又は旅客の往來頻繁を極めて居る土地であつたならば、其れは蠍が何等かの媒介に由つて、此處に運搬された事があつたのかも知れぬ、然るに黃州は其のやうな處でもない。

突然又は偶然に黃州に生れたと云ふ事はない筈である。茲に於て愈々奇にして、益々珍と云ふ事になるのではないか。併し、平壤其他各地方へも、支那から輸入せられたけれど、黃州以外の地方では、自滅して、今日では此の黃州にのみ殘存して居ると云はゞ、其ふ理由も皆無とは申されぬ。其れにしても、黃州のみに、今日迄蠍が割據繁殖して居ると云ふのも、亦た一奇とせざるを得ない。

私は今年初夏、公用を以つて黃州に出張した時、親しく蠍を調べて見た、其の棲栖する模様も見た而して其の鐵鞭の如き尾端の一擧に遇つた人の苦痛談も聞いた。其れに依ると、一度蠍の刺撃に逢ふや、一瞬忽ち全身麻痺し、激痛言語に絶するも、速に醫師の注射を受ければ、幸に其の危険を脱するとの事であつた。これが醫術の進歩した今日であるから、注射で其の苦痛を脱し危険より逃るゝ事が出来るけれど、昔時では爲めに斃れた者もあつたらう。現に支那などでは人を斃すと云つて居る。眞

に毒蟲類中の巨王である。

所が此の毒虫亦た、人間に藥となるから、自然の妙は頗る奇である、誠に世の中にはすたりものがない。

私が黃州に行つた時、總董が頻りに此の恐るべき毒虫を採つて居た、其の詳を聞くと、淋病藥として、一箇五錢で内地方面に賣れるとの事である。生きて人を害し、

おれも

人間だ

大浦貫道

或處に、貧乏な男が居りましたところかそこへ香具師がやつて來まして、少々窮乏な思をすれば月五十圓になる仕事があるがどうかと云ふので、貧乏な男は喜んでその香具師に使はれる事になりました。どんなことをするのかと聞くと、虎の皮剝製の中へはいつて舞臺を歩いて居ればよいと云ふのであります。そこでそんな事ならば何でもないと云つて剝の中に這入つて居りました。

すると表の方で、『サア大變々々只今から虎とライオンの取組があります』といふ掛聲が聞える、虎の皮の中の男は其聲を聞いて之は大變な事が出來たと思つて途方に暮れた、この不景氣に五十圓とは餘りにまい話だと思つた、友達甲斐もない俺とライオンと噛み合はするんだな、ひどい奴だ、情ない事になつたと思つて居る間に向ふのライオンの棚の戸が開かれ

死して人を益す、善惡相償はんとするものか、呵々。

其の後、酉陽雜俎と云ふ書籍を見て居ると斯ふ云ふ記事があつた陳州古倉有蝸、形如錢、螻人必死、江南舊無蝸、開元初、嘗有一主簿、竹筒盛過江、至今江南往々亦有、俗呼爲主簿蟲、蝸常爲蝸所食、以跡規之、蝸不復去舊說、過滿百爲蝸所蝕、蝸前謂

ると大きなライオンがノソリノソリと近寄つて來る。

見物は、ヤア出た出た、ライオンが強いぞ、ウンニヤ虎が強よいやと勝手なことを云つて居ります、虎皮の中の男は、恐しさにジリ／＼と一歩一歩後へ退いて行く人の氣も知らぬ見物は虎公が弱いぞと囁して居る、いよ／＼追ひつめられてしまつて絶對絶命となつたので大聲に救ひを叫ぼうとする、ライオンはツと首を差出して『オイオイ驚くな俺も人間だよ』と云つたのでホット胸なでおろしたと云ふ話があります。

吾々は常に表面だけを見て、高いとか、低いとか、貴いとか、卑いとか思ふけれど、一ト皮剝いて見れば皆人間であるといふ事を知つて見たならば、羨やむことも呪ふこともいらぬと思ひます。『骸骨の上を裝ふて花見かな』で皮に執着し、自ら美醜をつくつて、廣い世の中を窮屈にして暮すことは愚の骨頂であります、この皮をめくつて、正しく自己を見、正しく人を視つて見ることは實に大切であります。

【四八】

之聲、後謂之蟬

とある。或は昔時支那人中の或者か、又は其の他の何人か、此の文中の一主簿のやうに、竹の筒にでも入れて黃州に持つて來たものであるかも知れぬ。又た太平廣記と云ふ書には

安邑縣北門縣人云、有一蝸如琵琶大、每出來不毒人、人猶是恐其靈積年矣

とある、これは蝸の化けものか。其れから古今醫統と云ふ書を見ると、蝸に刺された時の藥がある。

蝸怕膽礬、蛇怕雄黃、南方人家不可無雄黃、北方人家不可無膽礬、予親見北方人貨蝸螻藥者、以活蝸數十枚、置囊中、爲樣、取蝸安額上、或咬口中、逼之螻額舌、出血而立腫、即用膽礬、樣之、立消、觀者皆買、可見膽礬制蝸毒第一藥也

之れで見ると、蝸に刺された時は、膽礬を塗るのが妙藥であるらしい。之れも何にかの參考になるかも知れぬから附記して置く。

いろいろ帖

平田久維

警察新聞社長の神阪君、今でも變りものだが、警部時代には、もつと／＼語種をつくつた。

○ 何處の警察に行つても、ゆらり／＼と葉巻を燻らしてゐる。署長が給仕に命じて『神阪警部にちよつと』といふと、先生なか／＼召に應じない。給仕を顧みて曰く、『本日神阪警部は、重要事案に就て、慎重研究中。』そして何度使ひをやつても、曰く『前同斷。』

ない事になつたと思つて居る間に
向ふのライオンの棚の戸が開かれ

人を視つて見ることが實に大切
であります。

で、慎重研究中。」そして何處へ
ひをやつても、曰く『前同断：』

迷想冗記

藤村 徳一

恩給亡國

恩給亡國の議論は近頃新聞雑誌
の問題となり、組上に載せられて
將に調理されんとしつゝあり。政
府當局者も對岸の火災視するに忍
びずと見へ、調査會を組織し審議
せらるゝ様であるが、畢竟之れは
眞剣味を帯びたるものでなく、輿
論の喧囂を緩和せんが爲めの一種
の彌縫策であらふ。何となれば其
審査委員なるものは孰れも官吏に
して恩給を當然の所得と心得、之
れを受けることを自己の權利の如
く思ふて居る連中のみであるから
所謂飽魚の市其臭を知らぬと一般
なればである。

私は元來恩給といふ名目が氣に
喰はぬ、即ち恩給とは永年官吏と
して國家の爲めに忠勤を勵みたる
清廉潔白なる役人の在職中の功勞
に對し退職後に處する恩典で、換
言すれば特種の慰安法であらねば
ならぬのに現在の恩給は何年間官
吏として嚙り付き居たる者には其
在職中の勤怠、善惡を問はず千編
一律的に付與するものであるから
此恩給年限に到達することを唯一
の目標として一意専念上官の鼻息
を窺ひ、其逆鱗に觸れぬ様戰々競
々、大過なきを期し、午前九時よ
り午後四時迄を役所にて空費する
のが役人の通有性であるから、事
務は徒らに澁滞して能率の擧らざ
るは素より訝むに足らずである。
能率増進と事務の簡捷と政費節

約とに就ては多少の管見なきにあ
らざるも他日稿を改めて紙上を汚
さんとす。

須らく恩給なる名稱を廢して勤
續勞手當とか、勤續報酬金とか
いふ適切な實狀に近き名目を附
し、全時に國庫支辨を斷ち一般國
民の負擔とは全然別途の方法に於
て官公吏員共濟議會とでも名づけ
彼等相互間に於て救済するの方途
を講究し、下級吏員は所得の百分
の一より漸次上級者に比較的多額
の積立金を強要し、之れを得る資
格の如きも勤續年限に囚はれず、
退職の原因、在職中の成績、勤怠
及び資産、年齢其他の境遇を斟酌
考究して支給額を決定すること、
せば政府の財政には聊かの利害關
係もなく國民も敢て痛痒を感じぬ

◆清凉里から

高 島 種 夫

四月初めボブラの枝が淡青を帶
びて、柳並木がボツと霞む頃から
日曜毎に萌え出る柔草と、淡緑な
十松林の間を縫ふてフアン uniquely
の樂み場であつた清凉里ゴルフリ
ンクも、曉毎に露白う枝葉を捲く
風冷たくなるに従つて、漸く多眠
の期間に入り、此十一月二十二日
の納會マツチを最終として今年も
又閑寂な單なる郊外となるのであ
るが、顧みると今年桃紅含雨、柳
綠帶煙の頃から繰返されたお互
の競技と成績の跡がどうなつて居
るか。

カッパ捧持者

尾崎カッパ グリーン

昌徳宮カッパ 西村(十八銀行)

日糖カッパ(とり切り) 同

山十カッパ(同) ロビンソン

ので従つて論議の種にもならない
のである。

現在業已に一年一億五千萬圓を
要し、尙ほ年々歳々増加するのみ
なる恩給制度を存置しては恩給亡
國たることは識者の説明を俟つ迄
もなく、火を賭るよりも燎かなり
である。即ち之れを推論すれば國
を亡ぼすものは官吏であるといふ
結果に到達するのではあるまいか
一億五千萬圓といへば政府歳出
の約一割弱に當る巨額の支出を否
應なしに天引せらるゝ、國民は實
際迷惑至極である。さりとて今遽
かに之れを廢止することも不可能
である以上、どうしても何か別途
に良法明案を考究して國民の苦痛
を除去する事は爲政者の當然荷ふ
べき責務であらうと惟ふ。

井上カッパ 奥田

有賀カッパ 渡邊(農務課長)

全鮮選手權カッパ 中村(寅)

王世子カッパ 篠田

鈴木カッパ 中村(寅)

總督カッパ 同

といふ成績で、昨年はさしもの
に優勢を誇つて居た、京電組が今
年は全部を吐き出して、一個もと
らなかつたなどは、どうしたこと
か。他が進んだのか、休養時代に
あるのか。おかしい位である。そ
れは兎も角もとして此の他技の進
歩著しくハンデキャップの最も進
んだ人では西村君の二十から一舉
に十二と八迄を飛躍したのと、ロ
ビンソン君の二十二から十四に、
渡邊君の十六から十二になどは一
きわ目立つた進境で、一時の天才
が逆轉後退した連中もないではな
いが、いづれ総勘定は亦た來ん年
のこと。

妻君禮讃

廣江澤次郎

米國のように女權擴張され、妻君は横暴を極めて困つた者だ、紐育の社交界では上流婦人が、愛人の數の多きを誇りとするとかや婦徳の亂脈沙汰の限りと申すべし、纏て日本の主婦は如何？、米國流のマダムも絶無とは申しかねるが概して因習に囚はれ、傳統を尊重し、上長にも能く仕へ嬉々として小面倒極まりなき小供の躾育に任じ、貞淑溫良と稱し得る、愚妻も其亞流の一人！、乞ふ椰喻する勿れ、鼻の下の長さ幾千丈などい。

妻を理解し、同情し、其勞苦を感謝して居ても、折々關白の特權を縱横に發揮して、可愛い女房を凹ます、洵に氣の毒な次第だ相濟まぬと、後で考へる場合もあるが、婦に託を云ふは關白の威嚴に關す？、原敬さんじゃないが、内密に『恐慄に存する』位の所で蔭ながら陳謝して置く。

愚妻は元來姉妹二人であつた、然るに妹が四人の子供を残し九月十九日産死した、其善後策にと岳父母から歸東を促す急、此夏東京から歸り又上京せねばならぬ妻の心事は憫察の價値あり。

實妹の逝し實家をば訪はなんと又も東都に妻は旅立ち
母と私と妻と三人相談の結果、當年三歳の腕白坊主武夫は京城に置いて、妻單身東上と決定、十月廿日出發。

京城驛頭にて母に別れし武夫は無關心、嬉々として祖母のお守で遊び廻つて居た、然るに流石に夜には、『母アちゃん々々』と泣慕ふには、祖母も私も他の小供達も閉口した、夜が更け行くに正比例して泣叫ぶ聲が深刻だ。

母戀し母に行かんと母慕ふ
泣く兒に憫む秋の眞夜中
是は私の其時の實感である。子を以て知る親の恩？、子供を育て上げると云ふは、大事業である事を私は痛感した、而して此大事業が妻が擔任して居る事に氣附いた、ゴ機嫌のよい日もあつたが、ゴ機嫌頗る斜で、家内中を手古摺らせ抜いた武夫も、十一月八日妻の歸城と共に平調に復し、私の内には再び春風駘蕩！茲に女房を禮讃し奉り、禁足令も解除された事故ドリヤ滿州へ出懸けましょうか（十一月十四日）

此頃の句

中村烏堂

山木々の黄み雲おけば風の出る晝
四方も河床を渡り今日の行く門
魚の一塊も吊す柿の三ツ四ツ
朝から建たしく音も小菊の日南
酒肆の籠火に映ゆる人々の夜は
夜の水音の遠くなれば鳥啼の山に
する風のまん
庭の松櫻の木の股にも大根干と
さきの獵人の筒音の山路の淺く
雀の夕鳴の木の葉が落ちてしまふ
居間にさす陽の新聞たゞまれ眼鏡
とある
叱られし子灯の下に坐つてをる
瓶の菊枯れくしに晝に捨てる

【150】

◆奥様訪問記

山口のぼる

十一月號の川上さんの奥さんの原稿、大誤謬をやつてゐたので、係りである自分が、お詫びに行くことになる。なか／＼の大役だ。おまけに、男子の方と違ふから心中ビク／＼もので、舍宅の方へ伺ふ。

○
女中さんに旨を通ずると、まああがれとの御返事、いよ／＼窮しておど／＼し乍らお坐敷へ通ると若いうつくしい川上夫人『まあ、あの事でわざ／＼？、それは却つて御迷惑をかけまして』いたわるやうにいはいれるので、改まつてお詫も何も出来ない。口をもぐ／＼させてみると、話頭を轉じて、いろ／＼のお話が出る。少しも氣にかけてはみられないやう、晴れやかにもてなされる。やつと救はれたやうな氣で、そこ／＼に玄關を罷りする。おやさしい方だとしみ／＼思つた。

○
和田（商銀）さんの奥さんは、ハキ／＼して居られる。御在宅だと乾度お目にかゝれる。大底洋服でそれがまたピタリと似合つて居られる。原稿は内所で頂くが、それが出ると、主人公が目つけ『假名使ひがどうだの、斯うだの』と文句が出るらしい。それなら御自身で書かれるといふんだが、それは仲々やらない。要するに斯ういふ結論になる。奥さんは、わかつた方だが、旦那は無理解だ』と。但しこの稿『旦那讀むべからず』呵々。

野球

審判迷語

丸中徳三

理想的審判官とは？

審判は良き目、豊かな常識、感
應し易き神経、確固たる態度、野
球全般に亘る智識等の合成である
従つて以上の諸要素を具備せる人
にこそ審判と稱して差支ないと
嘗ては米國球界随一の名審判ピリ
ー、エバーンスが、其著『ハウト
ウアンパイヤ』の中で言つてゐる
エバーンスが言つたからと言つ
てそれを金科玉條としようと言ふ
のではない、唯職業的審判官も私
達素人審判員と同じ信條しか持つ
てゐないのに物足らなさを覺えま
す、が以上の言は審判をやる人の
誰もが皆感得し得る事なのです、
私は更に反省と研究、そして嚴の
如き默々たる態度を持し得る人こ
そ名審判になれ得る人だと思ふ。

東都球界の最高批評家の一人碩
鐵橋戸氏は曰ふ『審判の第一要素
は公明正大の四字に盡き、生れ
乍ら我執に強く一方に偏愛する人
餘り勝氣な人にはこの職は完全
に務まるものでない、されば人はグ
ラウンドの上にプレーする選手の
行動に依つてその人を透視し得る
といふが、審判に立つ時一層その
人の性格が赤裸々になる事をも看
過してならない』と。

私はこれに同感を禁じ得ない、
そうして私の過去の審判生活を見
た人が赤裸々の私を知つてゐるの
ではないかと思つて審判生活に嫌

思さえてくる。

私のたわごと

私は大正十二年の秋頃から體育
協會の諸岡氏に引張り出され今年
で四年審判をやつてゐます。

四年間の一度だつて投手の一球
をも見逃さないで正しき判定を下
し得たと思つた事はない、今年こ
そ今年こそとシーズン初頭に心懸
けながらも二年、三年、未だ私の
淡き願望は満されません。

矢張り人間だ、神でない、或
る一つの判定に對して批評家が、
フアンが斯ふ言つて私の爲した誤
審を慰めて私をして少しでも悲み
の淵から自己満足への陶醉に導か
うとしてくれます。

物足りなさや盡きぬ哀愁とが私
には無限に擴がつて、選手にフア
ンに頼つたくなるのです。

時間に餘裕のある限り私は小さ
いながら努力精進の道を辿つた、
ですが矢張り誤審は免かれぬ、目
まぐるしい球道の變化、カーブの
ブレイキの大小、ストライク!!ボ
ール!!。

噫、思つてもよく圖々しく審判
としてプロテリターを着け、マス
クが冠れたるよ!!。
餘りに私は野球の神に對して胃
潰ではなかつたか。

如何にも自信ありそうにやりな
がら嘗て一つの試合すら完全に審
判したといふ事を思つた事はあり
ません。

が私をして尙審判としてグラウ
ンドに驅馳せしむる最も大きな原
因は誘惑があるからです。

とても猛烈な誘惑なのです。

一つの試合を審判した後、常に
悔恨にくれる私を、その誘惑が
：審判を依頼された時強く引き付

けて仕舞ふのです。それは『コー
ナーの誘惑』一寸御分りにならな
いでせう。

主としてアウトコーナーの誘惑
なのです、そのアウトコーナーの
誘惑が、いつも私を招いてゐる様
な氣がするのです。

投手と打者とそうして私の判定
がピタリ合致する事があります。
プレートの外角の線を白い球がす
うと消して行きます、それらが私
をして敢て審判員としてグラウン
ドに立たせるのです。

その愉快さが忘れ得ずスボウツ
の爲、野球の爲といふ美名に隠れ
て審判道を冒瀆しながら自分自身
の快適に浸るのです。

審判協會

野球審判協會が日本に一つあり
ます、内鮮を通じて一つあります
朝鮮野球審判協會がそれです。

が悲しいかな今春創立以來四面
楚歌の裡に年を越さうとしてゐま
す。生みの苦しみをして下すつた
高橋會長、諸岡氏の熱と意氣と京
日寺田氏等の好意に感じ、來年も
繼續し組織内容の充實を圖り名實
ともに具備せるものとしようとの
決議が先日協會員の會合の時なさ
れた。

私達は貧しい何物をも成し得な
い事を知つてゐます。只管京城否
全鮮多數先覺者、並に一般フアン
諸兄の御指導を祈つて己みません

審判名打者ならず

私に或る小學生が『丸中さんあ
なたは審判をしていろんな球を見
てゐる癖に三振バッターです』と
少年らしく語りました。

『それはね球を餘りよく見過ぎ
るから迷つて見逃して終うので
す』少年に答えた私の窮餘の一言

が如何に貧弱なりしことよ!!そしてその言葉を眞實らしく翻録せんとした私の態度の如何に物淋しかりしことよ!!

恵まれざるものの悲哀が込み込み感じられた、捨つべきものはバ

名刀祐光と

森さん

田村直一

武道氣狂ひで通つてゐる鍾路署の森署長、其少壯時代備前の岡山で當時日本一の稱ある奥村左近太夫先生の訓陶を受けたものである森さん朝鮮の警察に來ることを止して奥村先生と東京へ行つて居たならば今頃は確かに日本一の大先生である、其の時代から既に將來の日本一を以つて自他共に相許して居たのだと云ふ。

故に劍道に於ける森さんの熱心振りは並大抵な騒ぎではない、従つて所謂劍道の技術ばかりではなく、腹からの劍道家武道家として名聲が高い。

此の森さんと、備前の名刀祐光とが付き纏つた二つの奇話がある其一つは森さんがまだ小僧時代の話、時は明治の三十四年、世は太平に馴れた輕佻浮華の眞最中、汗臭い面籠手をつけて劍術などやるものは天保錢だの、氣狂ひだのといはれた時代、警察官や監獄官ですら、強制しなければ稽古をせぬと云ふ頃、一般に武道は廢れてゐたが。

持つて生れた氣象と飯より好きな鑒劍、森さん人が何と云つても

ツトなりか。

少年名は有賀君、現南大門小學校の名捕手、有賀君後年大選手となるも審判員となる勿れ。

禿筆、迷語數行、敢て社友諸賢の御寛容を願ひます。

構つたものでない、一人で氣狂ひになつてゐた。

ところが或日のこと、未知の人が訪れて、一振りの劍を差出して曰く、これは所も知らぬ名も知らぬ一老人より頼まれて貴下にお届けする品である、どうか御受納が願ひたい。

送り主の口上には、現今世道人心著しく輕佻浮華に流れつゝある折柄、我が武道の爲めに精進される貴下のお心ざしに感謝する、自分は一介の素浪人ではあるが、時めく時代には二十振も三十振もの刀劍を秘藏愛玩してゐた、しかし只今は貧忙此上もなく、所持の銘刀も賣盡して、今や手元に、命に掛けてもと思ふた家傳の刀劍が漸く二振りある、自分が生涯最も愛用したものである。

一は自分の子孫の爲に残し、一は即ち此の刀である、御覽の通り貧忙の揚句、此の刀も、作り付け一切は黄金にかへて、今は只残る黒鞘と中身だけである。

飾りはなく共、中身は武士の魂どうか此の中身を、貴下のお手許に御愛護下さる様謹んで贈呈すると云ふのである。

贈り主の名前は旭東一老人との以外には更に分らない、再三辭退したが中々承知せず無理に置いて使の男は去つた、森さん當時劍術は出來ても刀には盲目同然、早速奥村先生の高弟阿部守衛と云ふ先

生に鑑定を乞ふたところ、中々の逸物備前祐光の作だと分つた、其後贈り主や使の人を、お職掌柄の警察手配で探したがサツパリ行衛は不明で今日迄其儘。

亦最近には、柿原檢事正が平壤へ轉任の際、森さんの置土産として贈られた無銘の小刀、此程名家の鑑定に依ると是れも正しく備前の祐光である。

森さんは需めずして、祐光の大一小一腰が揃つた、何れも奇縁奇遇である、此の前帝室林野局長官に榮轉した三矢警務局長も銘刀を贈つてゐる、森さんの武男傳を書かうものなれば、雜筆一冊全部使つても通もである。

一度び恩師奥村先生の事や武道の話に熱中すれば、六尺豊かな巨體を起し、體の構へや手眞似が伴ふ。が然し、自慢話は中々やらぬ。筆者も數年口説いて漸くこれだけ聞いた。

◆十五郎の話

吉田 莊一

◎工藤武城氏の病院では、久しい前から、刑餘の人間を下男に使う習慣で、その成績さへよければ女房を世話して、それ／＼自立させることにしてゐる。

◎面白いのは、その女房の方でこれも亦前科何犯といふユウイのものがある。が意外に成績がよく、院長の目鏡に外れたのは、殆んどないといふ。

◎最近に、十五郎といふのが、同じく女房を賣つて、小さい店を出した。この十五といふのは、同氏刑餘の人を使ひ出してからの番號で、院長曰く『これだけは、當人に内所だよ、いゝかい』

二つのうどん

北村正夫

晩秋の拾時を過ぎた或る夜の事であつた。表門を閉めた後の店に倦怠と疲勞したらしい店員が二三名淡い間接照明の電光を浴びて雑談に耽つて居た。

一人の鮮童が何事かを口走つて通り出て行つた。間もなくしてかへつて来た鮮童は寢間へ行つた。少しばかりしておいしさうな香のする二杯のうどんは近くの出前持によつて運ばれた。

注文主が誰かといふ事を知らない店に居たものが出前持が誰かといふ事を知らないで困つて居るために、そのまゝ引受けて食つてしまつた。空になつた二個のうどん鉢が無難作に投出された箸と共に置かれて居た。

そこへ二階へ行つた鮮童が降りて誰のだといふ事を言つて又二階へ。しまつたと思つた二人のものは何気なく他の鮮童にいひ付けて炊事場へ運ばせて持つて来たからと言はせた。

来たものと思つた注文主は炊事場へ行つて見ると、空になつて居るので、驚くよりか悪戯したといふ一種の腹立たしさを思つたらしい。

店に來て火鉢のまはりに居たそれとは何の關係もない鮮童を、イキナリ平手でイヤといふ程擲りつけてブリ／＼怒つて裏へ行つた。

あとで、擲ぐられた鮮童は二階へ行く時、いたづらをした一人の鮮人の店員に擲られた忌はしさに何事か鮮語で詮言葉。

しばらくして二階へ行つた二人の鮮人の店員は鮮童のすゝり泣くのを聞いた。上つて行つて見ると、その鮮童は、敢なく擲ぐられてもそれを報復し得ない自己を悲み忿恨に燃へた眼に相手を見守つて居る。口惜しさの涙はハラ／＼と流れてゐる。それ迄に隣の部屋の店員が仲裁と共に鮮人店員の不心得を諄々といさめて居た。

妙な感情は四五人を取巻いて、しばらくは暗澹たる沈黙劇。涙にぬれ乍ら夫でも靜かな眼に落ちたと、下へ降りた鮮人店員は仲裁者に向つて口論の火蓋を切つた。

良心の呵責と興奮と激怒の渦中に居るために前後を考へる餘裕を持たなかつたらしい。

言葉は争鬭するものの常次第に下劣になつて行く、口を衝く言葉や調子に連れて激して行つた。

口論から腕力へ、手紙を書いてゐた仲裁者に向つて腕力争鬭は開始された。

一撃……しかし擲ぐりそこなつたいまいましき、更に再撃……再び體をかはしたために空に流れる手は机を打つた、二度の失敗に氣拔けた鮮人店員は拾言葉で二階へ。

争鬭の跡の静けさ、靜に時計の振子の音は寂寞の店へ流れる。正拾時十分過ぎ。

翌朝の事鮮人の雜役夫に向つて詳しく話をしたらしい、おとなしい彼も怒つた。

鮮人店員に向つて謝罪せよと迫つた。

危なかしい雲行となつた、嵐前の静けさ、一語は一語と語呂は崩れる。争は更に始まる、狭いところ……七八人居る中で取組み、分ける事も何も出来ない、滅多打ちの手の雨、力と力との戦は遂に小さい腰掛を振上げた。

投下す一瞬！腰掛は見へなくなつた。

反目してゐる二人は、やゝあつて双方へわかれなければならなかつた。

次に繼續する意志はお互にあつたらしい。

その次への中間の静けさ……風雲は更に危険に傾いて行つた……

隠れた人々

山口のぼる

◎貫井道峰といふ畫家がある、大和町の二丁目に住んでゐる。中村烏堂氏に依ると、その技倆はタイしたものといふ。

◎烏堂氏の所で、鯉を書いたのを見たが、なるほど生氣潑刺たるものだと思つた。

◎その鯉を平壤覆審法院の岡本至徳氏が欲しがつてゐるといふ。

◎烏堂氏曰く「鮮展も、貫井氏くらゐの人が、一枚加はると大分見ごたえがするんですがね」……その貫井氏當年三十三歳。

◎崇三洞に、清和園といつて、農事遊園地がある。主人の名はちよつと思ひ出さぬが、その遊園地の施設も、ちよつと變つて面白く殊に主人の藏幅や、骨董物の中に頗る珍なものがある。主人は至つて話好きだ、物好きな方は、天氣の良い日、ぶら／＼と訪ねてごらん下さい。

【五三】

無駄話

永樂町人

金

鑛業會の徳野さんと出合ふと、
どつちからともなく、こんな話を
初めるのである。

『金が欲しいな』

『ふーむ、三三萬ね』

『誰かくれさうなもんだが…』

『僕が持つてるとね…』

すると隣室の夫人が、クス／＼と
笑ひ出して

『おハコが初まりましたね、ふ
ところ手で、釣りに行くやうな
…』

こゝに至つて、兩人ベチャンコと
なる。

考へて見ると、十年この話をや
つてゐる。そしてどのつまり夫
人の一撃でグツとつまること、正
に十年一日の如し。よく勤勉した
ものだ。

來年もまた、寄ると、こいつを
繰返さねばならぬかと思ふと、さ
すがに疲勞を感じますね徳野さん

螢 川

本田螢川を廿年も知つてゐる。
が、いつだつて螢川が職業を持つ
てゐたことがない。何年たつても
ぶらり／＼とトンボのやうに遊戈
してゐる。

友達のとこから米や味噌を徴發
して『君、あれで時等米かね、ハ
ン、それにしては石が多い』
夏などは、リユーツとした細紋
付、いつだつてフカ／＼と香りの
高い葉巻を、口にあてゐないこ
とがない。

こんなことがあつた。自分のと
こから白米を新聞紙に包んで持つ
て歸る。途中遊廊の中を通ると、
女子供がクツ／＼と笑ふので、變
に思つて、ふいと、うしろを振向
くと、十羽ばかりの鶏が、一列縦
隊をつくつて、螢川のを追つて
ゐる。ハテナと思つて、ふとこ
ろを搜ぐると、例の白米がボロリ
／＼とこぼれて、それが歩く先き
／＼の鶏を、さそひ出したと判つ
た。叱／＼と、やつとのことで
追ひ拂つたが、イヤ近ごろの大失
敗だつた——。

斯う話して、自分等夫婦に腹を
抱へさせ、御意の變らぬ中にと、
またも白米を新聞に包ませる。

僕は螢川の藝術に感心した。こ
れなら一ツの職業だ。むろん細紋
付を一着に及ぶ價值があると。

徳 さん

魚屋の徳さんは、壽町に住んで
ゐた。三十六七の、一寸いなせな
男だつた。

初めは夜分だけやつて來たが、
のちには朝魚を賣りに來て、それ
なり荷物をはつたらかしにして、
ずる／＼と上へあがり込んで『且
那、けふはいそがしい。たつた一
番だけ…』さういつて初めると
とう／＼一日をワイにしてしまふ

『徳さん魚が腐るぢやないか』
といふと『なに、けふはおやぢの
命日で…』ハッハッほんの四を三
つばかり叩いて、例のおよび腰で

盤面を睨む『ハッハ、こいつばか
りは、飯より好きで…』ハッハ
とう／＼得意先を失つて、店を
た／＼でしめた。『やめたさう
だね』といふと、つるりと額をな
で、ハッハ、とう／＼指しつぶ
してしまひました……ハッハ』
徳さんの指し友達に、京劇裏の

【五四】

山田の印刷屋があつた。もう六十
に手が届いて、白髪まぢりのワッ
髭を、妙に八字にピンと刎ねてゐ
る。何所かゴツ／＼した老人で、
局に向つて、昂然と肩をそびやか
してゐるところ、粗製の荻生袷
といひたい風采。

負けながら、ひとりで樂觀して
ゐる『ワッフ、敵はいよ／＼落城
かな、徳さんまだ將棋はわかいぜ
ワッフ』そして自分の方が、一足
さきに詰んでしまふ。『どうも歳
をとると、見落しといふ奴があつ
てな。なに少し締めてかゝると、
魚徳なんざあ……ワッフ』

間もなく徳さんが、商賣をやめ
る。次いで山田老人も店をた／＼
『どうしたんです』と訊くと『ワ
ッフ、魚屋の飛び火がワッシとこ
までやつて來て……ワッフ』

編輯後記

一 記者

◎正月號の原稿五日までに締切
りたと思つてゐるが、ヤハリ七
八日になるだらう。奮つて御寄稿
を願ひます。

◎二月號の原稿は、十二月末か
ら正月十日にかけて集めるので、
これかた一年中の難事業。年末年
始を御旅行なさる方など、是非御
心がけ下さるやうに……。

大正十五年十一月廿八日印刷
大正十五年十二月一日發行

一部定價金四十五錢

京城府和泉町一七〇

發行所 京城府和泉町一七〇

印刷所 京城府和泉町一七〇

發行所 京城府和泉町一七〇

電話光化門三〇六

青い地球を
ロケットで
とがない。

徳さんの指し友達に、京劇裏の

電話光化機 三〇六

電鐵營業哩(廣軌) 三三哩

水力發電出力 八、七五〇基

金剛山電氣株式會社

本社 江原道鐵原

出張所 京城府外往十里

取締役社長 工學博士 久米民之助

専務取締役 マスターオブサイエンス 山内伊平

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋装に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて薄利で御便利に御提供申します、何卒「丁子屋の洋服」同様御評判の程御願申上げます。

▲雜貨部品目

帽子、ワイシャツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首巻、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局

長二二二六
三六四二
三九二二
七二〇九
三番

休日無し毎日夜九時迄營業

御用の節は店內雜貨部御呼出被下度

市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獣臭のない事は一度召上った方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用

陸軍衛戍病院御用

京城府各病院御用

平山牧場

電話光化門二三三番
京城東小門外

金剛 煎餅金剛
 金剛 羊羹金剛
 金剛 饅頭山

金剛山產松實松花應菓

金剛飴

龜屋商店

電話 二七七一
 本局 四七五番

京二 城本 町目

金剛 柏子菓
松の實 妙り
 金剛 柏子菓
朝の實 菓子
 金剛 おこし
 金剛 しるこ

著 收 上 井

く 聴 に 島 半

へ 者 讀 り よ 者 著

疊に私がこの著作の豫告をすると、遠近各方面の同情者より本屋を開業したその店開きを祝ふ旨のお言葉を擲山頂きました。本屋を始めたのでは、さらくなく、自費出版をして、扶持に離れた償ひをしようといふのですから、應分の御同情を願ひたいのです、いづれは筆の力でなければ生きる道のない私です、その内必ずや筆政壇上に誕生の日があらうと存じます。

本書は朝鮮出版界のレコードといひ得るに十分な體裁内容と編纂上の技巧を用ひ、六百餘頁に、諸先輩の漫畫筆蹟を挿入しただけでも、高いものではないと思ひます、文學愛好の青年男女へも、教育の庭にも、家庭へも、倫理教育のテキストブックではありませんが、きつと何かの贈物をなし得るものと思ひます。

也 錢 十 五 圓 三 金 價 定

江湖の熟讀と待つ

いよく出づ

◎銘仙と

毛糸◎

秩
ち、ぬや

堀内満輔

電話本局 八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

獵

好季來る

今年の狩獵地は!!

京釜線 天安附近

京義線 汗浦南川附近

京元線 平康月井里附近

京仁線 素砂附近

湖南線 咸悅江景附近

銃獵家と

千哩券の利用

東洋最初の試みて狩獵家にとつて便利で然も經濟的な千哩券の利用をお勧め致します

千哩券

千哩分一冊綴

通用一ヶ年間

二等 三拾六圓

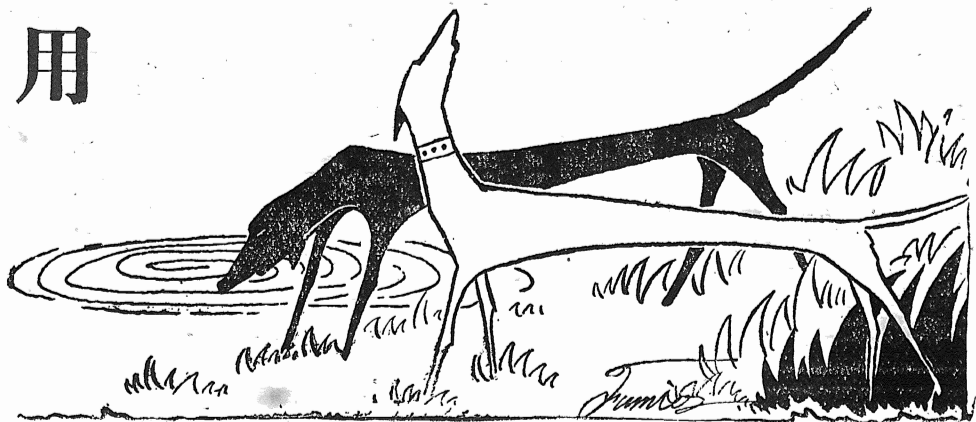
普通旅客運賃の

三等 二拾圓

二割引

何處の驛でも乗車區間の哩券で乗車券と引換ふ事が出來ます

朝鮮總督府鐵道局



十二月の三越

一日より

店內一齊

大賣出し



商品券

贈るに。便利！
受けて。重寶！
の御利用を

御贈答大賣出し

黃海道物産宣傳即賣會

一日より
三階

大歳の市

十五日より
下階

新年用食器陳列會

十五日より
三階

羽子板陳列會 同

クリスマスプレゼント賣出し 同

京城 三越呉服店